0

その名は
ミラクルス

Miracles!

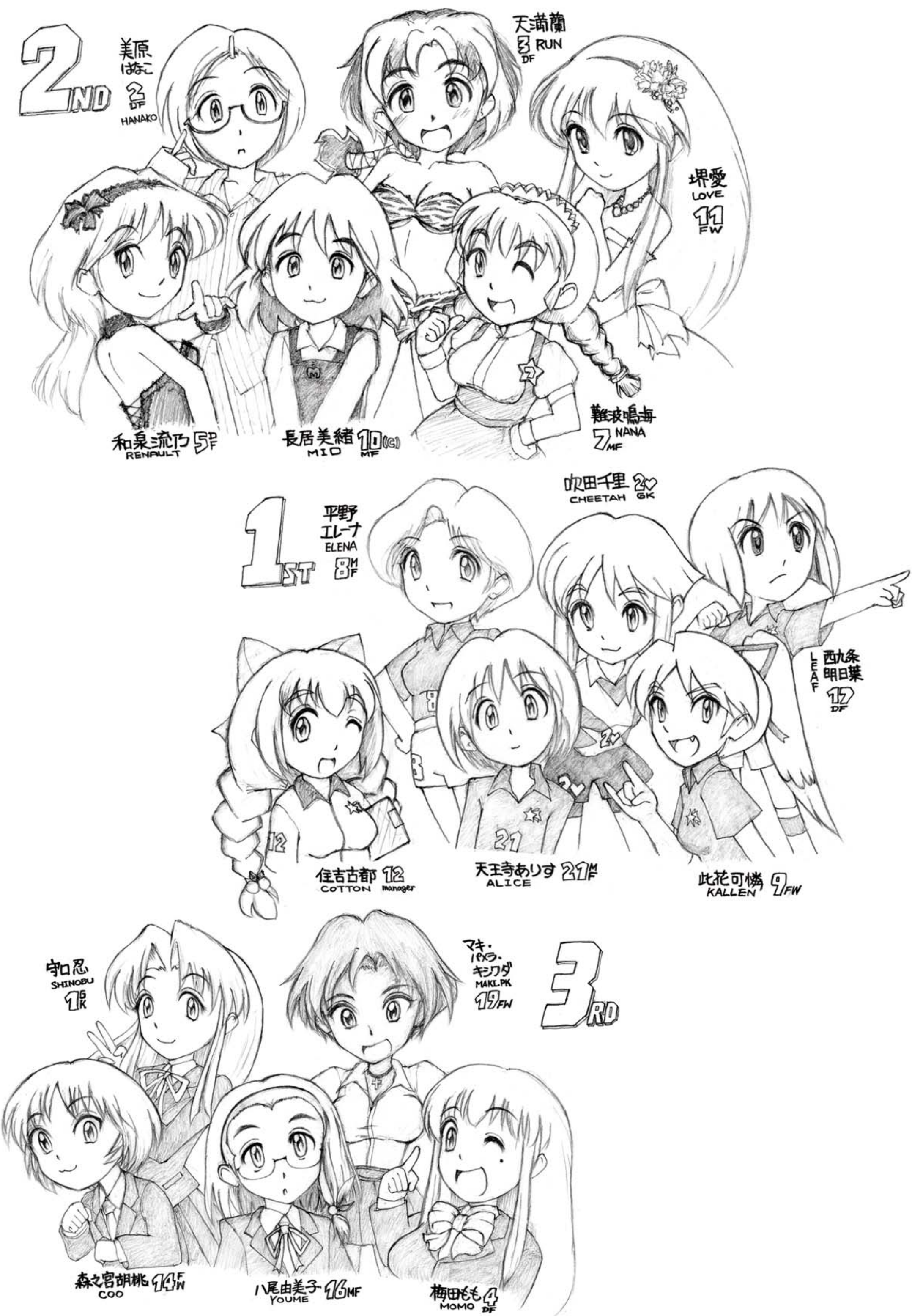
ミラクルズ

ながたかずひさ

Miracles!

Episode 0

- その名はミラクルズ -


2ND
美原 はなこ 2 DF HANAKO
天満蘭 3 DF RUN
堺愛 LOVE 11 FW
和泉流乃 5 DF RENAULT
長居美緒 10 (C) MF MIO
難波鳴海 NANA 7 MF
1ST
平野 エレーナ ELENA 8 MF
吹田千里 2♥ CHEETAH GK
西九条 明日葉 LEAF 17 DF
住吉古都 12 COTTON manager
天王寺ありす 21 MF ALICE
此花可憐 9 FW KALLEN
守口忍 SHINOBU 1 GK
マキ・パメラ・キシワダ MAKI.PK 19 FW
3RD
森之宮胡桃 14 FW COO
八尾由美子 16 MF YOUME
梅田もも 4 DF MOMO

■あらすじでござる

みなさまお馴染み女子サッカー・クラブ「ミラクルズ」は、現在年に一度の全国オープン大会「クイーンズカップ」全国大会出場目指し、爆進中です。

今回は時計の針を巻き戻し、そのミラクルズが、ミラクルズになった頃のおはなし。

いま明かされる、男前コーチ・上町大地の過去と現在。愛を亡くした少年が、もう一度、心の種を芽生えさせるまでの物語です。

■目次

■1　静かな上町家
■2　ワールドカップ・ジュニアユース
■3　美沙と美緒
■4　温かな上町家
■5　閉じる世界
■6　ナナの無謀
■7　D・S・C
■8　迷走
■9　企画屋
■10　美の四姉妹
■11　逡巡
■12　頼りない船出
■13　真打ち登場
■14　追撃
■15　祈り
■16　その名はミラクルズ

【本日の主演】
・上町大地（うえまち・だいち）
　寂しい運命に神を呪い愛を捨てた少年のあの日。しかし彼の心の中には、ちいさな種がじっと、雨の降る日を待っていた。
　明日のミラクルズ・コーチ。
　サッカー戦術と乙女心掌握の天才。

【ミラクルズ！選手】
【2年生】
・長居美緒（ながい・みお/みー）　MF 10 (c)
　一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。
　パーフェクトボランチ、キャプテン。
・難波鳴海（なんば・なるみ/ナナ）　MF 7
　ユース代表を張るサッカー小娘。自分とみんなのために２４時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。
・和泉流乃（いずみ・るの/るー）　DF 5
　センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。
　光速サイドアタッカー、副将。
・天満蘭（てんま・らん）　DF 3
　天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラルガール。
　超攻撃的パワフルリベロ。
・美原はなこ（みはら・はなこ/はな）　DF 2
　神経質でもうるさくても、学年トップのど根性秀才、作戦参謀兼任。
　クレバーなスピードDF。
・堺愛（さかいあい/プリンセス）　FW 11
　無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、お茶目。
　フィジカル自慢のパワーFW。
【3年生】
・梅田もも（うめだ・もも）　DF 4
　B 三桁のだいまないとばでーを揺すぶりながらバイキングを荒らし回るスイーツ魔神。フェアプレー・DF リーダー。
・森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ/くー）　FW 14
　クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。

高々度戦闘爆撃センターFW。
・守口忍（もりぐち・しのぶ） GK 1
時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。
不屈の守護神。
・八尾由美子（やお・ゆみこ/ユミ姉） MF 16
頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝っ玉は天下一品。
守備職人、MF・DF。
・マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きしわだ/PK） MF 19
ブラジル人日系４世留学生。誰にも止められないだんじりサンバ娘。
トリッキーウイング。
【1年生】
・此花可憐（このはな・かれん/カレ） FW 9
暴力的でド単純、でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。ユース代表の逸材。エース・ストライカー。
・吹田千里（すいた・ちさと/チータ） GK 20
ボーイッシュ No.1 元気も一番、いつもチームのムードメーカー。
FW 兼任の超反応 GK。
・平野エレーナ（ひらの・えれーな/エレ） MF 8
日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔らか、微笑み一杯。
大型 MF、中盤の働き蜂。
・天王寺ありす（てんのうじ・ありす/あー） MF 21
砂糖菓子少女っぽいが底の知れないキャパを持つ天才少女。
攻撃的 MF、ファンタジスタ。
・西九条明日葉（にしくじょう・あすは/はっぱ） DF 17
天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。
鉄壁の DF、右サイドバック。
・住吉古都（すみよし・こと/こっとん） Manager
ドジで泣き虫、でも見た目に似合わず思慮深い、縁の下の力持ち。
心配りのマネージャー。
【男子陣】
・空堀三十六（からぼり・さとる） ２年
冴える頭脳に軽い足腰、チームのいじられ役盛り上げ役。ミラクルズ・チームプロデューサー。

・千林哲哉（せんばやし・てつや）　２年
　応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。ちょい単純だが豪放磊落、情に厚い。声がでかい。
・大正太陽（たいしょう・たいよう）　２年
　高校生Ｊリーガーにて古くからの大地の親友。超美男子だがかなりの女嫌い。
【家族】
・上町十三（うえまち・じゅうぞう）
　大地の父。元サッカー選手。
・上町広海（うえまち・ひろみ）
　大地の弟。三つ下。
・長居美亜（ながい・みあ）
　長居家次女。超美人だが中身少し男っぽい。
・長居美憂（ながい・みう）
　長居家三女。インテリ神秘系。
・長居美唯（ながい・みい）
　長居家四女。甘えん坊で優しい。

・上町美沙（うえまち・みさ）
　大地の母。彼を暖かく見守り続けた。

■1　静かな上町家

母が死んだ。

それは、実際にそうなるまでに想像していたよりもずっと悲しくなくて、ずっと寂しかった。

……なんのために、こんなことをやってきたのだろう？

誰もいないリビングで、不意にその問いに襲われた。

……ぜんぶ、むだだった。

もちろん頭は反論する、成し遂げたことの大きさを説明しようとする、仲間や恩師の激励を思い出させる、だがそれらさえもが、

無駄だった。

そんなものこれっぽっちも要らなかった。
ありがたいけど、そんなもの、全然。
ただ、かあさんが居てくれたら、それだけで、よかったのに。
ただそれだけ、それだけの願いなのに……

わかってはいたが、「奇跡」など起きぬ。
ほぼ予定通り、母は母らしい几帳面さで、お医者さんの言うとおりのスケジュールで、その生を終えた。まるでそうすることが、義務だったかのように。

……ほんとうは、それもわかっていたのだろう。
あの叩きのめされた日、どうしようもない壁に跳ね返されたあの笛の瞬間、ぼくは、「どうしようもないこと」が世の中にあるということを、体全体で知った。

……しかたの、ないことだ。
そしてこれからも、こういう「しかたのないこと」ばかりが、生きていく上に起こり続ける。

そんなくだらない世界に、居る必要は、あるのか？

……さりとて。

そうでない選択を選べば、父が怒鳴り弟は……あいつは優しいから、泣いてくれるだろう。そして、天国で……行ければ、だけど……母を悲しませるに違いない。

ならば、これから先長々と、このつまらない世界に、愛想笑いを浮かべ続けなければならないのか？

五十年、六十年。

絶望的だな。

お釈迦様の話を聞いたことがある。なに不自由ない王子様だったお釈迦様が城の外へ出る。四つの門から出ては、心を突き崩されるような悲しみに出会い、また城に戻る。その悲しみの名は、生・老・病・死。

幼い僕はその中に「生」があることが理解できなかったけど、今ならわかる。

これが生の苦しみであり、その他の三つよりもなお苦しい。

なにをしてもなんにもならぬ、この馬鹿げた世界に生き続けなければならないことが。

『……ふっ……
……ばかばかしすぎる』

――声に吐いてみれば少しだけ出て行く心のなかの黒い雲。毎夜何度も何度も繰り返す問いとその答えにならぬ中断を今晩も繰り返して、上町大地は、意識を止めた。

それは、「眠り」というような幸せな、ものではなかった。

§

「……ごちそうさま」
「ういッス」
「あれにいちゃんもういいの!?　今日のご飯うまいよ！」
「オウ、そおだろ、こっちに居る間にうめぇコメ喰っとかなきゃとおもってな、取

り寄せたんだ取り寄せ。なんかスゲーの」
「マジで!?　どおりでうめぇえぇ！」
「わはは。ま、向こうもコメはそこそこイケんだけどな、こっちのコメとはタイプが違うからなぁ」
「えっ、米あんの!?」
「パエリアとか、あるじゃろ！　お前なあ、これ読んどけってガイドブック渡しただろ!?」
「読んだ読んだ、バルサとレアルのとこ！」
「そこだけかよ！」
「……」

相変わらず賑やかな父と弟を食卓に残し、大地は部屋へ向かった。

「……にいちゃん、大丈夫かな」
「……うむ……」
「とおちゃん、やっぱムリヤリにいちゃん連れてくっきゃないよ」
「いや。

……あいつはアイツの血が濃くてな、言い出したら梃子でも動かねえから、無理だ」
「とおちゃんだってそうじゃん」
「とおちゃんより酷いんだ。まあお前にゃまだわからん話になるから省くがな、まーアイツは本物の頑固者で……そっくりだ」
「オレもかあちゃんの血の方がよかったなぁ！」
「おれもだ」
「なに言ってんだよ……」
「ハハハ」

十三、という少し古風な名を持つ父は、バンカラ、という少し古風な個性らしく豪快に口を開けて笑った。この春ようやく小学校を卒業する広海、大地の弟、は食卓の下でバタバタと足を振る。

元サッカー選手で本職はサイドバック、代表には選出されたが残念ながら重要な場面での出番は「ほとんど」なし……という十三は、選手としてのキャリアを終え若手指導者としての階段を一歩ずつ歩んでいる。

幸い現役を終えたクラブのフロントがユース（若年層）のコーチの職を用意してくれたばかりか、本場スペインにコーチ修業の話まで振ってくれた。

本人は気付いてないがそれは彼の人徳だ。挫折を繰り返した苦労人らしい彼の厳しいが熱い指導は、肝心の子供達にたいへん好評である。クラブとしては恩を売って囲い込んでおきたい、そのためならば数百万の留学費用など安いもの、と言ったところだろうか。

無論、十三に断る理由はない。

「……ま、その頑固さがディフェンダーの魂だ。

絶対忘れるなよ、スッポンのように食いつくんだ。『こいつ嫌だな、近寄りたくないな』と思わせるだけでも相手の選択肢を狭めるんだ。向こう行ったらお前はまず間違いなく一番ヘタクソだからな！」

「まかせとけ！」

父、兄と同じく広海も本格的にサッカーをやっている……が、残念なことにセンスでは兄はもちろん、努力型の父にもかなり及ばない。

大量の選手を上に横に下に見てきた十三、センスよりはガッツと努力でなんとか

してきた選手にとっても、ま、ハッキリ言って、「やめといた方がいい」というレベルである。できるヤツは――大地がそうだったように――最初から、できる。最初からできないのができるようになる、しかも最初からできてるヤツを上回る、というのは万に一つの可能性だ。

日本プロ野球に、川相昌弘という名脇役が居た。犠打の世界記録を作った男だ。藤田元司、巨人軍の名将、が彼の事に話が及ぶたび、

「彼を見るたびにね、『努力すればなんとかなる』と思うんですよ」

と言った。

これだけならお決まりの話である。

が、この先がある。少し意地悪な質問をする。

「他にそういう選手は誰がいましたか？」

「……。

……いない。川相しか居ないわ」

あれだけの名将があれだけの選手達を数千人と見てきて、そう言う。そもそもプロというのは、できるヤツが膨大な努力を積み重ね続けている現場であり、そこで元々できないヤツができるヤツを上回る……そこで必要なのは最早努力ではない。

運や魔法の類である。

ただ、川相選手の努力を讃えその万一の可能性に希望を見出すか、「努力も才能」となんの意味もないカッコだけいいセリフを吐いて余所見をするか、それは聞く者次第ではある。

『……ま、わからん。
人間どこでなにが起こるかなんぞ』

この愚直さと天真爛漫さが、大化けの材料になるかもしれぬ。チームで最近の、ませてこまっしゃくれて親に言い含められた虚しい文言をまるで自分の考えのように滔々と披露する、その割に疲れ易い子供たちを見ていると、こいつバカかと父親の自分ですら思うこの真正面突撃精神は、もはや貴重だ。

スペインへ行くと言えば、間髪入れず「行く!!」と絶叫するような、バカさ加減が。

『……うまくいかんもんだな、大地の才能にこいつのガッツがありゃあ、今頃バル

サでチャンピオンズ・リーグに出てるだろーによ』

……ま、それは、一流と二流の中間ぐらいで終わったおれの息子に求める奇跡では無かろう。大地があそこまで行っただけでも、いや広海だってここからどうなるかわからん。

もちろん、おれもだ。

チャンピオンズ・リーグなら、監督として戦ってやるさ。

フツフツとまた闘志が湧いてくる……というか、おのれ自らで沸き立たせる。喪失感を、隠すように。

そうさ、喪ったのは、おまえだけじゃないんだぞ。

おれも、広海も。

それは頭のいいあいつならわかっているだろうから、言わないが。

それでも十三には、ひとつ根拠のない確信があった。

あいつは、大丈夫だ。

星の下、という言葉がある。
運命の方向性を大雑把に述べる時に使う。
その言葉を使えば、大地は人に恵まれる星の下に生まれている。

そもそも普通はな、中学で毎昼お弁当作ってきてくれる彼女なんか、いないぜ!?

十三は自分の、汗と土埃と泥と麦茶と身体中の青アザと割れた爪とスパイクダコとぺこぺこに減った腹とそこに押し込んだコッペパンにまみれた青春を思い出した。
なんとまあ、茶色い青春か。
まあ、後ほど人も羨む美人と結婚できたおれが言うのはバチが当たるかもしれんが……
ああ、おれも青春、したかったなぁ……

人は誰しも、望めばなにか足りぬ。
満足すれば、余る。

足りなさに潰されない程度に、望みうるなにかを望めばよい。
望んでも絶対に手に入らないものは、望むべきでもない。

奇跡は、起きる。
ただしそれは、あたりまえのことだが、起きうる時にしか、起きない。
死んだ人間は、絶対に、帰ってこない。
そういう奇跡は一〇〇%起きない。
もし起きたとすればそれは奇跡ではなく……
オカルトである。

■2　ワールドカップ・ジュニアユース

――「ひとつがたり」という言葉がある。

老境に入ろうとする人物が、その人生のハイライトを何度も繰り返して語ることで、聞かされる者にとっては鬱陶しくもあり、微笑ましくもある。

大正太陽、今をときめく高校生Ｊリーガー一七歳、にはすでにひとつ、「ひとつがたり」がある。

ＦＩＦＡワールドカップ・ジュニアユース、スペインで行われた大会その時の記憶だ。

準優勝という華々しい戦果を挙げ、コアなサッカー好きには「あの連中か」と一目置かれるようになったチームもしかし、当初は期待されていなかった。

「谷間の世代」という、理屈的に言えば半数が当てはまるであろう揶揄を受けてきた彼らの世代は、上の下の世代が楽々と突破したアジア予選でさえギリッギリ首の皮一枚でなんとか突破した。

まず選手層が薄かった。国内ビッグクラブが囲い込むようなスター候補はせいぜいこの太陽と、父親がそこそこ有名人だった大地ぐらいなもので、あとはそれほど煌めく才能という選手は居ない。また監督がポゼッション・サッカー（ボールを支配して相手に迫るやり方）の高邁な理想を描き、選手に無理をさせたのも好不調の波として現れた。勝てる時はスマートだったが、負ける時は何も出来ない。

「ああ、今回は期待できないな」

と誰もがそう思っていた。

きっかけは、今でも覚えている、

「……あいつがさぁ、突然、

『僕、ボランチやります』

って言い出してさぁ」

「あいつがそういう、なんだろ、前向いて自分の意思をハッキリ言い出すのは珍しくてみんなビックリだよ。

しかもまあ、ギリっつってもいちおー予選勝てて出れたわけじゃん？　あいつが攻撃の中心だったわけだからさ、あいつポジション下げたら攻撃どーすんの？　て

かオレ、誰にパス貰えばいーんさ？」
「もちろんみんなで止めたさ。
今からじゃリスクが大きすぎる、つって。
でもそん時の大地はカッチョヨカッタよね、
『リスクを取るのが、サッカーです』
今思い出しても痺れるぜ。そりゃ女共もキャーキャー言うわありゃ」
「……んでもちろん言い出したら聞かないだろ？
『コンバートできないなら日本に追い返してくれ』
とまで言われちゃあ、最後はチーム全員監督もコーチもオレらも根負けさ。
ったくヒデー話だぜ、内乱だよ内乱。お家騒動。クーデターっての？　あれで結果残ってなかったらあいつ一生、サッカー界から永久追放だったと思う。
……けど、さ」

ここで毎回、太陽はタメを作る。
それからニヤリと笑って、

「……あそこが今にいたる戦略家・上町大地誕生の瞬間だったと思うぜ。

効いたんだよ、あいつがアンカーに入ると。びっくりするぐらい」

第三者的に見れば、非常に理にかなった当たり前のことが行われただけである。たいていの物事は、その中に居ると、見えなくなってしまうものだ。

まず、アジアで苦戦したからには世界戦ではすべて格上である。格上相手に一般的にポゼッション・サッカーは極めて難しい。カウンター・サッカー（相手に前に出てこさせて、隙を突く）の方が可能性がまだある。

そのために、チームで最も「上手い」と思われる選手のポジションを、ひとつ下げた。攻撃の司令塔ではなく、守備の最初、また守備から攻撃に移り変わる場所へ。そこは、大地の選手としての特性にもフィットしていた。すなわち、視野の広さと冷静さ、である。

がぜん、安定した。

じっくり構えて人数を揃え、数的優位を作り出し、自分達より巧い相手を二人・三人で囲ってボールを奪う。それを大地がその広い視野と正確なボール供給能力で

前線へ一気に送り込んだ。

「負けそうにない」という余裕と安心感、そして複雑な動きから解放された攻撃陣が、ただまっすぐにゴールへ向かった。太陽は、その自慢のスピードで、敵陣の広大なスペースを切り裂いた。

「……いやぁ、もう無理なんじゃねーかなぁ。日本がかなりやる、ってのはワールドカップ何回かやってもうバレちまってるから、オレ達がやれたみたいに相手が侮ってきてくれて隙がある、なんてこともうねぇよ」

面白いように勝った……とまでは言えない。一次リーグではカメルーンに、アフリカンならではの身体能力で翻弄されて逆転負けを喫した。ボール扱い、ゲームの組み立て、すべて日本が上だったのに、ただぴゅーと走られずばーんと撃たれ、負けた。

ただそれさえも糧にした。

若年層は伸びがいい。大会中はおろか試合中でも伸びていく。若い層を無理にでも世界大会に送り込む意義は、その厳しい環境での伸びを期待してのことである。

辛勝また辛勝。
薄氷を時には踏みぬいて水浸しになりながら、しかし勝てば自信がつく。イングランドとアメリカに勝ち一次リーグを突破、その頃には深夜だが日本の地上波で生放送も組まれた。

手のひらを返したように注目と賞賛が集まって、もちろんその輪の中心に、上町大地が居た。

「……なんつーてもあいつが持った瞬間、スタジアム中が、敵も味方も観客もみんな『ドキッ！』とするんさ。心臓が止まるんだ。これは凄いよ、これは凄い。まるで世界の中心でね。
で、あのロングがパーンとサイドへ散るわけさ、切れ味よくさ。カッコよかったねぇ……
ワンパターンなんよ？　ワルツ。三拍子。サイド、サイド、真ん中。
途中オレ気づいてさ、モロバレでそんな風に走ったんだけど、ポルトガルもメキシコも最後まで気づいてなかったかなぁ……
いや、違う。わかっちゃいても止められんない、っつーか、読めば読むほど、次は

変えてくるかも、と思っちゃう、つーか。
ま、とにかく、凄かったんだよ」

それは太陽の思い出補正だけではない。Round16でポルトガルを、QuartarFinalでメキシコを破った頃には、世界中のスカウトマンが大地の元に殺到していた。
極めつけはSemiFinal準決勝、ウルグアイ戦である。

「……『生き地獄』って言葉あんじゃん？
あんなもんさぁ、オレ一生縁が無いと思っててさぁ、てかさぁ、オレそういうのから逃げるように生きていきたいと今も思ってんだけど……
地獄、ってのは来るんだね。
行くんじゃないんだよ。
滅多打たれさぁ……
ウルグアイてさ、巧いんだよ、試合運びとか。そりゃ南米で大国ブラジルやアルゼンチンと互角に渡り合ってるわけだからさ、そういうところがホント、ズルイぐらい、汚ねぇぐらい巧いんだ。

この相手ならこのぐらいで攻めれば1点取れる、とかもくろむの。
だから逆に、同点で残り時間が少なくなってくると、向こう焦るんだよね、「こんなはずじゃなかった」ってね。
気が狂ってんじゃないかと思うぐらいムチャクチャに攻められまくってさぁ……オレ？　オレももちろんディフェンスだよ、んなねぇ、前残りなんてできるわけないじゃん、一一人全員でペナルティエリア満員電車かと思うぐらい密集して守ったさ。
ん、満員電車ディフェンス。
日本らしくて、いいだろ？」

その試合を決めたのも、上町大地のプレーだった。

「……正確な時間は覚えてねーよ。三八分？　三五分？　とにかく後半それぐらいさ。もう、意識朦朧としてさ、だんだん、脳に糖分回らなくなってくると、弱気になってくんだよ、人間。
オレがそうだったから、ディフェンスやキーパーはもう半死半生だったんじゃねーかなー……特に真ん中で守ってるボランチなんてね、オレだったらぜってー死ん

でる」
「……で、そのボランチが……上町大地が、ほんの一瞬の相手の隙を突いたのさ。敵にめちゃくちゃうめーヤツがいて、そいつがボール散らしてたんだけど、大地の真ん前でほんの一瞬、ほんの一瞬だけどこへ出すか迷ってさ。もちろんその迷いはオレ達がそこまで跳ね返し続けたからだけどさ、そこよ……」

ここでいつも、太陽は右の手刀をまっすぐ突き出す。

「ずばーーーーん!!
とスライディングだぜ。あんな切れ味のスラその前にも後にも見たことねぇ。ペナ前だからあぶねーのなんの、もしＰＫでも取られたらとか、相手に避けられたら一気にシュートコース開くだの、んなこと何も考えてねー。
今思うとあれ大地も朦朧としてたんじゃないかと思うんだが、まーとにかくボールは、奪った。
その瞬間さ。
スタジアム中が怒号に包まれたねぇ……
目が覚めたよ、オレもみんなも。

その瞬間バチーッて。
ぽーんと立ち上がると猛然とドリブルさ。自陣前からだからあれ何メーターぐらいあったかなぁ……七〇とか？　まーとにかく伝説のドリさ」
「『重戦車のように』とか『稲妻のように』とか、いろいろ言い方あっけど、あれはなんて言ったらいいんだろ……
ナタ。
２ｍぐらいありそうなでっかい鉈で、ズバーン！ズバーン！薪を叩き割る感じか……
とにかく触ったら吹っ飛ばされるどころか、殺されるって迫力でさ、オレも必死で追いつこうと走ったぜ？　けどオレがさ、このオレの必死よりもまだ、ドリってるあいつのが速いんだ。おかしいよ、あの時のあいつは、おかしかった」
「で、ナタのフィニッシュはキャノン……いやぁ、キャノンシュートっつーのもありきたりだよなぁ。なんつったらいいんだろうなぁ……可憐の『レーザー』ともちょっと違うんだよな、重い塊が飛んでく感じ。オレにはボーリングの玉みてーに見えた。
とにかくなんか鉄か鉛の塊が飛んでって、そんなのキーパー、いくら真正面でも取れっこねぇって。

バヨエン
って鈍い音して跳ね返ってきてさ、それを、ごっ・つぁん・です！と。
オレも大地んとこ走ったし、みんな大地に抱きついたし、ありゃ大地のゴールだよ。
はぁ〜……今でも信じらんねぇ。
あんなプレーをまた見ることができるのか？
いや、ってかオレがやんなきゃダメだろ!!」

と、いつもここで、ノリツッコミまで披露して、一区切り。

「……まあれだ、あれは塊じゃなくて、魂だったんだな。そのあと一〇分ぐらいあってさ、
そうそう聞いてくれよこれひでぇ話でさ、主審のヤローオーストラリアの二八歳のしょんべんたれで、同じ南半球だからってのかヤケクソに向こうびいきで、誰がどう考えても怪我人も居なかったし変なプレーも無かったのにロスタイム四分もとりやがってクソが!!　地獄続行だよ地獄続行。
でもさ、

そのゴールの前の地獄より、その後の地獄の方がよっぽど楽だった。前の地獄が熱湯地獄だとすると、後の地獄は温泉地獄ぐらい」

このあまり工夫のないネタも、いつも披露する。サッカーのセンスは最高だがこちらの方は割と残念で、しかも本人はそう思ってないのが美男子でかつエース、ほっとけばイヤミになりそうな大正太陽の人間味である。

ちなみに、妹分の此花可憐もそっくりで、してみるとスピード・エースという類の人種には、こういう習性があるのかもしれない。

それはともかく。

ただひとつのプレーが、選手の将来やイメージを決めてしまうこともある。９８ワールドカップ・フランス、イングランドに突如現れた少年のようなＦＷは、電撃のようなドリブル・ゴールをしかも強豪アルゼンチン相手に決めてそのわずか数十秒にして世界的スター選手になった。「ワンダー・ボーイ」、マイケル・オーウェンである。

大地の場合、スカウトに青田刈りで定評のあるアーセナル（イングランド）やバルセロナ（スペイン）やＡＣミラン（イタリア）といったビッグネームが混ざるよ

うになった。
　サッカー大好きな国民性、現地の新聞に、大地の背番号6をひっかけて「シックス・センス」、第六感と絶賛された。決勝で当たる我らがアルマダ（無敵艦隊）よ、コイツには注意しろ……

「……これはひょっとすると勝てるぜ、と。いや、勝てないまでも、歴史に残るいい試合ができそうだぜ、いや、するぜ、と。みんな大興奮でさ、ウルグアイ戦の夜のメシの時も叫びあってたような感じ……」
「……いや、そうさ。
　今思えば、そんなんじゃダメなんだよな。平常心、っての？　いつもと同じようなリラックス&クールで、どんな大舞台にも出なきゃなんないんだけどさ、ほら、オレらまだ子供だったからさぁ……
　いやまあ、たった二年前といえばそうさ？　まあでもそんなもんさ。男の子ってのはね」
「……ん。大地の話だっけ。
　そう、そんな大盛り上がりの中で、あいつだけ静かなんだよ。もともとあんまりはしゃぐタイプじゃないけどさ、なんだ、来るべき決戦に向けキャプテンとして緊

張でもしてやがんのかと思って、肩抱いて腹殴ってさ、あっ、言っとっけどオレホモじゃねぇぞお!?　なんかそんなこと言いふらしてるヤツいるらしいけど、オレ確かに女嫌いなのは認めるけどさ、男別に好きじゃねーよ！」

「……ああ、すまん。んでさ、

『どうしたんだよ！　元気ねぇじゃねぇかよ！』

って問い詰めればさ……

青い顔して、

『……ちょっと、かあさんが、具合悪くて』

って悲しそうに笑うんだよ。

マジヤバイ、思ったね。

人間のあんな顔、オレ後にも先にも見たことねぇよ。あいつ責任感強いからさ、隠せるなら隠しておきたかったんだろうな。つまんねー個人的なことでチームに迷惑かけちゃいかんと。

その顔見るからに、だいぶ悪りぃんだ。

ホントは飛んで帰りたかったんだろうけど……

つーか、あいつのおっかさんなら間違いなく、そんなことすると悲しむだろうからな。

一番辛くて可哀想だったのはあいつだよ。飛んで帰って泣きつくこともできねぇ、優しすぎて頭から追い出して集中することもできねぇ……

人間さ、やっぱさ、不意にあんな地獄に、叩き落とされるんだよ。なんーにも、悪いこと、してなくても、さ」

「それであのスーパーウルトラメチャクチャゴールもなにもかも、全部納得さ。あれは全部、おかあちゃんに捧げてるんだ。日本でＴＶでライブ始まったって聞いてさ、オレたちゃミーハーだからゲヒゲヒ笑ってただけだけど、あいつもあいつらしくなくえらい喜んでさ、なんだ大地も目立ちたがりなとこあんだな、とか思ってたんだけど……とんでもない、おかあちゃんに、見せたかったんだな……」

「ああ、ああ、言いふらしたぜ。

いや、こういう時は言った方がいいんだ、本人に嫌われるなら嫌われてもいい、ここ一番じゃ嫌がられ役を買って出る、ってのが、男ってもんさ。

もちろんさ……

オレたちゃサッカー屋はチャラチャラしてるようにみられっけどさ、仮にも中学生っつっても日の丸しょって地球の裏側に来てる連中だぜ？

おおそりゃもう大地のおかあちゃんのために戦うしかねー！ってもーそりゃ大盛り上がりさらにプラスでさ。気合充実してたねぇ……」

そしてここでいつも、肩を落とす。

「だからこそ、先発外されるって聞いた時の絶望感ったら……ウルガイで決勝点叩きこんだの、この、オレだぜ!?　オレ、監督には、なるべく逆らわないようにしてんだ、おとーにキツーく言われててさ、テメェはまだ半人前の見習いなんだ、親方に楯突くのは十年早い、言われたこと黙ってやれ、ってさ。

だからそれ守ってたんだけど……

そん時ばかりはガマンできなかった。食ってかかったさ。怒鳴り散らした。

んで、怒鳴り返された。

あの人だよ。クールでいつも落ち着いててナイスミドルでさ、実際、そこまではホントにそうだったんだよ。作戦も狙いも的確だったし、オレ達をあそこまで導いてくれたのは、監督のおかげなんだ。それはホントに感謝してる。でも……

監督も、テンパってたんだな。

優勝だもんな。日本代表は全カテゴリーで優勝の経験が無いんだ。準優勝だって確か初だったんじゃなかったかな……

だからさ、「勝つために」を追求すりゃあ、やっぱそりゃカウンター・アタック

さ。４バックに中盤増やして五人、だとすっと1トップだろ？　スピードだけしかないそん時のオレより、スピードもそこそこ、足元確かで高さも強さもあってパスセンスもある原先輩に、なるわねぇ……
　わかっちゃいたんだ、その時でも、さ。
けどさ、頭でわかってんのと身体や心は別モンでさぁ……
悔しくて悔しくて悔しくて、ああ、もう、今思い出しても涙が出るぜ……」
「でも、そんな時でもあいつはホントに理想のキャプテンでさ、ぽん、と肩叩いて『太陽、絶対お前の力が必要になるから。ワントップじゃ絶対持たないから、絶対にお前使う時間が来るから。完璧に用意しといてくれ』
　ってさ……それでなんとか気持ち切り替えて、そうだそうだよな、と思えた。なんとか、な。
　はは、ホントはオレが大地を力づけなきゃなんないのに、逆になってやがんの」
「でもその時思った。
もう二度とオレは、ワントップやる時に落とされるようなＦＷには、なるまいと。
オレそん時までスピードにゃ自信あったからさ、スピード磨いて磨いて磨いてりゃ、大丈夫とか思い込んでたんだ。
　とんでもない。

サッカーはいろんな場面あるから、そんなんじゃ使ってもらえねぇよ。せめてなんでも、人並みにはこなせて、それでかつ絶対の武器があって、エースだ」

「……ああすまん、オレの話なんかどーでもいーな。

ま、試合はあと言うこた無いさ。

前半早々にＧＫのミスからセットプレー、先制点叩き込まれて万事休す。いや、1点は問題じゃない。問題は、それで浮き足立っちまうような、経験の無いオレ達だ。

やっぱスペインは世界最強だよ。

あいつら国際大会の決勝なのに全然平然としてやがんの。そりゃそうだよな、バルサのレギュラーとろうかって超新星までいるんだぜ、チャンピオンズ・リーグ出てユナイテッドやユヴェントスのスーパースター達と毎日殴り合ってんだ、図太くもなるわな。オレ達なんて、そんな相手に比べりゃ鼻くそみたいなもんだ。

あとは試合もボールも完全にコントロールされちまって、こっちの支配率三〇％切ったんじゃなかったかな、情けねーったらありゃしないぜ、奪りに行ってもぜんっぜん奪れないのさ。ウルグアイやメキシコみたいなテクニシャンにだって通用した守備がだぜ？　つまり一枚も二枚も上手で、こっちが数的有利作るどころか、ワンタッチパスぽんぽん回されて数的不利で守備させられてた感じ。

準決までで築き上げた、
『オレたちゃひょっとして、イケてんじゃね？』
なんて根拠ない自信は木っ端微塵さ。むしろあそこまで行けたのが幸運……いや、奇跡で、現実は到底、そこまで行ってねーんだ。
4―1は妥当どころか、よく4点で抑えて、1点奪ったと思うぜ……
……聞きたい？　自慢話？」

ニタァ、と端正な顔を崩す。ここからが自慢話であるということは、自分でもよくわかっている。しかし、語りたい。

「1点目は事故と諦めても、2点目取られた頃にはもう、笑っちゃうぐらい差がある、ってのは誰の目にも明らかでさ、ましてピッチ立ってやってりゃ猛獣、虎やライオンと素手とやってるみたいな感じさ。もうやる気もモチベーションも何もあったもんじゃねぇ、てか、みんな頭ん中ぐるぐるでパニックで、ベンチで見てても声の掛けようも無かった。オレがあそこに居ても、ぜってー同じだと、思ったからね……」
「……で、ボーゼンしてると、ピッチで文字通り孤軍奮闘の大地に叱られたわけさ。

『太陽ーッ！　準備しといてくれーッ！』
ってさ。
いやあ、身体って勝手に動くんだよねああいう時。ぴょーんと椅子から跳ねて、そのまま走りに行っちまった。
それに、嬉しかったねぇ……ピンチに名指してお前の力が要る、って言われることほど奮い立つこたないぜ。あいつあの頃から、ああいう才能あるんだ。人の力を引き出す才能が。
そっからハーフタイムも入れて五〇分ぐらいかな、アップし続けたさ。３点目も４点目も見てねー。ただ出る時に完璧にしようとそれだけ思ってた。
後半三〇分、原さんに代わって入った。
やってやる、とだけ思ってた。
けど相手も酷い連中で、若造だから容赦ねーんだ、流すとかそんなこと一切無しで、フルパワーなのさ九〇分。オレも実際そこ立って見て初めて、
『あっ、こりゃダメだ』
と思った。ひでぇ強い。文字通り大人と子供さ、問題になんねーよ」
「ただ。
ライン高いのは高かった。前がかりにはなってた。んで、ＣＢの左がそんなに速

くねーんだ。いいタイミングで裏へ出してくれたら、いける、と踏んだ。
目で合図した。もちろん大地さ。他の誰かに頼んだって無理だ。もちろんあいつもバイタル（ディフェンスと中盤の間のスペース）に張り付かされっぱなしだったから、そんなとっから相手ＣＢ裏になんて常識的にゃパスなんか出るわけねーんだけど、あいつならなんとかしてくれる。そう思ってた」
「……で、その時が来た。
途中で入ってきたＯＭＦがまたやたらめったらセンスあるヤツで、こいつがＦＷにスルーパス出したんよ。完璧なタイミングの完璧なパスだった。
だから逆に、カットできたんだ。
読めるからね。
大地が、やってのけてくれた。
オレはその瞬間、全身で吼えながら突っ走った。オフサイドになんか大地なら絶対するはずがねぇと思ったし、いや副審がオフっつってもカード構わねぇからとにかく叩きこんでやろーと思った。
そんな心配要らねぇ、いつも自分に厳しく他人には優しいあいつが、現役最後に出した、パスは、たった一本、他人に厳しいパスで、さ。
いやぁ、あれ今思えばパスじゃねえ。シュートだ。自陣奥深くからの地を這う超

ローングシュートさ。
　このオレ様が狂ったように走っても、まだ追いつかねぇんだ。相手のＧＫ凄い勢いで出てきやがるし、泣きそうだったぜもう。これ外してあとから見返したら一生言われると思ってさ。おう、おう、頭ん中雑念だらけさ。集中なんかしてやしねー。
でもむしろ、それが良かったんじゃねーかな。
真正面からならひょっとすると弾かれてた、かもな。
なんとかギリッギリで追いついた。
もうＧＫ来てた。
選択肢なかった。
つま先で引っ掛けるしか。
ぽい……とらしくもなくふわりと上がってくれやがってさぁ……オレたぶん一生あんなシュート撃てねーわ。だって、らしくねーもん。
ありゃ、あれこそ、大地の……いやあ、大地のおかあちゃんの、シュートだね。
ふわり、やさしく」

　そのループ・シュートはＧＫの頭上を越え、美しい虹を描いて優しくゴールに吸い込まれた。

ＦＩＦＡ認定大会ベストゴールに、惨敗から選ばれた。もちろん得点者・大正太陽、アシスト・上町大地。

「……予選からいろいろ点決めたし全部覚えてるけど、やっぱ、アレだねぇ。負けたけど、アレだねぇ。

当時のメンツと代表やリーグで会っても、アレだって話になるね。みんなあの１点で……なんだろ、『わからないぞ!?』って気にさせてもらった。もちろんそんなとっからあと３点取って追いつくなんてできっこねーよ。そじゃなくて……

なんだ、同じ人間なんだ、いつか、あいつらにも追いつける、ってね。

そそ、恥ずかしー言い方すりゃあ、勇気と希望のシュートだったんだよ。ま、つま先引っ掛けただけだけどさ、そんなシュートに関われて、オレは幸せもんさ。

なんか持ってる、っていうの？　アハハハハハハ！」

それは幾分太陽のいつもらしく大げさで、映像を見れば間違いなくスペースを狙いすましたスルーパスであり、太陽のループはしっかり下半身の入った素晴らしいシュートだった。

だが、思い出の風景の中では、そうなる。

「……大会終わって、あいつだけスタジアムから空港へ直行さ。スタッフもみんな気を遣ってさぁ……そういうとこ日本代表は世界最高だと思うぜ。
だからその夜の打ち上げに、あいつ居なかったんだ。どう考えても主役だぜ？みんな……ま、一仕事終えた虚脱感もあったんだけどさ、あいつの話ばっかりになって……
あと、やっぱり、おかあちゃんの話かなぁ……一月近く離れてたからさ、やっぱホームシックに近いヤツも出てきてさ、『母さんのカレーが食いたい』とか言い出すわけさ。
そこでこの太陽様がまたご降臨ですよ。
甘ったれんなお前らと。
オレなんかおかあちゃん居ねえんだぞ、と。
そしたらシーンと……いや、あれは空気読めてなかった。問題そこじゃねぇな、ははは」
「そーなんだよオレの女嫌いはたぶんそこが原因。ま、オレのオヤジ超頑固で超職人だから、気が合わなくなってもしょーがねーかなーとは思わんでもねーんだけど、オレ、捨てないでよ、って。

息子じゃん、子供じゃん、赤ん坊じゃん、って。
別れんならさ、出て行くんじゃなくて連れてかねー？　ふつー？
いや、今に不満あるわけじゃねーよ。オヤジうるせーけどよくしてくれるしさぁ。
オレ、オヤジにはいい目見てもらいてーから契約金で家買おうぜ、つったんだけど
選手なんざいつクビになるかわかんねーんだから貯めとけ！って一喝されちまって
さ……それに、おかあちゃんに会いたいとも、まるっきり思わねー。
けどさ……
そうだよ、『死に別れられる』ってことだって、しあわせってヤツなんだよ。
って、そりゃ無理矢理過ぎるか。ははは」

屈託なく笑う。
最初から無いものは、失う悲しみも無い。

「てなこと言ったらこれがまた逆効果でな！
『おかあちゃ～ん！』とか大合唱始まっちまった。まー中学生ってなそんなもんさ。
アルコールもまだねーしね。ああいうとこ日本代表はホント監督もコーチもスタッ
フも偉いんだよ、誰一人ビール一杯飲まなかった。オレ達に気を遣った、っつーか

オレ達が主役だから、ってね」
「……まあ、てなわけで、連中に会うたびに、大地入れてちゃんとした打ち上げやらねーと、って話になんだけど、みんな忙しいし日本中バラバラだかんなぁ……といってユースの合宿に呼ぶわけにも、いかんし……」
「いやそりゃ復帰してくれりゃこんな嬉しい話ねーよ！　優秀なボランチは何人いたって困んねーんだ、今からだって全然間に合うって！　中澤佑二さんが頭角表したのって確か大学時代からだし、フィジカルはなんとでもなるさ、あいつのセンスは天才そのものなんだ、それよりキャプテンシーさ、あのまとめる力は凄い、ああいう才能こそ得難いんだ、ぜひ……」
「……いや、まあ、それはよそう。
あいつは、あいつのやりたいことをやりゃあいい。
そもそもあいつの存在自体が、あの1点のためにサッカーの女神様がオレ達にプレゼントしてくれた奇跡かもしれんし。
あとは、好きにすれば、いいさ。
自分の人生さ。
自分のやりたいこと、やりゃあいい」

寂しいのは事実だったが、太陽自身、後ろを振り返っている余裕はない。サッカー選手は寿命が短い。あと二〇年というのはたぶん無理で、だとすると一年一年、いや一試合一試合が貴重だ。

「……まそれにしてももったいねー。

オレもミランからオファーこねーかなー……ミランだぜミラン。いやこねーかなーとか言ってちゃダメだな、来ざるを得ないスターにならねーと。

あいつは、もったいねーんだよとにかくいつでも。なんてんだろーなー、持ちすぎちまってるくせに、いつもなんか足りなくて、持ってるもんも全部投げ出すんだ。

そそ、ぜーたくすぎんだよ。

つたくしょーがねー……

いや、ふつー、毎日弁当作ってくれる『女友達』なんかいませんよ。それは、一般的には、『嫁』っていうんです。

あぁ、オレも女は要らねーけど毎昼手作り弁当は超憧れる。美緒っぺにオレの分も頼むのはありなんだろうか……え？　無し？　全然無し？　あ、すみませんね、また空気読まなくて。オレそのへん全然わかんねーんだ。だったら黙っとけ？　んだねー。ははははっ」

「ま、つまりオレの言いたいのは……
あのゲームは、あのゴールは、そして上町大地というあそこにいた選手は、奇跡だった、ってことさ。
奇跡なんて起きっこねー、と思ってるっしょ？
起こるんだよそれが。
ごくたまーに」
「……奇跡についてみんな誤解してるのはさ。
問題は、奇跡が起きるかどうかじゃねーんだ。
起きても、どうしようもない、ってこともある、ってことさ。
そう、大地がもう二度と、ユニを着ないようにね」

一五歳ぐらいの才能がその後消えるのは、珍しいことではない。ただそれでも、あの大会をあの試合を観たコアなファンやジャーナリスト、関係者達は今でも口を揃えて言う。
「戻ってこないかな」と。

■3　美沙と美緒

長居美緒はご存知の通りディフェンシブなプレーヤーである。まず相手の様子を伺って、出方を決める。だからどんな相手にも合わせられるし、居心地がよい。いわば個性と個性を繋ぐグルー、糊の役割を果たしている。だから人が集まる。

そんな彼女もしかし、出て行く時は出て行く。攻めどころ、と見れば普段がディフェンシブなだけに、目が覚めるほど、人が変わったほど、攻める。いや、守備が巧いだけに、攻めどころを、よく知っている。

父がサッカー選手で自身もサッカー選手であり、ジュニアユースで日本代表に呼ばれ授業が終わればクラブと言ってもＪの所属クラブに向かう、大柄でもちろん運動能力が物凄く、余計なことに超つきの美少年で人柄も普段おっとりしててピッチでは熱い。

そんな完璧超人が居ればそれは人気者とかそういうレベルではなく、中学生にとっては同い年でもアイドルを超えて神様みたいな存在である。

文化祭ともなれば近くの中学高校から見学の女子がツアー組んでやってくる有様で、もちろん同窓の女の子達などちょっと掃除の時にでも声を掛けられただけで卒倒しかねない勢いだ。

だがだからこそ、みな、遠巻きに見つめるだけで、「おつきあいいただこう」などという大胆な、そして分不相応なことを考える女子はいなかった……

いた。

その一人が、のちの我らがキャプテン、長居美緒である。

いやもちろんキャプテンとて悪魔でも仏敵でもない、なにも欲しい物を欲しがったわけではなくあくまで動機は純粋だった、

と、彼女は言う。自分に言い聞かせるように。

「……いつもね、素晴らしいお弁当を持ってきてたの。大地君。うん、私その頃からお弁当はうるさいですからね、クラスのみんなのだいたいチェックしてた。もう、ピカイチなの。なんていうの、たたずまい？　センスの良さ、って出ちゃうのよオーラになって。

うわあ、すごい！って。
だから、その感動をね、そのまま伝えたの。
『上町君のお弁当って、素晴らしいね！』
って。
真心からですよ？
そしたらにっこり笑って
『ありがとう、かあさんの手作りなんだ』
ってうっれしそお～～に。
ええもうあの人あの頃から超マザコン。
までもね、あんなお弁当作られたらそりゃもう、って感じの、素晴らしさでした。
しかもねー、バリエーションも豊かで、毎日この私がだよ？びっくりさせられるようなアイデアと、手間暇なの。
『料理は愛情』って皆さん簡単におっしゃいますけどね、それが一番難しいからこそ、それが秘訣だ、って言われるんです、ええ」
「それでね、まあ、お近づきになりまして。
うん、あの人の周りには、今もそうだけど男の子いっぱいでね。人を寄せ付ける力あるから。そこへ割り込んでったわけですけど、これがねぇ、女って、イヤね」

「私がお弁当を切っ先にゴリッと割り込んだらね、みんな割り込んでくるようになって。
ズールイよねぇ、最初が、パイオニアが、西部開拓史丘の上の小さな家が、一番大変だっていうのに」
「ままま、それはいいんです。
……で、そしたらある日ね、パン齧ってて。
どうしたの、って聞いたらお母さんが入院した、って。じゃあ私がお弁当を作りましょうと」
「えっ？　早い？
いや、私慣れてたから。
えっ？　そういう問題か？
いや、そういう問題でしょう。お弁当が無い、作る人が居る、じゃあ作りましょう、と。
なにか、問題でも？」

このように本気のキャプテンの突破力は、本気である。以下再現ドラマ。

「……うん、あのね、私、毎日作ってるから。手間はおんなじだよ」
「だけど二個になったら手間も倍になるじゃない」
「倍じゃないの。私いつもおかあさんと、妹の分も入れて五つ作ってるから、それが六つになってもほとんど同じなの」

ちょっとだけ嘘つきました、小学校の一番下の妹にお弁当が必要な時は、わずかであり、母も出張が多くて、お弁当持ってくのはわずかです。すぐ下の美亜も料理上手なので、よく作ってもらいます。
でもしょっちゅう三つ作ってれば偉いでしょ!?

「そうかぁ……大変だね長居さん」
「お母さんが入院するほど大変じゃないよ。
それより長居さんじゃなくて、美緒って呼んでください」
「えっ？　どうして？」
「私が上町君のことを大地君、って呼べるじゃないですか」
「ははぁ……えっ、どうゆうこと？」
「男の子みんな大地君のこと大地君大地君って呼んでるから、私もそう呼びたいな

ぁ、って」
「はぁ。いいよ、別に全然」
「わ。やった」
「そんなに喜ぶようなことかなぁ……
でもね、ああ、そうだ、そんなこと同級生にしてもらってる、って言えば、かあさんが怒ると思う」
「わかりました。
お母様に直・談判をせさせていただきまお申す」
「はい？　じかだんぱん？」
「わたくし渾身の一品を持ちまして、お母様に大地君のお弁当をお作りさせてもらう許可をですね、いただきたくこれ存じ上げ御座候」
「えーっ？　いや、それ、えーっと……おかしく、ない？　なんか変」
「いやいや、なにもおかしくないです。
いわばオーーーディションですから。
嫁はね、姑に気に入られないと」
「はぁ。
よめ？」

「たとえば、の話です。
きっとお母様も息子がひもじく八八円のチョコフランスを齧るよりは、と『美緒ちゃん、お願いね』とこう」
「あー……確かにかあさん気に病んでたなぁ……ウチの学食美味しいからとか言うんだけどね、やっぱり不安そうで……」
「毎食お見受け致しますに相当食材などにも凝られているご様子。そりゃもう不安で心配で仕方ない、と思いますよ」
「そうなんだ、ウチほら、父さんがスポーツ選手だったもんだから、かあさんも本当に食材とか安全とか栄養とか、すごく凝ってるんだよ」
「ええ、ええ、わかります、わかります。
となれば毎食あの脂っこい学食Aランチでは心許ありますまい！」
「そうなんだー、ウチの学食味悪くないけど油物多いよね～」
「そうなの。あの深海魚白身フライは安いのよ業務用だと。だからだと思う。油物だとボリューム出るし……」
「えっ。あれ、深海魚なの？
てっきり鱈とか鯵とか……」
「しゃらーーーーっぷ!!

だめだこのおぼっちゃんは。いいですか今街で白身フライなんか食べたら全部得体のしれない深海魚!!」
「ええっ!?」

それは言いすぎ。

「顔が般若で形は木魚、色は青と紫のまだら、見たら食欲なくすお魚ばっかりだよ。ああもう大地君にそんなもの食べさせるわけにいかないね。これは絶対、お母様に認めていただかねば」
「う、うん、そう言われるとだんだんそんな気になってきた」
「ほら、エネルギーつけてサッカーの方も頑張らなきゃ！　今度世界大会に行くんでしょ？　すごいね!!」
「ああ、先生言ってくれてたね。うーん、まあでも、あれはチームが行ったのであって、僕が行ったわけじゃないんだけど……」
「まーたまたご謙遜を。知ってますよ、あなたが大黒柱であるってことを」
「いやいや。出してもらえるだけで幸せ、って選手だよ。すごい才能がいっぱい居るからね」

「まーたまた。じゃ、もっと元気つけなきゃ！」
「……ん。まあ、そうだね。
……ちょっと量多めに、とかできる？　学食だと量の調節がきかなくて……二人前とかは飽きるし。あ、もちろんお金とか、払うよ」
「お金なんて!!
わたくしにとっては愛する人に心をこめてお弁当をお作りする、この行為こそが報酬なのです！」
「へぇ〜っ!!
家族愛に溢れてるんだね、長居さんのご家族は！」
「……美緒ちゃん」
「あごめん、美緒ちゃんのご家族は」
「家族愛の方に突っ込むのは今はまだ我慢します。
どうもこのひと見た目より天然くさい」
「はい？」
「まままま、とにかく、そのへんは走りながら考える調整するということで、まず動かすことが大切だと。プロトタイプできあがってから調子を見る、これが大切です、現場では。レシピ眺めてても永遠に何も始まりません」

「はぁ」
「じゃ決まり。
ご訪問はいつがいいですか、今日？　明日？　今きょう明日いま今いまから？」
「えっ、えと、あー……うん、あの今日も、っていうか毎日病院には行ってるんだけど、今日クラブで練習あるので、夜の九時とかになっちゃうけど……」
「むしろ好都合!!
わたくし飛んで帰って満漢全席をですね、ご用意いたします。差し出がましい口をきくようですがお母様にはぜひお夕食をスキップしていただくという英断をおくだしいただきたく」
「え、えーっ!?　それってひょっとして晩ご飯作ってくれる、ってこと？」
「いえーすもちのロンロン。
できたて、熱々で。
もちろん大地君も一緒に」
「えっ、だってそんな、悪いよ……」
「だって、晩ご飯も家族の分作りますものわたし。
おんなじ」
「は……あ、そうなんだ……すごいね、長居さん」

「美緒。
うん、だからそういうことなので、平気。
それにお母様もきっと、久しぶりに病院食ではないものがいただきたい、はず！」
「えーっ……いや、まあ、あー……
ああ、そうだね、それはそうかも」
「あれ、ひょっとして制限とか、あるの？」
「あ、それは大丈夫だと思う。フルーツとか、普通に食べてるし」
「じゃそれできまーりーーーーー！
さて買出し行ってきます！
それじゃ集合はどこに……」
「えっとね、病院が……」

見て、この突破力。
ご本人自ら、

「あれは人生最大の突破でしたわ……

いや、今だとできない。ぜーったいできない。なんていう厚顔無恥というか厚かましいというか押し付けがましいというか、思い出すと『ひーっ』て感じ。

……でもあの時はほんとに、義務感？　みたいなのに駆られてたの。

なんだろう……この人私たちのスーパースターなのに、チョコフランス齧ってる、それじゃ駄目だ、って。なんで誰もみんな、この状況を放置してるんだ、誰かなんとかしようと思わないのか、かわいそうだとは思わないのか、ええい、みんな動かないなら私が動く!!

……そんな感じ。

うん、いや、ホントに、下心とかそんなの無い無い。だって、そういうのは周りに伝わっちゃいますからね、そんなのあったら女子のイジメの対象になってますよきっと。ええもちろん、そんなことにはならなかったわけ、で」

その鬼気迫る突進力にみな、恐れをなした、という説もある。

「……いやでも、考えてみれば『芸は身を助く』だねぇ……」

仕事に忙しい母の代わりに、美緒は中学に上がると自分と母のお弁当作りを始め

た。妹が三人居るが、最初は彼女たちは小学校の給食があるので必要ない。ただ年子なので、毎年一つずつ増えていく。

「うん、まあ、最初はね、毎日大変だなぁ、と思ったけど、人間、慣れって恐ろしいもんですよ。

何度も繰り返してるうちに、好きなパターンができてきて、それが決まってくると、最後はそこへ持ち込めばいいかという余裕が生まれて、まあ遊び心も生まれてね。

うん、要は完璧を求めないことだよ。

毎日のことだから、ご飯、肉or魚、そして野菜、OK。肉魚は焼きか炒めになるし、野菜は煮物か茹で物炒め物になるし、実はその組み合わせでバリエーションになるのよ。

あといいかっこしようとしちゃだめだね。

そこなのよ。

市販のお弁当は「買ってもらうため」にいいかっこしなきゃならないから、そこに隙ができる。

幕の内弁当に甘いお豆入ってるでしょう。

あれ、要らないよね？
甘いもの欲しいなら別付けすればいいわけだし。
でも、あれを入れることで「幕の内」の体裁を整えてるの。でもそれっておうちお弁当では、無駄だよね。
そゆとこ削ってくと、実はかなり簡単なの。
そういうの見えてくるとだんだん段取りも巧くなっていくし、そうそう、結果が夕方には如実に出るじゃない。良かったかダメだったか、って。
美亜なんかね、ホントあの子容赦無いのよ。美人のくせに。要らないと思ったら食べないからね。マズいとは絶対言わないんだけど、「ちょっと」とか言うだけなんだけど、残されちゃこっちだって火が点くじゃない。よーし喰わざるを得ないようにしてやると。そうやって作戦練ってるとまた、腕も上がるんですよ。
……えっ、お弁当の話はどうでもいい？」
「そうそう、大地君の話ね。
うん、行きました。
ああいうのはね、勢いなんです。
自分も相手も悩む暇無く『とりゃー』と飛び込む。これです。
お義母（かあ）さんもちゃーんと待っててくださって……」

「……うん……正直、『あっ』と思った。
こんなこと言っちゃ悪いけど……だいぶ、お悪い。
顔色がね、もう……透けてるの。
普通の人の生命力がガスレンジの炎だとするなら、細いロウソクの小さな明かり、って……
それでもね、すごい美人だな～、って。
大地君と並ぶと、ああ、母子だな、って。
それでね、……ぷっ。
あ、ごめんなさい、今でも思い出すと噴いちゃうんだけど、紹介してくれるわけですよ大地君が私をお義母さんにね。
『……同じクラスの、美緒。
今日はお弁当作ってくれるって、言うから』
そこで初めて呼び捨て。
あぁ、男の子ってお母さんの前ではいいかっこしたいんだなー、ってね」

ニタニタ笑いながら、でも心底嬉しそうに美緒は続ける。

「ほんとにごめんなさいね、美緒ちゃん。大地がわがまま言ったみたいで」
「いえ！　わたわた、私の方が、方から、押し付けまして！　……あ、あのこれ！　これです！　すみ、すみませんお夕食抜いてとか、むちゃくちゃなことを、言いまして」
「いいえ～。
ふふ、こんなこと言っちゃいけないけど、やっぱり、病院のお料理は、お味はともかく、迫力が無くて……」
「わかります、わか、わかります、なんかぐちゃぐちゃーってなってますよね」
「だからってお弁当買うのも気が引けて。
だから今日はほんとうに楽しみにしてたの」
「わわ、わ、え、えと、はい、すみません。おく、お口に、あいますでしょうか…あの！　ちょっ、ちょっと脂っこいかもしれませんどうしてかというとあの私の妹の小さくて子どもっぽいの好きでハンバーグとかケチャップとか三人ともえと私も嫌いではなくは、母も好きで」
「まあ……ご家族皆さんの分を？
えらいわねぇ、美緒ちゃん」
「いやいやいや、いや、はー。

え、も、こういうのは、慣れ、ですから、へえ」

長年ミラクルズを応援しているサポーター諸氏ならば驚愕したことであろう。
あのキャプテンも、人の子だと。
緊張することが、あるんだと。

「……まあ……すてき」
「いやいやいや、いやいやいや」
「美味しそうだね、かあさん」
「いやいやいやいやいやいやいや、まあまあまあまあまあまあまあまあまあ……」

ぶるぶる小刻みに震える手でお箸にフォーク、スプーンにお茶の用意。ぷるぷるカタカタ。
美沙、大地の母、はそれを温かな目で見ている。
二つ分のお弁当の用意が、できた。

「あら？　美緒ちゃんは？」

「はいわたくしはもう、お夕食妹たちに食べさせます時に一緒に軽く食べてますのでどうぞ遠慮無く！」
「あらあら、じゃあご一緒しましょ？」
「いやいやいや」
「美緒、そうしよ？
見つめられてちゃ、食べづらいよ」
「は、そうですね、じゃ、えー、あの、デザートとか持ってきてますのでそれをつつきながら、ええ、はい」

美緒、そうしよ？
とか言われますとね。
逆らえません。

「「……いただきます」」
「どうぞどうぞ」
「……ん。おいし～い……」
「そ、そですか、フヒヒ」

「あ。イケるね……ほんと」
「いやいやいや、まあまあまあ、ふひひ」

ハンバーグをセンターに、唐揚げ&白身フライ、エビとブロッコリーの炒めもの、玉子焼き、コールスロー、ポテトサラダ、そしてプチトマトの出汁漬けと、キュウリの深漬け。もちろん、土鍋で炊いた白米を心を込めておにぎりにした。海苔、ごま、ゆかり、煎りじゃこ。

自信のエースを並べ、売り物を排除した必勝態勢だ。これで負けたら、文句は言わぬ。

「……」
「……」

母子は徐々に無口になっていく。

経験で美緒はそれが、とても満足かとても不満足かの両極端だと知っていた。まさか不満ではないとは思うのだが、油断はできない。人の舌ほど千差万別ものもはなく、例えば三番目の美憂など私がぬるいと思うお味噌汁を熱いというかなりの猫

舌で、だから彼女のだけ一旦他の子のお椀によそってまた移して移す。

あーやっぱり入院中の人にこれは無しか。いやあるいはあまりに若者向けか。どちらにせよ基本の基本ができてなかった。相手のことを考えるという。おもてなしの心が。勝ちを急ぐ逸る気持ちが、無邪気な必殺技への盲信となった。

しまった……長居美緒、人生一生の不覚。この大事な場面で。

ぱたり。

お母様の手が止まった。お箸を丁寧に揃えて、置く。そのお弁当箱にはまだ、三分の二は残っている。

だめだー!!!

「……ごちそう、さまでした、美緒ちゃん」

「……あ、あの、あ、えー……その」

「とっても、おいしかった」

ぱーっと、花のように笑う。

……どう、捉えて、いいもの、やら。

「かあさん今日はすごく食べたねー」
「うん。美緒ちゃんのお弁当がおいしくて。ふふふ」
「あ、ほ、ほんとうでごじゃりまするか、え、えとその」
「かあさんいつも特に夜は食欲ないんだ。眠る前食べると胃もたれがする、って。こんなに食べるの、珍しい」
「ふふふ。お箸が進んじゃって。
ほんとに、おいしかったわ。残しちゃって、ごめんなさいね」
「いやーいやいやいやいやいや、まあまあまあまあまあまあまあまあ、おそまつさまでありんす、ええ、もう」
「僕が食べるよ。腹ペコなんだ。
あ、美緒、食べる？」
「あいやいやいやいやいや、大地君どうぞどうぞ」
「うん」
「だ、大地君、は？」
「うん。おいしい。すごいね、こんな美味しいお弁当、食べたこと無い」

「うひー!!!」

ま、上町大地というのはホントナチュラルにこういうことがするする出てくる男であり、一種の天才で、当然、ツッコミが入る。

「ま。おかあさんのお弁当より、おいしい？」
「えっ!?　あ、いや、そりゃかあさんの方がおいしいよ！　……あっ、いや、美緒ごめん、えーっと」
「いやっ!!　それは、もう、おかあさまの方が、美味しいです、美味しいです、ええ、そうじゃない方が、おかしいッスから!!!」
「ふふふふふ……」

寝巻の袖で口元を覆って笑う。
ああ……笑うとなお、想像を絶する美人だ。そりゃこんな母親が居れば、マザコンにでもなんにでもなるだろう。こりゃ……まいった、な。

「……おこめは、土鍋？　粒が立って」

「おっ、さすがお目が高いです、そうです、ぷしゅーっとカニ穴開けまして、ええ、はい」
「まあ、お上手なのねー」
「いやいやいや、あんなもの慣れですから。ええ。でも最近の炊飯器はすごいって聞いて、使ってみたいかなー、とも」
「そうなの？」
「ええ、お釜が銅でできてたり炭でできてたり、炊飯も圧力とか掛けたり抜いたり、あと蒸気を戻したりおねばを戻したり……」
「へぇ～……美緒ちゃん、詳しいのね」
「は、あの、わたし、我が家の調理担当なので、どうしても、ちょっとでも美味しい物をと……」
「えらいのねぇ……
お父さんもお母さんも、さぞ自慢の娘さんでしょうね」
「あ、あのうち、父いません。母と娘四人」
「あら。
ごめんなさい、悪いことを」
「いいえ。

……私が五つの時に亡くなりまして。だから私で、私長女なんですけど、覚えてるかな？　覚えてないかな？　って感じです。そういえばリビングに男の人がいたようないないような……」

「まあ……お母様、大変ね、四人も」

「いやー……はい、母、それ以来仕事の鬼になっちゃって。……でも、逆に……逆にっていうと父に怒られそうですけど、姉妹、それに母、結束力強いです」

「そうでしょうねぇ……」

「はい。みんなで家事分担して。私が調理、外面のいい美亜が買い物とか、几帳面な美憂がパソコンとか掃除洗濯で、まだ小さい美唯が細々したことといろいろ」

「まあ……」

美沙はほとほと感心しつつ、自慢気でもなくごくあたりまえのことのように語る少女を見た。

あの大ちゃんが、「友達の子がお弁当つくるっていうから」なんて連絡してきた

時はいったいどんな天変地異が起きたのかとひっくり返ったが……
まあ、この子ならば、いたしかたあるまい。
いや、「致し方ない」っていうのは、変な言い方なんだけど、致し方、ない。

「美緒ちゃんのおうちは、全員美しいのね」
「わはは、そうなんです。母も美里で。父と意地になって『美』をつけたんです。だからあいうえお順番バラバラでわかりにくくってしょうがなくって」
「うふふふふ……
私も、美沙。『美』が入ってる女の子は、美しいの。
ねー？」
「ね～？　ふふふふふ……」

強い。
それが、羨ましかった。
大地は、良くも悪くもどっかり地に足の着いた広海やおとうさんと違って、どうもふわふわした、浮世離れというかそういう、夢見がちなところがある。
もちろんそれが、臭みが無くて人を引き寄せる力にもなっているのだが、でも、

母親としては、不安でもある。
騙されないかしら。どこかで心折れないかしら。お釈迦様のように、すべてを捨てたくなったり、しないかしら。

それがどうだ。
初めて連れてきたガール・フレンドはこんな……土の匂いと血の匂いが立ち昇ってきそうな、生命力と現実性の塊、みたいな。

ああ、神様って、いるんだわ。
割れ鍋には、綴じ蓋を、ちゃんと用意する。

「……私も、お父さんと結婚すると言ったとき」
「……は、はい！」
「？」

まだもぐもぐとお弁当を押し込む大地が、変な顔をした。遠い目をして、誰に語るでもなく言葉を紡ぐ母。そんな姿、いつも人の目を見て話すかあさんなのに、見

たこと、なかった。

「……友達に、割れ鍋に綴じ蓋だ、って笑われました。
あの人ほんとに今珍しい野生児みたいな人で……わたし、昔から、身体が弱くて。でも、だいじにしてくれて。だから私も、できるだけのことを、しよう、と、思ったの」

「はい」

「……結局こんなふうになってしまって、ちゃんとできたかどうかわからないんだけど……

けど、あのひとはまだ、大切にしてくれるの。
だからまあ、そんなに間違ってなかったのかな、とは思ったりするんだけど……
ふふふ、ダメね。
美緒ちゃん……」

「はい」

ああ、遺言だ。
美緒の心は、震えた。

「……元気が、いちばん、よ」
「はい」

灰色のように澄んだ瞳に、頷いた。
それは、私も、よく思う。
なにが幸福かどうかとか、大変かどうかとか、そんなのどうでもいいんだ。
毎日こうして三人とお母さんが、私のお弁当を残さず食べてくれれば、それで。
それだけで。

にっこり。
お義母さんは笑った。

言わなくても、この子はわかってるわね。
なんて……いい子なんだろう。

逆境は人を育てる、という。それは一〇〇%の真実とは限らないが、逆境が育て

た人もいる。それは、事実。

「……かあさん、今日顔色いいよ」
「ええ、ええ、美緒ちゃんのパワー・フードをいただきましたから。……よぉし、そうね、次の帰宅日には、私がお礼に腕を奮うわ！」
「おっ、いいね」
「え～っ!?　い、いえそんな……いや、あの、えーっと……そう！　ぜひ、教えてください、おいしいお料理！　大地君のお弁当いつも見てて、すごいなあ、すごいなあ、って思ってたんです!!　ぜひ！」
「うふふ、たいしたことないわよ、私、時間だけはあるから凝ってるだけで……でもいいわね……娘ができたみたいで。うちはね、男所帯だから、たまには」
「あぁ～、わかります。ウチは女所帯なので、大地君みたいにガツガツ食べてもらえると、すっごく嬉しいです！」
「うふふ、わかるわ～。おかわり！って言われるの、うれしいわよね」

「はいー！　私の家だと、なかなか。みんな食べるのは好きなんですけど、男の子ほどじゃなくて……」
「うふふ、ぜひそうしましょう、来てね、美緒ちゃん」
「はい!!」

最後にカットしたフレッシュフルーツをヨーグルトで和えたデザートを、三人でつついた。
大地の話すサッカーの話を、二人はわけも分からないまま、聞いた。比較的おとなしい大地が、サッカーの話だけは能弁だった。本当にサッカーが好きなんだな、と二人で目を細めた。

――何度もぺこぺこお辞儀をしながら退出する息子のガール・フレンドと、まるでもうそれが当たり前かのように男前の表情で送っていく息子とを見送って、ゆっくりと、美沙は背を、立てたベッドにつけた。

胸と腹に、マグマが溜まっているようだった。内側から、燃えている。
なんの遠慮も会釈も躊躇いもなく、食材と火と格闘した結果の、青春の味。

正直なところ今の私には辛い、けど……
久しぶりに、「おなかいっぱい」を堪能した。
何も入ってない胃に、食べ物を詰め込む快感を。
それは本能の、喜び。

『……もう、思い残すことは、無いわ』

思ってはいけないと思いつつもしかし今回の入院では、こういう言葉ばかり脳裏に浮かぶ。自分の体調は自分がよくわかる、今回はすこし、様子が違うということが、そしてそれをひっくり返せる自信は、もう無いということが。
もっと辛かった時もある、でもその時その時、
「大地と広海を残しては、いけない」
と奮い立つことができた。最愛の夫を悲しませ子育てに手を取らせるわけにもいかないとも。あのひとにも、もっともっとやりたいことを、やってもらいたい……
でも今回は、それが、起きない。
まだまだといえばまだまだのはずだ、大地はようやくもうすぐ高校生、広海は小学校をまだ出てない、夫の仕事もまだ安定したとは言い難い。だけど……

めどは、ついた。
ああそれに、あんな素敵な……およめさんまで。
『……なんていうと、美緒ちゃんに悪いわね。あんないい子ならもっと……もっ……
……ぷ』
何ヶ月ぶりかで美沙は噴いた。
ああまさに割れ綴じだ、あの子のお相手こそ、大ちゃんじゃないと駄目じゃない？
あの子は優しいのかそういう性質なのか、自分をそういう「役割」に自分で押し込めている。
もったいない。そう思った。
地べたに貼りつくような視点ばかりでは、遠くも広くも明日も見えない。だから、大地のような遠くばかりみてる目も要るだろう。
ああ……神様。

この世の中は、なんてうまくできているんだろう。

――頭の中でお献立を考え始めた。若いがなかなかの強敵だ、ここは手のかかる和食で大人の味を……いえいえ、そう、真正面からハンバーグでぶち当たるのもいいかも。三人とも大好きだし、舌が慣れてるはずだし、「まだまだね」と……ふふ。

対抗心とか、やる気とか、そんなものが湧いてきたのも、前回が思い出せないぐらい久しぶりだった。眠れなくなるぐらい、何かを考えることも。

……ああ、楽しい。

薄暗い病院のベッドで独り、胃もたれに苦しみながらそう思うのは変ね。

またすこし、笑った。

■4　温かな上町家

「……えーっと、それからしばらくして、お義母さんの一時帰宅の許可が降りて、私もお邪魔して、一家団欒に。うん、お義母さんと相談して、お鍋とか焼肉も考えたんだけど、ここはやっぱり手を掛けた方がいいわね、って、ハンバーグとか、エビフライとかトンカツとか、酢豚にちらし寿司、豚汁にサラダ、とにかく作りまくって大皿にどんどん盛っちゃえ～って。そそ、お弁当だね。でっかいお弁当。

ごはんもいーっぱい炊いたよ。お義母さん私褒めてたくせにめちゃくちゃ上手いの。完璧なタイミングでうっすらおこげで。香ばしく甘く柔らかく。

『おむすびにしましょうか』

って二人で握ったなぁ……おむすびもお上手で、ふんわりしてるけどしっかりしてるの。私なんかパワーで固めてるだけだからね。

ふふ、でお義父さんおもしろい人じゃない、大地君の。あんなに楽しい人だと思わなかった。もっと、なんていうんだろガサツな人かと思ったら全然そんなことなくて、気を遣ってくださってね。ほんとムードメーカーって感じ。ウチで言うとちーちゃんみたいな。

広海君がこれまたふふふ、大地君に輪をかけて天然でね～。
『これとこれ、どっちが美味しい？』
ってお義母さんがお義母さんのハンバーグと、私のハンバーグと、言わずに食べ比べさせて、だっていつも食べてる方がいいに決まってるじゃない？
お義母さんの方指して
『こっちの方が断然うまいー！』
わはは、って皆で笑うしかなくて。
お義母さんの嬉しそうな顔……
大地君がね、また大地君らしいフォローになってないフォローするの。
『でもこっちもたまに食べるなら美味しいと思う』
ってたまかー!!
……まあでも、あの日あの食卓は、お母様が主役だったから。みんなそれわかってたのかもしれないね。
お義父さんがシャンパン出してきて、ほんの少し、口にされて喜んでらしたわ…
…たった一舐めで頬をピンクにされてね。
楽しかったな……
『……今度はぜひお義母様と、妹さん達も』

『はいぜひ。みんな喜びます』
ここで広海君。
『オレもにいちゃんみたいなメシのうめぇ彼女欲しい～～～！』
メシの、うめぇ、ですよ。
可愛いとか優しいとかね、そのー。
そしてまた大地フォローが入るんです。
『美緒は彼女じゃないよ』
じゃなんだと。
ええ？　言ってみなさいと。
そしてまたお義父様がこの二人の父でねー。
『わっはっはー、美緒ちゃんぐらいではこんな美人でハンバーグのうまい嫁をもらったおれ様にはかなうまいー。どうだかあさんとの馴れ初めが聞きたいかー!!』
ぐらいでは、て。
『もうそれ何万回も聞いた』
『酔っ払い嫌いじゃ』
『わっはっはー!!』
お義母様と二人、笑うしかなかったわ……」

「まあ、それが、全然包み隠しの無いところが、あの一家の、いいとこでね。ふふ……

そうだね、うちの家族もみんなで、一度、ホームパーティ、したかったな……

それだけが心残り。

はぁ……

『やらずに後悔するより、やって後悔しろ』

ってよく言うけど、ホントそうだよ。やろうと思った瞬間に立ちあがらないと、なにも、やれない。そしてあとで、後悔するの」

もしあの時「今日行くから！」と言わなければ、こんな思い出も手に入ってなかったかもしれない。ナナが「やらへんか！」と聞いた時、とっさに首を縦に振らなければ、ミラクルズは無かったかもしれない。

人生は本当に、そんなことの連続だ。

「……もうすこし早くお会いできて、もうすこし時間があれば……」

今でもキッチンに並んで立ったあのひとときを思い出す。我が母は私に台所を譲

ると決めた瞬間、一切なにもやらなくなった。その方が合理的だ、キッチンの主は一人でないと、配置も使い勝手も悪くなる。だけど……

「あっ！　そう、カレーライス！　大地君ね、今もあれだけは絶品だった絶品だったってブツブツ言うんだけど、どんなものか聞いてもちーっとも要領を得なくて……いろいろ作ってるんだけど、あれだけは、どうにもならないね。あれだけ、教わっておきたかった、なぁ……」

母と娘が他愛のないおしゃべりをしながら、家族のお料理を作る。そんな時間が、もっとあっていい、とその時思った。我が家では、しばらく、無理だろうけど。

「……美緒ちゃんは本当にお料理好きね」
「あはは、ええ、まあ。
なんか、なにも考えなくて、いいので、好きです。
ジョギングみたいな感じ」
「ふふふ。お料理の道に進むの？」
「あー……でも私根性ないので、料理人の厳しい道は絶対無理だと思います、し、

なんだろう、家庭料理みたいなのが、好きなんです。ハンバーグとか、お鍋とか」
「小さなビストロで、そういうお料理を出したら？」
「そういうお店ですかぁ……そういえば、そういうお店って実はあんまり、無いんですよね……」
「あれはね、お金にならないからね」
「そうなんですか？」
「そう。上手い人ならもっと稼ぎたくなるし、下手だとそもそも潰れちゃうし、難しいのよ」
「なるほど、それで無いんですか……
でも、ということは、上手な人が、稼ぎたいと思わなければ、いいんですよね？」
「ふふふ。そうね。
そういう奇跡が、起きれば、ね」
「私、あんまり、お金はそんなに、なので、腕さえ磨けば、ひょっとするとひょっとするかも」
「ええ。美緒ちゃんなら、きっとできるわ」
「そう、ですか、なー？」

不思議な言葉でまだ納得してない彼女に、ひとつだけ。

「……自分で可能性を狭めちゃダメよ、美緒ちゃん。ダメなことは、向こうからダメって言ってくるから。こっちからダメって決め付けることは、ないの」

「……そう、です、ね」

「そう」

そうだ。

最後の瞬間まで、わからない。

もう一度、もう一度だけ闘志を、振り絞ろう。

美緒はお義母さんの瞳が、すこし光っているのを見た。あるいは、濡れていたのかもしれない。

「……がんばります」

好きな言葉だった。今でも。

「……はい。私も」

お義母さんはにっこり、笑ってくれた。

■5　閉じる世界

――空港を駆け出ると、タクシーを飛ばした。まだ動かぬ明け方の街の光が、全身の体力知力を振り絞った後十数時間一睡もしていない目に痛い。

病院に着くと、ロビーに美緒が待っててくれた。助かった。ダメなら、急ぐ必要はない。

「運転手さん！　荷物あとでいいですか!!」

美緒らしくなく怒鳴った。

「こっち！」

美緒は走った。僕も走った。

エレベータのボタンを叩くようにして開ける。乗る。彼女は、腕を組んだ。

「……悪い？」
「お義母さん、大地君、待ってる」
搾り出すような声に、覚悟を決めた。
「……かあさんッ!!」
「「大地!!」」「にいちゃぁあああん!!」
病室には見慣れた顔、顔、顔。取り囲んでいた、おばさんおじさん、看護師さんお医者さん。
近づくと美しかった母にはマスクが掛けられ、顔色は、土のよう。眠るように眼は閉じられていた。
毛布の中にある手を取る。冷たい。
「かあさん……大地だよ。ただいま。
ごめんね、優勝するって約束したのに、勝てなかった。

……これ、銀メダル。ほら、意外と重いでしょ。金でもよかったんだけど、かあさんにはきっと、銀の方が似合うかな、って」

手に握らせる。もう反応もない。それでも、両の手で包み込む。

「かあさん……かあさん、ごめんね」

「……観てたぜ、昨日の明け方も。おめぇ、アシスト決めただろ。ずっと眠ってたのにあの時だけ、ぴくっ、って動きやがって……アナウンスのお前の名前に反応したんだ」

「……かあさ……ん……」

ぽた……ぽたぽた……

涙が母と自分の手を濡らす。

その時、奇跡が起きた。

「あっ!!」

冴子おばさんがその高い声を張り上げた。

「みさちゃんッ!!」

僕は目を開けた。

目を開けて、こちらを観てくれる、母の瞳が、あった。

「おかあ、さんッ!!」

力いっぱい手を握った。ほんの少しだけ、返ってきた気がする。それよりその瞳で、僕に、なにかを語ろうとしている。覆いかぶさるように、その口元へ耳を寄せた。看護師さんが、酸素マスクを取ってくれた。

おかあさんらしい、言葉だった。

いつもいつも僕らと父さんのことばかり考えてる、かあさんらしい。

「……おめで……とう」

僕は泣いた。

声を上げて体を震わせて、涙が滝のように止まらない。でも、おかあさんからは、目を離さない。一瞬だって、離してなるもんか。

じり……じりと逆の方を、とうさんと広海の方を向く。二人も、右手を取って、おんおん泣いていた。

もう言葉を出す力はなかっただろう。

ちいさくちいさく、うなずいた。

二人は泣きじゃくりながら、大きく大きく、うなずいた。

そして真正面を向くと、笑って、うん、確かに笑って、すーっと、力が、抜けた。

ああ……

胸の底から雄叫びが漏れた。
ただ勝手に声の塊が出ていくのにまかせた。たぶん、魂の何分の一かも、一緒に出てってる。それでも、よかった。

かあさん居ない世界になんて、なんの意味があるんだ。僕の試合を観てくれる人の居ない日々になんて、なんの価値があるんだ。

奇跡など、起きない。
どんなに力を尽くし知恵を絞り命を削っても、人は、死ぬ。
絶対に、人は、死ぬ。
イエスだってブッダだってムハンマドだって、死ぬ。
奇跡など、起きない。

――心が閉じてゆくのを感じた。
周りの声が音が、現実味を失っていく。まるでラジオかテレビのように。冷たくなったおかあさんの手も、もうまるで、おかあさんの手じゃなくて、粘土みたいなものだった。

違う。
こんなの、僕の居るべき世界じゃない。
違う。違う、違う、違う。

人間は、そこに居ようとするから、そこに居られる。
大地は、その時から、それを止めた。

――エンゼルケアの間。

「……大地君。……メダル」
「……それは、かあさんに、あげたんだ」
「あのね、いまは、だめなの。
あとで、また、祭壇にお供えするから、いまは」
「じゃあ、捨てて」
「大地君……」

美緒には、父の記憶がほとんど無いが、母の記憶ならあった。父を喪った時の、茫然たる母の記憶なら。

おかあさん！　おかあさん！

叫んでも泣いても無反応で……五つの娘は、下の三人とともに、言いようのない不安に駆られた。

捨てられるんじゃないかと。

その不安から、そして家族の崩壊から救ってくれたのは美鈴おばさんの一喝だった。

今もよく我が家に来て焼酎をカッ喰らってはあることないことしゃべりまくる愉快で豪快な美鈴おばさんは、母の胸ぐらをつかんで、頬を張った。

パーンパーン。パーンパーン。

何度も、何度も。

その音は今も、耳の奥に残っている。

「美里!!　バカッ!!

あんた子供どうするつもりよッ!!

それでも母親かッ!!」

母は我に返った。私の知る、母の顔に戻った。
そこから、私たち家族の再構築が、始まった。

あれを、やらねばならない。
私が。
それが私の、義務だ。
お義母さんに直接言われたわけじゃないでも、私が、やらなければ、誰が、やる。

手を組んでただ虚空を焦点の合わぬ目で見る大地君は、もう「あの」大地君じゃなかった。
元が美男子だけに表情から意思の支えを失うと、まるで能面のようにつるつるして不気味だった。
あの頼もしい大きな体躯さえ、今ではなにをしでかすかわからない薄気味悪さになっている。

だめだ。

こんなんじゃ、ぜったいだめ。
大地君は、また、あの光り輝く太陽のように、みんなを照らさなきゃ、だめなの。
美緒は固く心に誓った。
母は息子を見守り続けた。
息子も母を見守り続けた。
母は死んだ。
だけどもう一人、
見守り続ける人が、生まれた。
§
「……ん？　どうして息子ほっぽり出して、ってか？
あぁ……
あのな、ああいう時は、自分で這い上がるしかねーんだ。結局自分の問題さ。自

分でなんとかするっきゃねーんだよ。
あぁ。そぅ。なんとかしようと思ってると、最後に、なんとかなるんだ」
「あぁ、おれの話かい？　まあ、雑誌なんかに苦労人って書いてくれるけどさ、おれは全然、苦労なんかしてねぇんだ。
昔はＦＷでね。プロんなって、そこそこだったんだぜ？　シーズンでそうだなぁ……10点は難しいかな？　でも取らないわけじゃないぜ？　て感じの。キャリアハイが確か8だったかなぁ……決勝ゴールもロスタイム同点弾も決めたぜ？　まあ、エースじゃねぇけど2トップの片割れならコイツなら計算できる、って選手だった。
それがさ、ある日監督に『サイドバックやれ』ってさ。ああ、外人が来るんだ、外人が。ＦＷに。それでさ。
冗談じゃねぇよ、おれディフェンスなんか中学ん時からやったことねー。
それに……それ、フォワードクビだってこったろ？　冗談じゃねぇ、おれより点取れるヤツはチームに一人で、あとはおれより取ってねぇ。来るヤツだって、ビッグネームが来りゃ別だぜ？　カントナが来るとかファンバステンが来るとか言われりぁそりゃ別さ。けどブラジルのどっか知らんチームから呼んだような若造に……
監督と大喧嘩しちまってねぇ。
今思い出してもバカだぜおれ。要は、サイドバックが嫌だったんじゃねぇんだ。

『認められてない』って甘ったれた学生気分でさ。プロじゃなかったねぇ……」
「監督とはまだよかったのさ。向こうもプロだからね、時間掛けて説得しようとしてくれてんだ。けどフロントに持ち込んじまってさ、おれ自分で。それも甘えさ、ここで長年やってきたおれの話なら、いくらか聞いてくれっだろう、ってね。
そしたら……ああ、今思い出してもあの瞬間は忘れらんねぇな、
『じゃあ、クビだ』
その一言で終わりだ。
何シーズン戦ってきて何得点取ってサポにどれだけ愛されたかとか、そんなの全部関係ねぇ。
プロ・スポーツってのはその一瞬一瞬なんだ。いま、必要でなければ、クビ。
……ま、その方が、別のチームで欲しがってるところに拾われる可能性がある、という考え方も、あるけどねぇ……」
「バカは死ななきゃ治らねぇ、って言うけどさ、おれはその時死んで、で、ちーとばかし治った。
『ヤバイ、サッカーできねぇ！』
ハハハハッハハ、バカだろう、おれ!!
そんな当たり前のこと、わかってなかったんだ。

それから就職活動さ、お前ねえ、昨今の学生さんが就職ない就職ないっつってるけど、甘ったれるんじゃないよ。おれ達なんか職場がそもそもほんのちょっとで、しかもギチギチに定員埋まってんだ。少々いい選手でもいろんな条件合わなきゃ、働くことすらできねー。なんでもいいから始めてみろ、ってんだ」

「……でまあ、人の縁に助けられてなんとか今んチームに潜り込ませてもらった。もうＦＷにこだわってる場合じゃねぇ、なんでもやりますって頭下げたさ。足はまあ速かったからね、中盤でもバックでも。

そしたら『サイドバックやってくれ』と。

それだったら最初からやってりゃよかっただろ!?

でもんなこと言ってる場合じゃねぇ、ゼロからスタートさ。ああ、ユースの練習に混ぜてもらって一から基本から勉強した。

……人生どこでどう転ぶかわかんねーなー。そん時おれが混じってやりゃあ、そりゃ若いのからすれば憧れのプロだわね。みんな懐いてくれるんだ。ちょっとしたこと教えたり教わったりしてるウチに、なんだか楽しくなってきてな。監督とか指導者なんてそれまでこれっぽっちも考えて無くて、向いてねーと。座学とか大っ嫌いだしよ、システムとか戦術とかいつも苦手でねぇ。引退したらかみさんと一緒に喫茶店でも開いてのんびり暮らそうと思ってたんだがな。それが、これもいいなと。

でまあ、今こんな感じだ」
「……はじめての出番は意外に早く来た。ま、そこそこ金の掛かってる中堅を遊ばせておくわけもない。
ハハ、それが因縁の相手、古巣の、マッチアップはおれを追い出すきっかけになった外人さ。クラブも監督も、おれの性格知ってるから焚きつけたんだろうな。
けど肝心のおれはガッチガチに緊張してて……だっていわばルーキーだからな。サイドバックとしては。んで、失敗したらまたクビになるかも……なんて恐怖心もあってなぁ……」
「最初チンッチンにやられてさ、相手テクニシャンだから縦切ろうとしたわけよ、突破されちゃと思って。そーすっと中へ切れてビューンとシュートさ。そこへＦＷが頭から突っ込む。マズイ、と思って中を切ると、縦にバスーン突破してボーン、クロスさ。いやもう、ああ、駄目だ、こりゃクビだ、と思ったぜ」
「……そこで、よ。
ここから、のろけ話。
いつもどおり美沙が来てくれててね。あいつ、日傘必須だからいつも一番安いスタンドの一番客の居なさそうなところにいるんだ。
ちょーどその傘が目に入ってね……もちろん、横ちょにいつものリー姉ちゃんが

介護、じゃねぇ、看護か、付いててくれてたんだけどね、珍しく立ち上がって、なんか言ってんだ。
もちろん聞こえねぇよ、聞こえねぇんだけど、おれにはわかった。
『シュート』
って言ってやがんだ」
「あいつ、わざとサッカーのこと知らないようにしてたんだ。知ると口出ししたくなるだろ？　おれの性格からしてそーゆーの絶対だめだからな。それに、知ってしまうと同じように深刻になっちまう。
『わからないけど、がんばって』
っていうのをずっと守ってたんだけど……そん時だけは、誰でも知ってる用語で、応援してくれた。
そうだよ、おれは、シュート撃たなきゃ。
なんたって元フォワードだぜ？　点を決める男だぜ？」
「ああ、目が覚めたさ。
相手に合わせようなんておれの柄じゃねぇ、押し付けるんだ、おれの意思を。
そいつほったらかして最前線サイドへ突っ走ったさ。
……ああいう時って、なんかポロリと運が味方してくれるんだ。いや、まあ、お

決まりの言い方をすれば、その強い意思が、運を引き寄せたんだな。
ぽーんとボランチからパスが来て、さ。
突然のことだったから真ん中誰もいねーんだ。おれが自分で持ち込むしか無い。力一杯走って、力一杯撃った。ロング。三五m近くあったんじゃねーの？
ズバーン！
……スタジアムが、沸いたねぇ。おれ喜ぶのも忘れてあいつんとこへ突っ走って、何度も何度も腕を突き出した。手を叩いて、喜んでくれてた。あんなに喜んだ顔、そんなに見たことねぇなあ……」
「ほんと、人生なんてわかんねーもんだぜ。
そのたった一発でチームにサポに認めてもらってさ、以降幸いなことに引退までずっとレギュラーやらせてもらってな。ＦＷじゃ候補にもならなかった代表にも呼んでもらえて……まさかおれみたいな雑草が日の丸つけてプレーできるなんて夢にも思ってなかったからな、嬉しくてしょうがなかったぜ。バカだからおれ、それ決まった日にレプリカ注文してさ、自分の名前と番号入れて、特急で作ってもらって美沙の前で着てみせたもんさ。ちょっと待ちゃいくらでも着れるのにな。わはは、恥ずかしいな。これは内緒だぜ？
いやー、今でも山田さん……ってのは最初におれをコンバートしようとした監督

さんなんだがな、研修で会ったりすると『てめぇ俺が言うとヤダっつったくせに』ってイジメられるんだがね」

「……まあつまり、そういうこった。

人間、どこでなにがあるか、わからん。

とんでもない悲運に突然見舞われることもある。

外人が突然来るとかな。

あ、そいつそのシーズンでクビになった。へへへ、ざまぁみさらせ。そいつよか、フロントな。

んで、とんでもない幸運が降ってくることもある。自分がなんの努力をしなくても。

ああ、ああ、おれに美沙みたいな素晴らしい人間が、嫁に来てくれたみたいな、な。

だから、辛い時は、投げ出さずに、じっと堪えてりゃあそのうち、雨も上がって、夜も開けて、太陽が照りつける、ものさ。

それを、奇跡、っていうんだ。

人間がどうであろうと、陽はまた昇る、ことがね」

「……おれは大地はそれができると思う。

なんたっておれの息子で、美沙の息子だからな。母親にいいとこ見せたいってだけであんな、世界中がひっくり返るような力を出せるヤツだからな。

今は……自分の力以上のものを出しきって、疲れ果ててんだよ。そっと、体力と気力の雫が、ぽとりぽとり、溜まっていくのを、待つしかねぇさ」

「ハハハ……

ああ。なんたってサッカーはほんとうに面白いからな！　おれも監督業がこんなに面白いとは思わなかったぜ！　一度この麻薬の味を知ってる人間は、そうそう抜けることなんかできねぇよ。しかもあいつは、あんなヒリヒリした一番ドギツイ奴を、味わっちまってるからな」

「夢は……そうだな、なんでもいい、どんな形でもいい、あいつと戦ってみてぇな。あいつはおれより美沙と仲が良くてなぁ……ああ嫉妬だ嫉妬。息子に嫉妬！　カッコ悪りぃだろ？　わかってんだよ、母親にしてみりゃ赤の他人の旦那より、半身の息子のほうが百倍可愛い、っての。しかしそれとこれとは話は別だ。勝って天国の美沙に、どうだおれの方がカッコイイだろ、って言いてぇ。

ハハハハハハハハハハ……」

■6　ナナの無謀

――難波鳴海、愛称ナナには野望がある。

「日本一の攻撃的ミッドフィルダーになる」が、それだ。ただし、実現は極めて難しい。なぜなら、同世代いや同い年に、サラブレッドの彼女をもってしてもライヴァルと誰も呼んでくれないほど図抜けた存在が、あるからだ。

ナナの生い立ちは大地に似ている。父がプロ・サッカー選手で（余談だが、十三とも面識がある）兄二人もその道に早くから進んでおり、自然、家にあるボールに掴まって立った。地元クラブと家庭で英才教育を積み、生来の陽気と元気、そして負けん気、それにプラスしてやはりすこしは血もあったのだろう、メキメキと腕いや脚をあげ、小学校六年生の時にひとつ上のジュニアユースの合宿に呼ばれた。

そこで生涯……といってもまだ一二年だが……最大のショックを受ける。

そのライヴァル、清水リカとの遭遇である。

「……いやもう宇宙人。今でもそうやけど当時もっとひどい。んなもんね、あーた、えー……うん、エーリアン。も他に言葉知らんわ。
ポーンって跳ぶやろ、セットのヘディングとかな？　んだら、スパイクここにくんねん」
頭の上を指す。
「ウチも跳んでんねんで？　ダッシュやるやろ二〇ｍぐらいの。ウチそら、一〇〇ｍ走なんか、んな速よないけど、ダッシュやったら結構やるつもりやってんけど、いやもう、背中ちっちゃーなってんねん二〇ｍで。
ワッケワッカラン。
なんじゃコイツ、と」
「ほんでな？　それで身体能力だけで足元覚束へんとか、そんなんやったら可愛げあんねんけど、足元がまたビックリするぐらいや～らかいの。リフティングかてウチより巧い。ウチ、今に至るもリフティングで負けんのんリカぐらいやで？
ウチさぁ、あんな自信粉々に砕かれた経験、あれ最後にしたいわー。もうだってさぁ、三つ四つからやってますねん、いうのがアイデンテテーやったわけやん？当時のウチの。
んーなの全然関係あらへん。

めちゃくちゃ巧いしめちゃくちゃ正確でやー。
ほんま泣きそうやったで。
ああそうそう忘れたあかん、シュートやシュート。
雷撃シュート。
もうな、あんなシュート男子の世界レベルのプロの試合でもなかなか見れんで、いうシュートが
ドギュワブオロドゥヴァーーーーン!!
いうて飛んで行くねや……ゴールの網千切れるっちゅーねん。
も、どうしようもないでホンマ。勘弁してくださいと」
「当時から背ぇ高っかいし小顔でお人形さんみたいなモデル体型やし、なんじゃコイツわ、と。いやいや、ウチだけやないで、みんな茫然としとったわ。なんちゅーても地域地域チームチームで女王様やった人間ばっかりやからな、『自分より凄い』なんて存在には慣れてへんのや。ありきたりやけど世界は広いと。上には上がおる、と」

しかし、ここからが難波鳴海の難波鳴海らしいところである。

「……稲本さんがな、うん、代表の。潤一さん。あの人小学生の頃に小野伸二さんに出会ったんやて。ほんで、天才の華麗なプレーにショック受けて、『コイツおるかぎり攻撃的ミッドフィルダーではオレは日本一になれんぞ!?』と思て、ボランチ、守備的ＭＦに自分でコンバートしはったんやて。

ウチは逆や。

ウチはいつでもポジティブ・シンキングやねん。

コイツこんな凄い、圧倒的っちゅーことは、コイツさえ超えたら、いや、コイツのできへんことやったら、ウチは日本一ちゃうんか、と」

前向きというよりも、大雑把である。

「いやぁ、ほんま今は、いやもう今仲良しやけどね、アイツには感謝感激雨アラレですよ。ほんまアイツ居てくれてよかったほんま思う。だってウチの教科書やもん。なんていうたかなえー……そうそう、ベンチマーク。アイツに追いついたら合格、ってことで。

ま、ほとんど追いついとらんねんけどな、げへへ」

と、謙遜はするが、そこは末っ子らしい、はしかいさ（大阪弁で「機転のきく」（ちょっと「ずる賢い」というニュアンスもある））で、ナナはリカが持ってない武器を集め始めた。

リカはその圧倒的な得点能力を活かすため、常にゴールに近いところでの仕事を要求される。ならば、彼女にパスを出す役になればいい。

サイドに開いてドリブルで突破する突破力、正確なクロスを供給するセンスと技術。

セットプレーの時にも、リカはシュート役としてガツガツゴール前で競っている。その頭や足元にピンポイントで合わせる。あるいは、と見せかけて、直接狙う。

また、敵のプレッシャーをかいくぐるためにサイドに開いた彼女に、逆サイドや低い位置からロングパスを出す……そのための、広い視野、冷静な頭脳。

あっという間に「名コンビ」と言われるようになり、「この二人で女子代表の攻撃的ＭＦは一〇年大丈夫」と持ち上げられた。

が、世の中そううまく行くばかりでは、ない。

高校生に上がる時に、もちろん強豪からオファーが来た。高校女子といえばここ、と誰もが認める聖愛学園、のサッカー部通称エンジェルス。サッカー小娘なら誰もが憧れる、ビアンコ・ネロ（白黒）のユニフォーム。

「……そら『遂にウチもあそこに！』と盛り上がったで。……せやけどな、よー考えてみたらな、そら……リカも、来るわけよ。電話して聞いたん。あいつなー、ちょっと捉え所のないところがあって、
『言っちゃいけないって、言われた』
いやそれ秘密になってないやんか。まあ、あいつなりにそうやって情報くれたんかもしれんけど……」
「んで、考えました。よ～～～考えました。
そして、面接受けに行きました。ええもちろん、立飛（たつひ）監督御自らお出ましいただきまして、ええ」

「……だいたいわかりました、あのう、それで、ひとつ質問なんですけど」
「ウン、なんでも」
「リカ、来ますよね？　清水リカ」

「……他の受験生のことについては、口外してはいけないことになっているのでね、イエスともノーとも言えない」

と、首を縦に振りながら立飛さんは言うた。

割とおもろいとこあるんやな、と思った。映像で、そしてこうして間近で見てる限りは、歳に似合わぬ（まだ四〇代のはずだ）総白髪のいかにも厳しそうな人なんやけど。

「エンジェルス伝統の3―5―2やと、いわゆる攻撃的ＭＦがトップ下一人になってしまいます。当然、誰が考えてもリカになると思うんですけど、その場合、ウチはどうすればええんでしょう？」

「……」

立飛は、もちろんその質問が出ることも想定はしていた。難波君は、ぜひ欲しい。だが、ここがもしプロ・クラブで、オフェンシブハーフを一人しか取れないというなら、清水君になる、のも事実だ。

「システムは永続的に決まっているものではないね。だから、４―４―２や、３バックでも１トップで２シャドーの可能性もある、それに、怪我や」
「いや、ウチの聞きたいのは、そこのファーストチョイスは、リカですよね？っちゅーことです」
「……もし、君より優秀な攻撃的ＭＦがいれば、それは当然、そうなる」
「ほんでそこでですね、ウチは、そのポジションにこだわって、ベンチに居てもええんか、それとも伝統と格式のエンジェルスとしてはいや、名将立飛監督としては、そういうワガママはダメで、たとえばＦＷへ上げるとかウイングバックやらせるとかボランチやらせるとか、そういうことなのか……それが、聞きたいんです」
「……フム」

ダメか。そう思った。
彼女の中にすでに答えはあって……

惜しいな……

立飛は、名将と言われ実際に何度も大きな大会で優勝しているだけあって、過去

のことなどほとんど振り返らない。
だが人間である以上、後悔の種がゼロである、ということは無く、弱い酒でも入るとポロリ、と漏らすことはある。

『私の失策の最大のものは、あの時難波君を、嘘をついてでもチームに入れておかなかったことだ。
嘘だけは、つけないね、性格的に』

「……やはり、チームはみんなで作っていくものだ。これが嫌だあれが嫌だを無制限に認めてしまっては、成り立たない」
「つまり、ボランチやれ、ってことですよね？」
「そういう状況になれば、だね」
「……ありがとうございます、監督」

彼女は立ち上がった。
その目には、挑戦的な輝きがあった。
ああ……

これも、我々には、少ない。
最近の子は、面接をすれば輝く瞳で「はい！ぜひ！」と笑うばかりだ。

「……ウチ、エンジェルスずっと入りたかったです。ウチ阪神ファンで、どうでもいいことですけど、縦縞着たかったです。けど……
オフェンシブハーフ、やりたいんです」
「……」
「すみません。
また、なんかの機会があって監督のチームに人が足りない時は、そしてその人手が攻撃的ミッドフィルダーの時は、ウチ呼んでください。駆けつけます」
「難波君。
嫌味な言い方になるかもしれないが、うち以上の環境は、日本にはない。三年我慢するという、あるいは三年勉強するという、考え方もある」
「わかってます。せやけどたぶん、ウチにはそれは、我慢できへん」
「逃げるときは、逃げこみ先を用意しておくものだ」
「まず逃げな、潰れてしまいます」

同じようなことを言って消えた才能を、長いサッカー生活で、山のように知っている。持って生まれたものだけでなんとかなる中学生までと違い、その後は、その選手に合ったきめ細やかなプロの指導が、絶対に必要だ。彼女のおそらく描いている絵は、絵に描いた餅に過ぎぬ。

返す返すも残念だ、彼女はその技術や経験もだが、四六時中チーム全体に気を配れる。その資質とキャラクターは、ぜひうちの大人しい優等生たちに混ぜたい……が。

これも運命、か。

「……そうか。わかった。大変に残念だが……
ぜひ、どこかで対戦しよう。切望してるよ、難波君」
「はい！　ありがとうございます!!」

出した手を両手で強く強く握りしめてくれた。
この子は、情の濃い子だな、と感心した。

意外に早く、二年後、立飛のその願いは叶うことになる。

余計な心配など不要だった。難波鳴海は、最高ではないが最良の環境と、プロではないが素晴らしい指導者を、自分で見つけていた。

やはり、無理をしてでも、獲っておくべきだった。

■7　D・S・C

美緒は、今でもナナに誘われた時のことを覚えている。昼食後、まだ高校の新入生ほやほやで、おたがい探り合いながらみんなとおしゃべりをしていると、元気一杯の大阪弁の女の子が、絡んできた。

「サッカーやれへんかー!!」

唐突にもほどがある。だいたい、昼休みサッカーで汗まみれになるのは男の子であり、女子はバレーやバトミントン、そもそもスカート履いてて……

彼女はすでにジャージ姿だった。

「えと、難波さん、だっけ、サッカーは大変じゃない？」

「そうだよ、汗だくになっちゃう」

「なにを言うてるんですか、身体動かすと元気出ますよ、ダイエットにもなるし、シェイプアップもできます！　見て、このヴィーナスも裸足で逃げ出すナイス・ス

タイル」
「……難波さんに、そう言われてもねぇ……」
「「あはは」」

ナナは、実は無駄な脂肪などまったく無いのだが、ジャージの上からだとちょっとぽちゃ気味に見える。上背もあんまりないから、よく言えばトランジスタ・グラマー、悪く言えば豆タンク。

「ええでサッカー。楽しいで～？　学業で疲れた頭にはなにも考えずにボールを追う一時、これです」
「それはそうかもしんないけどー」
「……難波さん、私、放課後なら」

サッカー。
そう、大地君の大好きだったもの。
なぜかピンと、これをよく知っておかねば、という気持ちが鋭く立ち上がった。
「知る」には、「やる」が一番。

「おお～！　……えとごめん、誰やっけ」
「長居美緒。美緒でいいよ」
「よしみーちゃん、あんた見込みある。安産型やし。うん、チーム結成やー!!」
「「はやっ!!」」
「あははははっ」

確かに二人居ればチームと言えなくもない、が、確か一一人ほど必要なはずだ。
楽しい人だなぁ……と、美緒は顔のほころぶのを感じた。うん、友達になったら、楽しそう。

「夢は優勝やー!!」
「な、なんの!?」
「全国大会があります。『クイーンズカップ』つーんですけどね、これ誰が出てもいいの。つまり私ら高校の部活でない者でもいいんですわ。これ!!」
「ちょっ、ちょっと難波さん、それってでも、全国から強いチーム集まるんでしょ!?」

「もちろん。聖愛学園も、西海女子も、あいやいや、ヴァルキリーズもプロミネンスも、もちろんアマテラスも!!」
「わ、な、なんかわからないけど強そうな名前がいっぱい」
「夢、大きすぎない？　難波さん？」
「夢はでっかい方がええねんて。でっかい夢見てても、実現すんのはちっちゃい夢でね」
「まあそうかもしんないけどー」
「でやあんたも！」
「あーあたしパスパス。ムリムリ。低血圧なの」
「あんたは！」
「私高血糖」
「ユー！」
「帰ってコミケの原稿描かなきゃ……」
「みんなあかんねぇ。身体動かさなあかんよ？　女は体力、これです」
「ふふふふ……そうだね」
「せやろ？　ほら我がチームメートはようわかってる。うん、体力、大事やんな」
「それと元気だね」

「そそ。……なんや気が合うね。これは新・黄金コンビの誕生の瞬間かもしれんぞ!?」
「新、ってことは前に誰かと？」
「わっはっは、まあね、日本一のコンビを、ちーとね」
「「あはははは……」」

みんな、冗談だと思ってた。もちろん、単なる事実である。

――その日の放課後から、我らが放課後サッカークラブは始動を開始した。
ジャージに着替えて、二人でジョグをした。ストレッチをした。パスの練習を始めた。ドリブルの練習をした。難波さん……「ナナと呼んで」……ナナは、ハチャメチャに巧かった。もちろん美緒はド素人である。びっくりした。

「ナナ、本当に巧いね!!」
「わっはっは、まあ、ちーとやってっからねー」

最初からジュニアユース代表だのなんだの、その世代の攻撃の中核だのといった

素性を明かさなかったのは、そんなことを言い出せば誰も恐れをなして近寄らない、という計算だろう。
それは当たってて……

美緒は、持ち前の社交性で、徐々にできていく友人達に放課後サッカークラブを勧めた。

クラスにべらぼうに綺麗な、日本人離れしたスタイルの猫みたいな女の子が居た。独りでいた。猫の習性は知ってる。ほんとうは人恋しいけど、くっつかれるのが苦手なのだ。その距離感を保つと、すぐ友達になれた。
和泉流乃である。

大柄でいつもニコニコしてて、メシをガバガバカッ喰らう、男の子みたいな、でもよく見ると野性的な彫り深い顔立ちの素敵な女の子が居た。メシを差し出すと無二の親友になれた。
天満蘭である。

目が覚めるような美人が居た。古い表現だがスクリーンから抜け出たような、完璧な美女で……あるがゆえに、みな遠巻きに観ていた。大地の時同様、突撃した。触れてみるとごくごく普通のおちゃめな女の子だった。もちろん友達になった。

堺愛。

いかにもキリキリしてて勉強もできそうで、前期の委員長に先生が指名した、おでことメガネの印象的な女の子が居た。でも実は制服の着こなしがパリッとお洒落で、それを誉めたり一緒にお弁当を食べてグルメ談義をしてるうちに、いつしか友達になってた。

美原はなこ。

まあ要するに、みんな新しい環境で友達が欲しくて、その友達と語らう場が、一緒に過ごす場が欲しくて、それが、放課後のサッカーだった、っていうだけだ。

しかしそういう形に持っていったナナは、見識があった。

もちろん上級生も誘った。こっちは同級生より簡単だった。クラブ勧誘の日、許可を貰って食堂の隅でわいわい喚いてると、大柄でものすごグラマーな先輩が、それあんたヤバイのでは、というミニ（うちの制服はスカートやスラックスにバリエ

ーションがある）で、近寄ってきた。
自分もそうだからよくわかる、こういうタイプにはこれ一発。

「ダイエットに、サッカーどうですかッ!!」
「う〜〜ん、やるッ!!」

ずるずると、芋づるで、その先輩――梅田もも――の友人一団四人も同時ゲットである。運が良かった。
1年生六人、2年生五人、3年生は残念ながら取っ掛かりが無くて入ってもらえなかったけど、一一人、揃った。

「……チームに、なっちゃった、ねぇ……」
「『なった』んとちゃう。『した』んや!!」
「はいはい。ふふふ……」

なってしまえばこっちのもの、ナナは徐々に練習の密度と濃度と強度をあげた。
そして、鍛錬というものはあまり極端でなければ、強めの方が楽しい。なぜなら、

「自分が成長していく」ことが、実感できるから。
ましてド素人から育っていく部分が、一番伸びがあって楽しい。
すぐ上がってた息が三〇分持つようになる、少々ぶつかっても倒れなくなる、ボールが来ても慌ててなにもできなかったのに、パスを出せるドリブルができるシュートが撃てる。そしてそれが、ゴールに入る。ゴールゲットのその快感たるや……
より高く・より速く・より強く。
スポーツの根源的な悦びに加えて、メシが旨くてしょうがない、汗を掻いて体調もいいしお肌もスベスベ……そして陽気な仲間と楽しいおしゃべり。
ナナが音頭を取って、美緒がノって、マキがボケて、はなをイジって、ユミ姉がツッコんで、みんなで笑った。
いつしか一一人は、放課後サッカークラブに、のめりこんでいた。

「……ナナ、いいかげん名前決めなきゃいけないんじゃない？　いつまでも『放課後サッカークラブ』じゃダメでしょ」
はなこが言う。
「え〜？　ウチこれ気に入ってんねんけどな〜。これカッコええで、逆に。全国とか行ってなんとか高校とか企業名とか並んでる中に一個だけ

『放課後サッカークラブ』
ってあんのん」
「それはナナのノリだなー。私あんまり……」
「カッコよけりゃカッコイイ方がいいね」
「ん～……そう言われてもなぁ……ん～……」
「可愛いのはどお、ナナちゃーん？
『ドキドキ・サッカー・クラブ』」
「ももちんのセンスもたまによーわからんわ。それやったら『放課後サッカークラブ』でええやんか」
「でもＤＳＣって略すとちょっとカッコイイかも」
「そおかあ!?　ほなＨＳＣって略したらかっこええやんかー」
「言いにくい」
「私はどっちかっていうと『どきどき』の方がいいかなぁ……ひらがなで」
「エー、ドキドキはカタカナだよぅ～」
「えっ、アルファベットで『DOKI☆DOKI』じゃないの？」
「それは古いなー！　……ってか、ドキドキで決まりなん!?　決まりなん!?」
「ウキウキとかワクワクより、ドキドキかな、ウチのチームは」

「いやそういう問題やのーてー」

名前というのは不思議なもので、企業でも商品でもそしてこうした組織でも、創りだした本人が決めずに勝手に決まっていくことがある。

この時のチームには、『どきどきサッカークラブ』略してＤＳＣが、似合っていた。

ちなみに平仮名に決したのは、その時ついでにチーム投票で主将に選出された長居美緒。もちろんナナに異論はない。どちらかというと、ホッとした。責任を持ってチームを統べるより、自身が突撃する方が、好き。

「……ままま、とにかく！
よし！　出るぞ！　『クイーンズカップ』!!」
「「お～～～っ!!」」

――怖いもの知らず、ビギナーズラック。言い方はなんとでもできるがとにかく、組み合わせにも恵まれたこともあるし、なんといってもナナの高い能力と経験が中心にある。また、森之宮胡桃（バスケ）、和泉流乃（陸上）、守口忍（古武術）そ

してマキ・パメラ・キシワダ（ストリートサッカー）と、スポーツ経験者それもそこそこ一流どころ、が豊富なのも幸いした。他の選手も、それぞれ高い順応性をガッツを見せて、まずまずやれる選手に半年掛けて成長していた。

特にナナも驚いたのが美緒の成長だ。彼女はどこでも「お母さん」である。異常なほど気配りと段取りが巧く、結果ボールが一一人の間をとてもスムーズに動いた。おかげで残りの一〇人はのびのびとプレーできる。ナナも攻撃に専念でき、それが高い得点力を生んだ。

あれよあれよでブロックを勝ち上がる。ブロック代表枠は3、つまり決勝進出で全国決定、準決勝で負けても三位決定戦で勝てば出られる。

ナナは今でも笑う、あれこそＤＳＣ時代の最高の試合やったね、と。

準決勝、これさえ勝てば夢の舞台、で、８対７の馬鹿試合。前半一五分までに２点を取られたＤＳＣは、破れかぶれの特攻精神でノーガードの殴り合いに持ち込み、わけのわからないまま無理矢理勝った。

ナナがマキが単独ドリブルでがむしゃらにつっこみ、蘭が流乃がゴールが見えたら即シュート。時には一一人全員でボールを囲む、まあ小学生のようなサッカーだ

った。でも、勝った。
その勢いそのままに、決勝戦、別に勝ってもなんのご褒美のない試合でもノーガード殺法を炸裂させ、6対4で勝った。
サッカー・マニアならば「これだから女子の地方予選は」と眉を潜めそうな花試合だが、現場で観てたものにはなんというか「サッカーの原点」的にとても好評で、雑誌の小さな記事に載ったりもした。
「手作り『どきどきサッカークラブ』、快進撃！」
と。
みんなでそれを見て、はしゃいだ。

――だが、さすがに全国は甘くない。三二チームが集う一回戦、当たったのは実業団の中位チーム。しっかり鍛え上げられたヴェテランのお姉さま方に、なにもさせてもらえなかった。
頼みのナナが、完璧にマークされたのがなにより痛かった。さすがに有名人、ほぼ常時二人で挟まれて、彼女めがけて出すパス出すパス全部奪われた。
後半から得意のノーガードに切り替えたが、むしろ相手に殴られる一方、神がかったセーブを連発した忍様が居なければ、もっと悲惨なことになっただろう、4―

1での完敗だった。
最後にナナが、意地で直接ＦＫをねじりこんだ。しかしそれは、「ああこの選手が強豪に居れば」という印象を残しただけの、虚しいゴールだった。

ＤＳＣの大冒険は、終わった。
夢は、覚めた。
楽しくはしゃいだ地方予選までの雰囲気がガラリ一変、最後の完膚無きまでの敗戦は、それぞれの胸に、強い問いを突きつけることになった。
すなわち、
このまま進むのか、
ここで満足するのか。

進むならば、より厳しい日々を覚悟する必要がある。時にはそれぞれのたいせつなものを犠牲にする必要もあろう。しかし、得られる喜びももっともっともっと、大きいだろう。
ここで満足するのも悪い選択ではない。なにせ全員がプロサッカー選手を目指している、高校男子の強豪校ではないのだ。こんなところまで行けた思い出、これだ

けで普通、一生笑って語れる。

――悪いことには悪いことが……いや、悪いとは決して言えない、とにかく「試練」という類のものは、塊でやってくる性質がある。

■8　迷走

春、一年生を募集すれば、一人、サプライズでとんでもないのがやってきた。

「……えええええええ、えらいこっちゃーッ！　かかか、可憐がホンマに来やがったー！」

「「は？」」

此花可憐、押しも押されぬジュニアユースのエースである。もちろん、ナナとは顔なじみだ。

そういえば代表の合宿で顔を合わせた時に、

「ＤＳＣ快進撃ですね！　あたしも入れてもらおーかなー！」

「わはは、入れたる入れたる、あんたやったら9番も流乃から取り上げてつけたる」

「わーい」

絶対冗談だと思ってた。間違いなく聖愛に入って、もちろん国見キャプテン（国見香織、ユースのエース）とコンビ組むもんだと思ってた。それが、来やがった。電話をもらって腰を抜かす。

「ななな、なんでウチなんか来てん！」

「いやー、聖愛学園観に行ったんですけど、ここあたし無理だー、と思ってー。すんげーなんかガチガチなんです雰囲気も練習もー。みんなクソッマジメで！」

「いや西海とか他にも色々……いやまあ、ウチが言えた義理やないけどな!?」

「サッカーは楽しくやんなきゃ、ダメですよねー！」

「いや、それは、それはそうなんやけど……」

可憐は「一〇年に一人」「日本の将来を背負う」とまで言われる逸材で、スピード、テクニック、決定力、スタミナ、高さ、闘志、どれをとっても超一流の万能ＦＷで、つまり、責任が生じる。

ここでまさか、この逸材を潰すわけにはいかない。

当の可憐の声はいつものあまり何も考えてない明るい声。自分がどれほどリスキーな選択をしたのか、わかっていないご様子。

ナナは頭を抱えた。自分の選択の責任なら自分で取ればいいが、他人の選択の責任までは……

報告を聞き、いつになく深刻なナナの顔を見て、美緒はじめ、チームメイトにも若干動揺が生まれた。それだけならまだ良かったが、なんの因果か運命か、可憐が呼び水になったかのように、一年生が次々に入ってきた。それも元フィギュアスケーターだとか、体育の時間人目引きすぎる（だからこそ誘ったのだが）運動の天才だとか、どこぞの財閥の超お嬢様、そしてマネージャーの女の子まで。

もう、後戻りは、できない。

「……ど、どないしょうキャプテン、どないしょう？」

「どないしょう、と言われても……」

末っ子は自分のまいた種なのに長女に押し付けた。いや、その頃にはすでに、み

んなが美緒を見ていた。
さあ、どうするのだ、と。
私たちは、どこへ向かえば、いいのか、と。

しかもこれは待ったなし、喫緊の議題だ。
なんとなればやはり可憐である。天下のスーパーフォワードを試合で使わない手はない。
となると今、前線に張る流乃、愛、マキのうち誰かに、「ベンチに居てくれ」と通達せねばならない。いやハッキリ言えばセンターＦＷの愛に、だ。
可憐だけではない、そのフィギュアスケーター、平野エレーナはさすがに素晴らしく持久力があり身体能力が高く、ぜひ中盤で使ってみたい。となると、今度はナナ、美緒、ユミ姉の誰か一人が、落ちることになる。いや、これもハッキリ言うと、ユミ姉にそれを伝えねばならない。
愛も由美子も理屈のわからないタイプではなかったが、一緒に全国へ行ったチームメイトにそれを自ら告げるのは、つらい。
仲良しサッカークラブなら、たとえばローテーションやクジやジャンケンという手だってある。それは、ＯＫなのか？

「……やっぱり、第三者というか……
監督が、要るね」
「……そうやなぁ……究極、戦術とかなんも知らんでもええねん。ただそういう、組織としてのまとめ役をやね……」
「私が選手をやめて、やろうか？　それだったら角も立ちにくいかと」
「アホ言いなさんな。監督が生まれてもキャプテン失ったら本末転倒やんか。サッカーは選手がやるもんです」
「……だとすると……そうだね、顧問になってくださいとか言って、どなたか先生でも丸め込む？」
「あぁ……つまり傀儡政権やな？」
「いやそこまでは言わないけど」
「ほな誰がええやろ？
おとなしそうでウチらの言う事聞いてくれそうな、でもウチらに何か言うたらウチらが聞くような」
「むちゃくちゃだよね、私たちはいつもね」
「まぁな」

「んー……
……英語の、エイミー先生、とか」
「あー英実ちゃんな！　あそらええわ。あの人イギリスへ留学してたらしいから、なんちゅーてもサッカーの母国、きっとサッカーも多少は知ってるで！」
「そうだね。それに確かどこの顧問も持ってらっしゃらないはずだから……ちょっと、相談してみよっか」
「おうおう」

その「おっとり天然いつまでもお嬢様」で生徒に人気のある高槻英実先生は、いつもどおりフリルフリルなロングスカートの裾を整えながらにこにこ笑って、

「……ええ？　顧問ですか？
ええ、まあ、空いてはいるんですけど……」
「じゃあぜひ！　今日早速、観てみてください！　まず観てから、まず観てからご判断を!!」
「はぁ……でも」
「いやいや、ほらほら、まあまあ、とりあえずとりあえず……」

早速練習を観てもらった。みんな先生が居るとなると多少は緊張……しなかった。なんと言っても授業中でも生徒にいじられる「エイミーちゃん」である。むしろピクニック気分倍増だ。

あまつさえどこからか取り出した日傘をさし、魔法瓶水筒から愛飲の高級紅茶をこぽこぽと注いでちびりちびりやる。

そこだけが、別世界。

ここは上流社会のクリケット場やないんですからね？

終わった。エイミーちゃんは両手を叩いて、

「すごい、感動しました。みなさん本当に、よくがんばりました！　よく走り、よく跳びました。

おめでとう」

いや、おめでとう言われても……

「先生感激しちゃいました。

難波さん、長居さん、ぜひ顧問をやらせてください。この学校の中で活動する時には、なるべく便宜を計ります」

「「おお〜」」
「いやいや、さすがエイミー先生です、素晴らしい！　よし、これで顧問も確保したことやし、みんな、バリバリ頑張んでぇ〜!!」
「「おお!!」」
「……それでちょっと皆さんに、質問があるのですが」
嫌な予感が、した。
「は、はい、なんでしょう先生」
「……どうして、手は使わないの？」

『ダメだこりゃ』という無言の擬音が、虚空を漂った。ああ、視線が痛い。ウチらかて頑張ってますねん私も努力はしました……
ごめん。

§

「エイミーちゃんはあかんかったか……」
「いや校内での発言権が増しただけでもめっけもんだよ。半成功、ってことで」

「あんたいつも前向きやなぁ」
「ナナほどじゃないよ。
エイミー先生のお茶会楽しいし」
「食堂でみんな揃ってジャージで紙コップで紅茶啜る絵が、変や無けりゃな」
「外面はどーでもいーの本人たちが楽しければ。
……さて、と」
「どぎゃんしようかねぇ……
専門のコーチがいっちゃんエエねんやろけど、そんな人雇う金ウチらには無いし
……ま、ほんでこんなことゆーのアレやけど、ウチより知識や経験持ってる人て、
そんじょそこらには、おらんで」
「だね」

しかし、長居美緒は（この頃は違ったが）ボランチである。攻撃と守備の転換点に居る。その彼女の最も素晴らしい長所は、奪ったボールを一発で前線に送り込む能力すなわち、「ピンチをチャンスに換える」能力である。

実のところ美緒は、最初から気づいていた。

サッカーのことなら、なんでも答えてくれそうな男の子を一人、私は知っている。

「……ちょっと、考えてみるよ」
「おっ、頼むで、キャプテン！」

もちろん、ナナも上町大地という存在は知っていた。彼の華々しいあの試合は生放送で観た。同世代として同志として、絶叫しながら応援した。涙を流して感激した。ウチもあんなドリブルがやりたいと、心に刻んだ。そして、同じ学校に居るどころか、彼と美緒が変な関係……恋人同士でも無さそうなのに、毎昼のお弁当を作っていることも。

ただナナは、この瞬間、彼の存在をすーっかり、忘れていた。

それほど、上町大地は、「薄く」なっていた。

――友達に、ずばり、訊かれたこともある。

「長居さんって、上町君と付き合ってるの？」

にっこり笑ってずばり、答えた。

「付き合って欲しいと思ってるんだけど、全然振り向いてくれないの」

「ぇー。美緒ちゃんならもっといい人、いると思うけどなぁ……」
みんな冗談だと、思ってる。
「ねぇ、悪い人じゃなさそうだけど、なーんだかいっつもぼけーっとしてて、どこ向いてなに考えてるのかわからないし……」
「だいたい美緒ちゃんにお弁当作ってきてもらって、何様だっていうのか」
「ふふふふふ。まあ、お弁当の件は、いろいろ経緯がありまして」
「あれだよ、中学同じなんだよね？　腐れ縁とかだったら、早く切ったほうがいいよ、青春は短いんだから」
「そおそお。天下の長居キャプテンなら、実は狙ってる男の子いっぱい居るんだもん。もっといいのたくさん居るよきっと。優しくしてくれる人も。もったいないよ～」
「ふふふふふ」

人間なんて、こんなもんだ。
ほんの一年ちょっと前は、まるで真逆で、
「あんな弁当だけが売り物の女、大地君には不釣合い！」
と陰口を叩かれたものだ。それが。

私も、大地君も、なにひとつ、変わってはいないのに。

ひとは、恐ろしいほどに、今この瞬間、しか見えてない。
ポテンシャルとか将来性とか過去の実績そして……夢や希望、抱え切れぬ大志、野望欲望、そういった、人間を味付けし彩るスパイスの数々を、見てはくれない。

もちろん今ここの瞬間を生きる生物動物生命体としては、それが本能なのだろう
しかし、それを超えて、時空を脳の心の力で超えて、こそ、人間ではないのか。

『……まあ、見ててよ。きっと羨ましがることに、なるから』

……いやまあそれには、肝心要の彼の心を突き動かさねば、ならぬのだが。
でもいきなり大きな夢は見ず、まずはできるところから。

■9　企画屋

――空堀三十六は、ひとが大好きである。
やはり天性のプロデューサーなのだろう、おもしろいひと、変わったひとが大好きで、そんな彼がいのいちで目をつけたのが、上町大地だった。

大地は、あの決勝戦を最後にサッカー選手を引退した。声を掛けてくれたチーム全てに丁寧に断りの連絡を入れ、協会スタッフそして仲間達にも別れを告げ、ユニフォームを、脱いだ。
曰くを知る皆は、強くは引き止めなかった。ただ、「気が向いたら戻ってこい！」とは、言った。大地はいつも、黙って微笑を返すだけだった。

三十六はそんなことは知らない。スポーツ観戦なんでも大好き、な彼だったが、どちらかというとサッカーにはあまり興味がなかった。「勝負」こそが醍醐味のスポーツにおいて「引き分け」が重要なシステムがしっくりこなかったし、スノッブな海外オタクがまるで自国の代表に上から目線でダメ出しをする様が、耐えられな

かった。たとえば野球で、そんな馬鹿は居ない。もちろん、弱点や欠点は指摘しても、いざ戦いとなれば全力で応援する。ところが、サッカー・ファンには平気で日本代表に「負けるべきだ」などという輩が居る。それは、三十六のメンタリティには、無かった。

そういうこととは関係なく、三十六の敏感な人物センサーが、「こいつはただものではない」というなにかを、感じ取っていた。

大物というか、動じない。

それはただ、ボーッとしているのではなくて、修羅場という修羅場をくぐっているからこそ、たいていのことはどうでもいいことに見えるのだ。

コマネズミのようにこちょこちょ走りまわるのが好きな三十六は、ちょっと惚れ込んだ。

男は男に惚れるものである。

惚れて、惚れさせて、男である。

それになんだ、ボーッとしてそうな振りをして、毎昼のお弁当を作ってきてくれ

る可愛い……えー……かわ、えー……いや、物理的にはね!?　俺もものすご可愛いと思うんですよ、黙ってりゃね!?

長居さん、美緒さん、は、周りから「キャプテン」というあだ名が付くほどまあなんというかそのー……強い。とにかく、強い。

昼、三人で大地の机で弁当をつつくことがよくある。彼女の作ってくるお弁当はまたいわゆる「シズル感のある」お客つまり高校生男子の食欲をよく刺激するラインナップで……

三十六は、その名の通り、文学好きの父が「ゆくゆくは直木賞でも取るように」と無茶な願いを込めてつけた名、の通り、コンテンツ・メーカーである。

間違っても、アーティストではない。

コンテンツを売るには、売る対象の「欲しい！」という気持ちを刺激せねばならない。それが、彼女のお弁当にはできてて……正直、ウチのおかんのワンパターン弁当と比べると、羨ましくて仕方がない。

「美味しそう」とか「美しい」とかじゃなくて、「食いてぇえ！」なのだ。

もちろんもちろん、健全な高校生男子であるから、女の子にそんな、毎日お弁当作ってきてくれるなんてそんな、それも、夢、みたいな。

しかし上町大地というのは本当に大物なのかボケなのか、「ううん、美緒は彼女じゃない」とかわけわからんこと抜かす。長居さんも、怒っていいと思うんだけど、ニコニコ笑ってる。この二人の関係は、よーわからん。

そんな三人の昼食のある日、長居さんが、ぽつり、あれはまあ、あとから考えりゃ俺に言ってるふりをして大地に言ってたのだろう、こう聞いた。

「……あのね、カラちゃん。ちょっと相談事があるの」

「ほいほいなんでしょう？」

「私が小さなビストロをやってるとして……まずまずお客様からの評判がよくてね、スタッフのやる気もあってね、新しいスタッフもいい子が入って、さあ！

ここで問題です。

全国に名の知れる名店を目指すか、いややっぱり、地域で知る人ぞ知るお店で丁寧な仕事を目指すか」

「ははあ！　そらぁ難しい問題やな！

勝負に打って出ると大変や。そらハードワークに継ぐハードワーク、眠れん夜も

あれば体壊すかもしれん、ストレスかって半端ない、せやけど、より多くのお客さんに、より多くの幸せを与えられるな！」

「うん」

「逆に地域一番店も大変といえば大変やで、大きくならへんってことは儲からへんってことやから、ええスタッフを引き止めるのも大変や。誰かて大きい勝負したいしな。あらゆる場面で、現状維持は、退歩に等しい」

あやっぱり空堀君は頭の回転が速いな、と美緒は感心した。女の子は彼のちょっと斜に構えたところと、パーッとアクセルを踏んで芸人モードに突入するところに引くんだけど、付き合ってみれば気遣いが細やかで、いろんなことに目を配る、いいひとだ。

大地君のポテンシャルを、見抜くだけのことは、ある。

「……で、キャプテンは何がしたいん？」

真顔で、迫られた。

美緒は、ハッ、と我に返った。

考えるまでもなく、口先が動いた。

「……楽しいサッカーが、したいね」

私は……結局私は、大地君のような、あの猛烈なドリブルを、あの鮮烈なスルーパスを、したい。おそらく日本中に私に、そして、おかあさんに、勇気を与えたあのプレー、あのサッカーを、したい。

それだけだ。

それだけ、だ。

「ようしさっすがキャプテン、ほな簡単やん、別にそんなしょーもないことで悩む必要全然ないやん、お店大きいか小さいか、なんて。そんなものは結果としてどうなるかほっといたらええことで、キャプテンは、楽しいサッカーを、目指せば」

「……

……そう、だね」

「うんうん、うん」

賢いなぁ……一七人ばかりでウンウン悩んで何も出ない答えが、一発で出る。こういう人こそ、我がチームに必要じゃないのか。

美緒はあまり、策を練る方ではない。が、この時ばかりは、女らしいイヤらしい策を打った。

なんでもいい、なんでもいいから、くさびが、打ちたかった、のかもしれない。

凍った心に、熱い楔が。

「……空堀君！　ぜひウチのチーム一度来て！　空堀君みたいな第三者の視点が、ぜひ必要だよ！」

「へぇ!?

いやぁ、俺、だってサッカー、でしょ？　ＤＳＣ、だっけ？　全国行ったとか行かんとか……俺、サッカーはちょい自信ないわー。いやサッカーじゃなくても自信なんか無いんやけどー」

「うん、テクニカルなことはどうでもいいの。そうじゃなくて、なんていうかな、えー……組織論、っていうの？　君らここ間違ってます、ここいいです、みたいなそう！　コンサルタントだよ、コンサルタント！」

「はぁ!?
いやぁ、いやぁ、いやぁ、無理無理無理無理無理無理、そんな大げさなもん俺全然ちゃうってー!」
「可愛い子一杯居ますぜ、ダンナ」
「むっ。……むむむ」

冗談に、乗ってくれた。

「上中下セクシー・ボンバーからあどけない少女まで選り取りみどり!」
「つかみどり!?」
「あのね、そのノリについてきてくれる貴重な子も居る。難波さん」
「あー……ついてきてくれそう」
「たいぷ？　紹介するよ？」
「……ごめん、ちょっ、ちょっとだけタイプかも」

へえ!
見かけによらないな、だって空堀君ならきっともっと文化の香り高いインドア系

の、まあウチで言うなら、はなちゃんかユミ姉さんかそのへん……

「じゃあ、ぜひ！　ナナちゃんね、めちゃくちゃいい子なのにフリーだから、そりゃまとまるかも知れませんよおはなしが」

「えっ……マジで」

「マジマジマジマジマジマジ」

「えーあんな可愛い子やったらもーてっきりエエ人おんねやと……」

「ナナちゃんはサッカー小娘ですから。サッカー以外興味ないの」

「ホンマですかー。んー、それやったらコンサルタントとかなんとかそんなん別にしてちょ、ちょっと遊びに行ってもええかなー」

「うふふふ、もちろんもちろん。大歓迎だよ。男の子見てるっていうと、みんな頑張って練習引き締まるかも！」

「ハハハ、それもそやね。

いやまあ、難波さんがどうのとか別にして、前からサッカー部可愛い子多いなぁ、ってビックリしててね」

「ウチサッカー部じゃないんだけどね。あ、そういえば空堀君よく夕方講堂の横とかに居るよね、あれは、図書館の帰り？」

「あー、うん、それもあるけど、ちょっと演劇部とかにも顔出してて」
「へーっ！　さすが」
「いやいやいや、ここの部長がちょっと手の掛かる女の子でねぇ……」
「えっ!?　なに、彼女!?　彼女いるのにナナちゃんがどうとか!?　空堀君、意外にアレだね！」
「いやいやいや、ちゃうねんちゃうねん、マジでちゃうねん、彼女とかそんなんちゃうねん、いや、ちょっとわかりにくいかもしれんけどライオンと調教師っちゅーか……」

盛り上がった。
ちら、ちらと見ると大地君はただニコニコ、聞いている。そう、気遣うまでもなく、「サッカー」という単語は、オートマチックに耳に入らないのだ。
ひとしきり盛り上がって、

「……よしほな、見学行こ！
大ちゃん、大ちゃんもどうさ？」
「あはは」

ただ、笑った。
しかし、拒否はしなかった。
目はある。
美緒に、闘志が湧いた。

§

「……ま、俺のミラクルズに対する貢献の最大のもんは、あん時大地を連れてったことやで。あれひとつで、俺の存在意義があった、っちゅーもんや。
あはは、運命なんて、わからへんねぇ……俺が触媒になったおかげで、大地もあの場におったわけやし、キャプテンと大地の二人だけやったら、まずあの場に連れ出すなんてこと、できへんかったんちゃうかなぁ……
二人とも、気ぃ遣いぃやから、ね。
『無用の用』なんて言葉があるけど、人間、どこでどう役に立ってるか、ホンマわからんねぇ……」

今度は美緒は、わざとらしくチームに紹介することは無かった。ＤＳＣはその頃もう校内では有名だったし、校内きっての綺麗所揃いでも評判で、なんとなく男子達が、ぼんやりしてるふりをして練習を眺めてたりもする。そんな中に紛れ込む、二人。

――軽いジョグのあと、練習が始まった。

すぐ三十六は、驚いた。

「えらい本格的やな！」

分単位で組まれた項目を、一糸乱れず正確に確実に黙々と真剣にこなす一六人。しかも一つ一つの動作が速い。あれ、これ、男子サッカー部よりよっぽど真剣じゃないのか？

そこは最高の環境で育ったナナだ。クラブや代表のメソッドを丸コピーするだけでも、とても高度で効率的になる。

「……ねえ大ちゃん、さすがに全国行くようなチー……ムは……」

あれ？　このひと、誰？

三十六は一瞬、目をぱちくりさせた。

そこに居たのは、いつもよく知る上町大地では、なかった。

まるで猛禽類のような眼光鋭い目、眉間に軽く皺を寄せ腕を組んで背を伸ばし、佇む。

まったくの別人で、この人は本当に大地か、知らない間によく似た違う人と変わってて、俺が間違ってるだけじゃないのか、と目をパチパチ、確認した。

よーく見ると、大地だ。間違いない。

『な、なに怒ってんの？』

と、そう思ってしまうほど、その瞳その顔、真剣そのもの。……と、友人の見たことない姿に三十六がちょっと面食らっていると。

「こんにちわ～～～！」

大きなおさげの、「自分が可愛らしい」ことをよく知る女の子独特の営業スマイルを全開にして、ジャージ姿の下級生らしき女の子が微笑んだ。

「あ、ああこんにちわ」

「……」

「私、1年生の住吉古都と言います！　ＤＳＣのマネージャーです！　よろしくお願いします！　先輩！」

「あ、はい、あの、こちらこそよろしゅー」

「うふふっ」

三十六は先程も述べたように人間好きであるから、こういう手合い――仮面をガッチリ被るタイプ――にも慣れている。武器を振り回してるだけで、女だけのチームでマネージャー、なんて得にならんことをやってるんなら、別段悪い子ではなさそうだ。

「えーっとはい、僕は空堀三十六、2年生。こっちは上町大地、同じく2年。長居さん、長居キャプテンにちょっと言われてですね、来てみました。お邪魔してま

す」
「はい！　おうかがいしております！
チームのことならなんなりとお聞きください！」
「じゃあまず、君のスリーサイズから」
「はい！　上から、129.3―129.3―129.3」
「国民的ネコ型ロボットかよ！」
「ぴしゃぴしゃぴしゃ～ん！
わ～るどかっぷ～～～」
「ドライも～ん、それを直接出してくれても、あんまり嬉しくないんだ～！」
「あはは っ」

できる。
古都と三十六は、お互いを認めた。
黙ったままの大地を横に置いて、いろいろ聞いた。

「……はい！　あの背の高いショートの人が胡桃さんで、中学日本一のバスケット・チームに居たんですよ～」

「どおりで！　すーごいジャンプ力やねー！」
「はい。あとジャンプといえばあの金髪の子がエレーナちゃんで」
「おお可愛い」
「お好みのタイプですか、空堀先輩」
「日本人男性は金髪碧眼に弱いんや……」
「彼女昔フィギュアやってたので、体力も凄いしジャンプも高いんですよ～」
「へぇえ～。でもちょっと重そうやけど」
「うふふ、エレちゃんそれ気にしてるので、言っちゃだめですよ」
「わは、すまんすまん」
「それから、キーパーの守口先輩は、お父様が古武術の道場をされてて、ご自身も鍛えておられて……」
「ほうほう！　古武術！　ほう！」

当然、身体能力の目立つそのあたりの選手からの紹介になる。だがしかし大地は、まったく別のところを、観ていた。

ぽん、ぽん、ぽん、ぽん……

リフティングというより、戯れるかのように柔らかく足全体でボールの感触を確かめる、華奢で小柄な女の子。さらさらのショートカットと大きな瞳がとんでもなく可愛い、綺麗所揃いのチームでもまた一段とロリータである。

ふわっ……

見てると、ダッシュの時一瞬浮き上がるようにして飛び出す。まるで、重力を感じていないかのように。そして関節が無いかのように、またいろんな抵抗が無いかのように、風のように加速する。

『……なんだ……あれは……』

長年たくさんのアスリートを見、おのれも鍛え、ともに身体をぶつけ合って育ってきた大地をもってしても、初見。

先程挙げられた胡桃、エレーナ、忍、あるいは流乃や蘭、マキ、もちろんナナ、彼女たちの、レベルは高いがよく知っている動きとは、そもそもの質が違う。

予備動作が無いというか、関節の自由度がおかしいというか、タイミングが全く違うというか、とにかく、常識はずれだ。

目が、釘付けになる。

そのうち、８―８ミニゲームが始まった。どうやら強いチームとその余りチームの分け方らしく、彼女は余りチームの、ＦＷに近い位置に入った。

『……やはり、違う』

右からボールが来た。ふわり、右足アウトサイドでトラップすると、倒れこむように左足インサイドで斜め後ろに大きなノールック・パスを出した。

それはするすると中盤を斜めに横断して……上がってきたサイドバックの選手にぴたり、合った。

……と、描くと、素晴らしいプレーのようだが、素人目には、バタバタと足の合わないトラップをして、転けながら大きなパスミスをして、それをたまたまサイドバックがケアしてくれた、そんな風にも見える。

さらにハッとする、そのパスを受けたおかっぱの女の子は、シューッ……とこれまた見たことない走り方で滑らかに加速していく。いい加速だ、どんどん乗る。

そして、シュート……
キレイなまっすぐな弾道のシュートは、残念ながら上空に消えた。

「あー！　慌てんでええ慌てんでー！」
「はい！」
「はっぱ！　サイドバックは持ったら周り見てみよ！　もっとチャンスある選手もおる！」
「はい！」

敵チームのナナが指示を出す。もちろん正解……の、ひとつではある。が、両方とも非常に面白いプレーだった。
この二人……使ってみるべきだ。いや確かにまだまだだろう、うん、基本もできてなさそうだし、そもそも二人ともとても線が細くて、九〇分なんか持ちそうにない。しかし、サッカーは、いやスポーツはなにより相手の意表をつくことが大切だ、あるいはスーパーサブなら、相手をひっかき回せ

「大ちゃん、大ちゃん」

「……え。
あ、ああ、な、なに三十六」
「いやなんかメッチャ怖い顔してギュー睨み続けてるからさ、なんか、腹でも痛いんか思て」
「あ、ううん、いや、大丈夫。
……いやぁ、はは、えーっと……すごく、本格的だなぁ、と思って、真剣に、見入っちゃった、んだ」
「さよか。いや、大丈夫やったらええねんけど。
そやね、やっぱりこれぐらい真剣にやらんと、全国大会なんか行けんわね、どんなスポーツでも」
「全国……全国、行くんだ」
「あれ？　大ちゃん聞いてへんかったん？
つーか美緒っぺがキャプテンやんか、はれ？　大ちゃん聞いてへんの？」
「えっ。
いや、あの……なんか美緒が、クラブやってる、とは聞いてたけど、あんまり詳しくは、聞いてなくて……」
「ひょへっ!?

いやあんたなにゆーてますのん、これが噂の、監督も無けりゃコーチも無し、サッカー経験者ただ一人やのに全国大会に出た、我らがＤＳＣすなわち『どきどき・サッカー・クラブ』でんがな」
「は、はぁ……そう、なんだ」
「大ちゃん大丈夫か？　熱でおかしーなるにはまだ季節早いで？　ここのキャプテンが、あんたの彼女、長居美緒ですがな」
「美緒は彼女じゃないよ」

そこだけは、即答だった。
全部おかしくなってるわけでは、ないらしい。

「あら？　長居さんもあれやね、意外に奥ゆかしいとこあんねんねー。まあ、自慢話みたいになっちゃうかもしれんしね、勝った勝った言うたらね」
「そう、なんだ……」
「そそ、ほいでね、でもやっぱりもっと上目指すには監督言うかコーチ言うか、そういうのが必要やねー、と。もちろん俺はそんなんできへんけど、なーんていうかな、そやねえ、こんな可愛い子ばっかりの、こんな躍動感溢れる楽しいチームやっ

たら、『売り方』はいろいろ考えられるねぇ……」
「売り方……」
「そそ。プロデュースでんがな。
校内いや街中で応援してもらうんやこのチームを！　ええで〜、みんなホンマはそういう存在を欲してるんや。代表戦になると盛り上がるやろ日本中が。サッカーでも野球でも。みんなが一つになれる、同じ方向を向いて叫ぶ、笑う、泣く。
スポーツの醍醐味やねぇ！」
「……」
「ようし、決めた。
俺いっちょかまさせてもらうことにするわ。
いや、下心なんかないで、チレーな皆さんとお近づきになりたいなんて。いやごめんちょっとある。いやそやけどそれより、俺の中にあるディレクション魂というかプロデュース魂がうずくのよ。
これ、売り出したら、売れるよぉおおおぉおおお！」
「……」
盛り上がる三十六。もうすでに、自分が一番最初に、チームの魅力の虜になって

る。そういう役目の人は、そうでないといけないのだろう。

三十六は早速、みんなを見守っているおさげの女の子のところへ行って、大げさな身振り手振りでなにか言ってる。女の子は、両手を叩いて笑っている。

『……チーム……全国……応援……
……コーチ……』

また目をやると、ちょうど美緒にボールが渡った。
あれは……美緒、だよね？

普段のタヌキヅラなどどこへやら、彼女がボールを持つと、スタジアムが……いやスタジアムではないのだが、周り全体がという意味で……敵も味方も、「さあどうする!?」と瞬間、立ち止まる。
世界の中心に、居た。

ちらり。

アイ・コンタクト？
……僕に？

轟然とドリブルを始めた。一人かわす、二人かわす、シュートコースが開く、
どがーーーーーーん！
小柄だがいかにもすばっしこそうなＧＫがカエルのようにぴょーんと跳んだが、
間に合わない。
わ～～～～っ……
みんなが集まる。笑顔、笑顔、笑顔の輪の中に、笑顔の美緒。
がまたこちらを、見てくれた。
また、微笑んだ。

『……サッカー……』

それ以外のなんだというのだ。
だがその単語は、この一年、自分で口にしたことは、無かった。

■10　美の四姉妹

――その夜、週に一度はそうするように、美緒は大地を我が家の晩ご飯に呼んだ。断る理由もないし、いつものことだ。大地はのこのこ、ついて行く。

身体の中に、まだなにか変なのが、残っている。
それを冷ましながら。

――練習終了後、また三十六が持ち前のテンションでチームの前で壮大なプロデュース計画を口からでまかせでっち上げる。最初は「な、なんだこの人」と訝しんでたメンバーの皆も、口車に乗せられつつ、キャプテンの友達ということで安心もしつつ、だんだん盛り上がってくる。

「優勝！　優勝だよね！」
「そうですとも梅田先輩、やる・から・には勝たないと！」
「いや〜ん、ももちんでいいよ〜ん。もうあなたはチームの一員なのですから！

空堀君!!」
「いや〜ん、カラちゃんでいいよ〜ん。もうわたしはチームの一員にしてもらったのですから！」
「「わはははは……」」

商店街に掛け合っておらが街のチームにしてもらうぞ、援団に友達居るからそいつに応援はまかせてくれ、ブラバンにも知り合い居るんで演奏頼んでみる、そうやなあ、ユニフォームなんかも新しくしたいなぁ、その白と水色も可愛いけど、もっと可愛い……

「ピンク!!」
「おうそうやこっとんそれがええで！　ピンクと白で可愛くオシャレに決めようぜ！」
「でもでも、新しくするとお金が掛かっちゃって……」
「それはスポンサーを掻き集めますがなそら!!」
「「えーっ!?」」
「うむ学校にも掛け合ってみよ、オープンクラブ言うても全員わが校の選手でっさ

かいね、実質クラブ活動みたいなもんやからいくらか出してもらお。
あと皆さん知り合いにお金持ちいません？　わはは」
「あ、あの、はっぱの実家超お金持ちです、空堀先輩！」
「おお。はっぱちゃん……ってお名前なんて言いましたっけ」
「はい！　西九条明日葉です！」
「ああええ名前やね、にしく……はい!?
ちょっ、ひょっ、えっ、まままさか!?」
「西九条財閥のご令嬢です、はっぱちゃん」
「ゲェー!!」

俺も多少世間ずれしてるところあるけど、この人達もおかしいんちゃうか。西九条財閥やぞ。なに平然としてんですか。

「あっちょっと待って最近毎朝校門近くに止まってるあの長ーい黒ーいリムズィンは!?」
「はい……恥ずかしいので歩いて行くと言うんですけど、爺が許してくれなくて……」

「じい」

まさか現代日本でそんな単語を人の口から直接聞けるとは。

「よよよ、よしわかりました、サッ、サッカーのために歩かねばならんということをこのワタクシ空堀三十六が直接談判させてもらいましょう！

……ついでにいくらかこう寄付をですね……」

「あはは、攻めますね先輩！」

「空堀Ｐ・鉄の三原則は！

『ダメでもともと！』

『当たって砕けろ！』

『下げる頭はタダ！』」

「「おお～っ！」」

なんてお調子者だろう。

でも、頼もしい。とりあえず今までチームに無かった個性ではある。

「よし皆さん盛り上がっていきましょう!!
では有志を募ってさっそく『ラーメン山嵐』に営業活動兼カーボ・ローディングを！」
「あ、『山嵐』行ってみたい」
「ボクもー！」
「おう美原さん天満さんウェルカム！」
「女の子だけだとちょっとだけ敷居高いんだよね。私も連れてってもらおっかな」
「八尾先輩行きましょ行きましょ、マスターええ男でっせ～。超歓迎やと思います」
「じゃ……私も」
「森之宮先輩も～～！」

結局、リムズィ～ンで帰らねばならない明日葉とあと数人だけを残し、みんなでゾロゾロとラーメン屋へ向かった。すっかり世話役だ。

で、残った方の、二人。

「……じゃ、行こっか。大地君」
「あの～、キャプテン」
天王寺ありすが、ようやく聞ける、という妙な安堵の表情で、聞いた。
「こちらの、お方は」
「ああ。……ふふカラちゃんすっかり紹介忘れて。
上町大地君。私の彼氏」
「ええっ!?」
「彼氏じゃないってば。えーと、上町大地です。よろしく、……えーと」
「ありすちゃん。天王寺ありすちゃん」
「ありすです、よろしくお願いします!!」
パーッと、花のように笑った。
ありす、っていうんだ。
あの不思議な（ワンダー）プレーにぴったりの名前だなぁ。

「すてきな、えーっと」
「ふふふ、彼女にしてね、ってもう何年も言ってるのに、聞いてくれないの」
「は、はあ」
「美緒ー、誤解招くようなこと言わないでー」
「うふふふふ」

ふ、不思議な感じ。
キャプテンぜんっぜん目が笑ってないし、でも上町さんはどこにも響いてないし。
な、なんだか大人の世界だな……

「……でも大地君をステキというのはあーちゃんお目が高いよ。この人はね、凄い人なんです」
「は、はあ！　……ど、どのように、です？」
「それは……秘密です」
「はあ」
「なんにも凄くないよ、ははは」

あ、でも笑うとすごく可愛い。
可愛いというと変だけど、魅力的な、包まれるような笑顔。ちょっと、素敵かも。
……でもこんな、美男子、学校に、いましたっけ？

「……じゃあまた、ありすちゃん」
「はい！　失礼します！」
「またね」

……あれ。
頭を上げて、ありすはふと、思った。ごく自然、「またね」と言われた。とすると上町さんは、空堀さんのように、私たちと関わってくださるのだろうか。

『……というかどう見ても夫婦じゃないですか』

ゆったりした間合いで二人並んで歩を進めるその様は街中のヘタなカップルよりすでに段階として進んでおり、どう見ても子供も手を離れたぐらいの古コンビだ。

『美緒先輩が……はー……』

長居先輩はそういうのあんまり興味ないのかと思ってた。とんでもない。誰よりも進んでるじゃないですか。しかも、あんな美丈夫を。

いやぁ……おとなしそうな女ほどいざとなると馬力が出るとよく言いますけど、今痛感しました。

突然巻き起こったいろんなことに若干フラフラしながら、ありすは帰路についた。

「あの時あの出会いが無ければ、こうはならなかった」という出会いが、人生にはある。

ありすにとってこの出会いが、そうだった。

ただ、だからといって、その出会いが無かった自分はもう、想像できない。

運命とは、必然である。

S

「……いただきま～す！」
「「いただきます」」
「はいどうぞ～」

――長居家は今日はすき焼きだった。食卓、大地の隣に美緒、その向かいに美亜、隣に美憂、大地と美憂の間のお誕生席に美唯がちょこんと座る。母は今日も、残念ながら、遅い。

「おいし～い！　お兄ちゃん、お肉おいしいよ～」
「ほんと？」
「ふふ。今日のこれね、お姉様の指令でちょっと高級品なの」
「ええ、せっかく大地君が来てくれるんですもの。張り込まないと」
「また美緒～、そんな無理して～」
「ううん、無理じゃないよ～。だってお兄ちゃん来てくれるんだも～ん」
「……」

末の美唯はまったく大地ベッタリで、当たり前のように「お兄ちゃん」呼ばわり

を繰り返す。比較的無口な美憂も黙ってはいるがもちろん歓迎で、美人で鳴らすが中身は男っぽいところのある次女の美亜も、姉の恋路の援護射撃をしたいところ。
まあつまり、軽く父親役で。
みんな、うれしい。

「……大地君、ごはん、よそっちゃおうか」
「うん。はは、このお肉、白いご飯で食べたいよね」
「あ、姉様私も。ミュウもでしょ？」
「ん」
「あっ、ミィも、ミィも」

家では姉妹、猫の鳴き声風に呼び合う。美緒はミャオ、美亜はミャア。前にアクセントを置くと区別が付きにくいので、なんとなく自然とそうなった。でも、人前では恥ずかしいのでもちろんしない。大地だから。
結局いつもどおり、お鍋でも最初からご飯の並ぶ、おコメ大好き長居家である。
他愛もない話に、花が咲いた。

……で、ほっこりと、心も身体も温まった頃合いを見計らい、美緒が切っ先を繰り出す。

「……それでね、今日はね、大地君がね、私達の練習を、見に来てくれたの」
「はぁ～……」「「……」」

もう十数年、四人で肩を寄せ合って、暮らしてきた。
チームワークなら、どこの家庭にも負けない。
この場ではサッカーの話が非常にセンシティブであることを、妹達もよく知っている。
大地は、微笑んだまま。

「……どうだった、大地君！」
「えっ？　えーっと……」
「ぜひ忌憚の無いところを！　ぜひ忌憚の無いところを！」

姉に珍しく緊張している。勢いで誤魔化してる。妹達も緊張する。

「いや、あのー……」
「なんでもいいの！　なんでも！」
「うーんと……」

いつにない美緒の迫力に気圧されたか、大地、茶碗を手にしたまま虚空を見上げて、言葉を選ぶ。

「……ちょっ、と、高度すぎるかな、とは、思った」
「高度すぎる？」
「うん。だって初めての子が多いでしょう、1年生とかほとんどそうでしょ？　あのアップはもうだって、代表の真剣勝負の試合前だってＯＫなぐらい密度濃いんで、ちょっとどうかなー、と……」
「あぁ……うん、あのね、私もそれちょっと思ってはいたんだけど、でもナナになんか言えるほど私キャリアないし……」
「難波さん、は、結構経験者なの？」
「……」

呆れた。

「ナナちゃんはユース代表なんだよ」とは、何回か言ってるはずだが。聞いてない……いや、耳がシャットアウトしてたんだ。

……でも、今こうして、聞いてくれてる。

「う、うん、あの……ユースの代表……」

「へーっ!!　どおりで……いや、すごいなやるな、いい選手じゃないか！ってビックリしてたの」

「……」

そゆことはこの一年散々語ったはずだが……

美緒、必死で気を取り直す。三人の妹は、「がんばれお姉ちゃん」と念を送る。

だって大地お兄ちゃんのボケは、今に始まったことじゃないし、この話題に限ったことじゃない。

「あじゃあなおさらだ。ちょっとレベル高く考えすぎてる。もっと落としていいと

思う。難波さんが不満なら別に無理にずーっと全体練習しなくても二班に分けてもいいわけだし」
「そそ、そうだよね。
あ、あの……なんか、そういう、初心者にはこれ、中級者にはこれ、上級者にはこれ、みたいな」
「ああ、本とか？　いや僕もう処分しちゃったから……いや待てよ、父さんの残ってるかも。ちょっと探して」
「いえ!!
あ、あの……そ、その……」
「ん？」

とん！
美緒は箸を置き両手を膝に、向き直る。

「ちょ、直接、指導、っていうのは、どう!?」
「直接……へ？
……えーっと、それは？」

「監督！　ウチのチームの監督に、大地君がなるの！」
「は……
……はぁ」

事態が呑み込めてない大地は、口をぽかんと開けて美緒を見た。いつになく緊張してガチガチの彼女が、まっすぐこちらを見ている。
三姉妹、『そこだ行けお姉ちゃん！』

「監督がダメだったら、コーチでもいい！」
「えっと、いや、そゆ問題じゃなくって……
いや、あの……
はぁ。
えっ……でも、どうして？」
「あのね、あのー……じ、実は……ウ、ウチのチーム方向性に悩んでるの。ナナとか可憐ちゃんがいるからには去年のこともあるし頑張れば全国へまた行けてあるいはもっと上まで目指せるかも知れないしそうするとやっぱりすごく面白くて充実してると思うんだけどでもやっぱりほとんどのみんなはそこまでの思い入れはなくて

まして1年生の子達はほとんどが超初心者でつまり温度差っていうの？があるのだからそれを調節してうまくみんなで同じ目標に向かって進みたいと思うのねせっかく気のいい仲間ができたんだからみんなで楽しくやりたいでもそんな温度差があるもんだからどこのへんがその落しどころ？っていうの？になるのかいまひとつ掴みづらくてでやっぱりナナは突っ走りたい方の先頭にいるからナナが引っ張るとそっち行きすぎちゃいそうだし私は私で正直なところどっちでもいいかなぁとか思っちゃってて目指すべきなんてところは正直無いの楽しければ。それでね」

「あっ、ちょっ、ちょっ待って美緒」

この人から言葉のマシンガンを浴びるとは思わなかったので面食らったが、だいたいわかった。

「……要するにその、導き手が欲しい、わけだよね」

「そう！　さすが大地君だよ！」

「じゃ僕は無理だ」

「なして!?　経験、知識、選手との近さ、あなた以上の存在がありますか！」

「女子サッカー全然知らないもの」

「サッカーであることが大事です、女子男子関係ない！　バリアフリー！」
「姉さん、ジェンダーフリー」
「あ、あ、それ！」
「けど、体力とか……んー……あそうか、まあ、やることは同じか……いや、でも、いきなり僕来て『コーチでおます』とか言うの、おかしくない？」
「私とナナがお墨付きを出せばみんな絶対納得だよ。空堀君だって一瞬で馴染んでたじゃない」
「あー……まぁ、そうだったけど……」

目はある。ちょっと余裕ができた美緒、畳み掛ける。

「わかった。譲歩しましょう。
いきなりコーチとか監督とか言いません、とりあえず今週日曜の試合、観に来て。観戦。ううん、応援」
「わ！　お兄ちゃーん、そうしようよう～！
私達も応援、行くの～」

美唯から支援のミサイルが飛ぶ。

「そうなんだ」

「う〜ん。あのね、お弁当持って行くの。い〜っぱい作っていくから、ピクニックだよ？　お兄ちゃんも一緒に〜」

「今シーズン初の本格練習試合ってことで、決起集会を兼ねて、試合後みんなでお弁当食べようかなと思って……」

「それで私達も動員されてるんです。どうですか、お兄様。せっかく働くんですもの、お兄様もおられた方が、私、嬉しいです」

美亜がまた「男殺し」と異名を取るＣＭ女優ばりの超外面笑顔を差し向ける。

「あー……そ、れ、は、楽しそうなんだけど……」

「……大地さん。日曜日ですから。おうちにいても、おもしろく、ないですよ」

姉妹一のインドア派の美憂にまでそう言われると堪える。そりゃもちろん、あの

だだっぴろい家で一人ぽけーっとしてるよりは、ずっといい。

「いやぁ、でも……いや……
……別に、嫌がる必要、無いんだ、よね……」

ふと、手元のもう卵がほとんどなくなった取皿を見た。

「うん。そう。応援、して。
ううん、もう、指導とかそんなのもういい。私達ううん私、大地君が観てくれてると思うと、力が出るよ。百人力だよ」
「……」

思えばこうしてすき焼きと温かい会話をご馳走になって、僕は、なんにも、していない。
すこしでも美緒のために、なるのなら。

「……わかった。行こう」

「ほんと!?」
「とりあえず応援。美緒の応援ってことで」
「それでいいよ！　もちろん！
やっ・た！
大地君来てくれる、って!!」
「よかったねお姉ちゃん！」
「姉様、お弁当、気合い入れないと」
「もっちろんだよ！　ミャア、お手伝い頼んだわよお！」
「はいはい」
「あっ、ミィも手伝う〜！　お兄ちゃんにお弁当、食べてもらうの〜！」
「うんうん、もちろんだよ。ミィはじゃあ、唐揚げ挑戦してみる？」
「うん！」
「姉さん、バスケットセット、出しましょうか」
「ああ！　いいねミュウ。ああいうの、ここで使わなきゃいつ使うって感じだもんね！」
「あぁ、でもあれ重いから……」
「なに言ってるの、試合前の筋トレになります、私が全部持ちます！」

「お姉ちゃん、誰かここに来てもらったらいいんじゃないかなー、運ぶの、手伝ってもらいにー」
「あ、そか。その手があるか。てへへ。
そうだ、そう、あのね、空堀君っていう大地君の親友君が、私達のチームに加わってくれて……」

こんなにはしゃぐ美緒、見たことない。
すこしは喜んで、もらえたかな。
満面の笑顔であれこれ予定を立ててる美緒を見つめてると、

「……大地さん。お茶」
「あっ、あぁ、ありがと。美憂ちゃん」

熱いお茶を淹れてくれた。もちろんいつもは美緒の役だが、今の彼女にそんな余裕はない。
美憂に囁く。

「……お姉ちゃん、盛り上がってるね」
「……私も、盛り上がってます」

振り向くと美憂ちゃんはお盆を両手で、頭の上に掲げていた。それが彼女の「盛り上がり」らしい。

「……よかった」
「わくわく、です」
「……うん」

お茶を一口。いつもと違って、すこし苦い。
というかいつものお茶が、徹底的に優しいのだ。

『……応援、か……』

いつ以来だろう。そういえば応援されてばかりで、応援はあまり無い。怪我や累積でベンチにいたこともほとんど無いし……

ふといつもいつも、応援に来てくれた人のことを、思い出す。その白い姿を。
……どんな気持ちだったんだろう。
それを知れるだけでも、悪くない。

「……ね、大地君！　お弁当、カレーとかいいかな！」
「えっ、カ、カレー!?」
「いっぱい一気に作れるし！　みんな大好きだし！」
「ミャオ姉、テンション変だよ」
「お姉ちゃんカレーはまた今度～～～」
「カレー……悪くない」

わいわい騒ぐ姉妹に巻き込まれて、大地も笑い続けた。こんなに笑い続けたのは、久しぶりだった。

■11　逡巡

――楽しい時間も、いつかは終わる。
そう人生に、いつか終わりが、来るように。

「……ただいま」

暗いリビングに一声掛けた。あまりに明るく楽しい時間の後なので、逆に堪える。
明かりを点けるとなお虚しい。だから点けない。
……考えものだな。だからって、来いと言われて行かないわけは、ないんだけど。

大地はぱんぱんに張った腹を上に、ソファにその身を投げ出した。

「……みず」

ムリヤリ起きて、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して、コップに注ぎ、

ふと。

……母にも。

祭壇は小さな改造仏壇だった。父が罰当たりにも中の仏画や飾り付けを取っ払い、母の写真を置いた。それも白い夏服で微笑む、普通の写真を。

手を合わせ、一言。

「……ただいま、かあさん。今日も楽しかったです。美緒にまた、ご馳走になりました」

あらあら。ちゃんとお礼はしたの？

「うん。今度、サッカーの試合、観に行くことにしたよ。彼女の」

そう。よろこんでくれるわね、きっと。

「……」

そうだろうか。

僕なんかが行っても、きっと彼女にはなんの役にも立たない。今日の練習風景を思い出す、彼女はチームの中心に居て……

そうだな。きっと、元気の足りない僕を焚きつけようとして、あんなこと言ってくれたんだ。やってることも十分高度だったし、難波さんがいるのなら、僕の出る幕なんか、ない。

……ソファに戻った。

そもそも……サッカーの女神様に、怒られる。

自分の都合で放り出しておいて、期待とエネルギーを掛けてくれた沢山の人を裏切って、僕にはもう、あの素敵なスポーツを楽しむ資格も、もちろん観る資格も、無い。

サッカーは、楽しくやるものだ。

僕なんかが暗い顔して偉そうなこと言っちゃ、ぶち壊しだ。

断ろう。
きっと美緒は残念そうな顔をするけど、きっと美緒なら、許してくれるだろう。
いつものお礼はまた、別の何かで……
と、考えて、自分には何も無いことに、気づく。
もちろん、サッカーばっかり、やってきたからだ。
「……ごめん」
虚空に謝った。
目を腕で覆うと、いつしか眠りの闇に、沈んでいた。
§
――美緒は避けた。あまりこういうことをするタイプではないが今回ばかりは、計算尽くで逃げた。普段実直・誠実（そう）で鳴らしているだけに、百に一つの計

算が、効く。
大地が暗い顔をして近寄ってくると、
「あっ大地君ごめん今忙しくって！また後でね～～！」
ダッシュで逃げた。日曜日まで逃げ切れれば、「来れない」ということを言いに来る人だと、知っていた。
ナナと三十六君には委細全て話した。特に三十六君には、馴れ初め……じゃない、昔話から、なぜ今彼がこうなのか、というところまで。
三十六はいつも人を感動させようとしてるだけあって、感激屋である。斜に構えた普段の態度は、だからこそ偽物の感動には騙されないぞ、という覚悟の現れ。
半泣きになりながら、
「わかった。俺にまかせとけ。つーてもなんもできんけど、キャプテン大丈夫や、あいつは絶対来てくれる。間違いない」
「空堀君ホンマお調子やねんから。せやけど無理に追い詰めすぎると、余計悪うせ

えへんか状況を。ウチらのことはともかく、彼自身のやなー」
「いや、殻に篭る人間はむしろ、その殻を破るキッカケを無意識に探してるもんや。そのキッカケになりゃあええ」
「そんな都合のええもんかなぁ……まあとにかくわかった、逃げりゃええんやな」
「そ」
「俺も火の手が上がらん程度につついてみる」
「あっ、ちょー、あんま変なことせんほうがー」
「だーいじょうぶやってまかせとけ。難波さんちょっと怖がりやね。オフェンスの選手やのに」
「ウチが怖がりやのーて、あんさんが前行き過ぎねんて。危なっかしいてしゃーないわ」
「そおかなあ」

のちのバカップルも最初はこんな感じだった。おたがいに、気になるから、小さな欠点も目に付く。

――大地、廊下で取り巻きに囲まれた明日葉と出会う。女というのは不思議な生

き物で、金や権力の匂いを男よりもよほど敏感に嗅ぐ。
　明日葉は言動はアレっぽいが、やはり旧家で鍛え上げられただけあって礼儀作法には煩い。目ざとく大地を見つけると、
「……こんにちわ！　上町先輩！　この間は、どうもありがとうございましたー！」
「……あ、ああ、西九条さん……あのえっと、別に僕、お礼言われるようなことは……」
「いいえ！　見学していただいてとっても嬉しかったですー！　また、ぜひ来て下さいー！」
「は、はぁ」
「あっ、そうですー！　今度の日曜日、私達1年生の初試合なんです！　もちろん私は出ることはできないと思いますけども、お時間ありましたらぜひ、お越しくださいませ～！」
「あ。あの、それなんだけど」
「では、失礼します！　さようなら」
「え。あ、はい、さよなら……」

ただ昔から、人の話は聞いてない。
取り巻き、後ろから指を指して、
「明日葉さん、あの方は？」
「上町先輩という、私達のサッカークラブの……えーっと……えーっと……偉い人、ですー」
「えらいひと？　監督とかですか？」
「そん、な感じのような人、だと思い、ますー」
「はぁ。……なかなかイケメンですねぇ」
「そうだよね、背も高いしなんかこう、姿勢がよくて」
「なかなかどころかあたし、あの人だったら全然ＯＫだなー」
「ねえねえ明日葉さん、ひょっとしてお近づきになったりとかは？」
「ふふふふ、きっと無理ですー。
あの方にはすでに、キャプテンという素敵な人が」
「あらら。
やーっぱいい男には、虫がついてるのよね～」
「ふふふ……」

潮目は、すでに変わっていた。
人の見る目も。
同じ淀みに漂ってると思い込んでいるのは、大地だけである。
そして、運命の潮目には、誰も、逆らえない。

■12　頼りない船出

――日曜日。丸珠公園第三球技場。のちのミラクルズの実質ホームグラウンド、第二球技場の隣にあるオープンスペースの、施設といえば簡便なベンチが並ぶだけ、でも下はボロボロとはいえ芝。

ここから、彼女たちの新しい冒険は、始まった。

空はハッキリしない、どんよりとした花曇り。まあ、涼しくて動きやすい、といいように考える。

新年度初試合の相手は、高校女子サッカー部。高校選手権で地区代表経験もあるなかなかの強豪だ。彼女達も新チーム初蹴り、もちろんＤＳＣが前年ＱＣ（クイーンズカップ）ブロック代表だと知っている。モチベーションは非常に高い。

しかしこちら、三十六が盛り上げるのは、どちらかといえばピクニック気分。

「さあ皆さん今日も頑張りましょう！
終わったらキャプテン一家お手製のスーパーお弁当タイムですっ!!」
「「わ〜い！」」
「さらに今日は！　応援団に来てもらいましたジャーーーーン!!」
「ども。援団の千林です。今日は力一杯、応援させてもらいます」
「「……」」

その千林哲哉は異様な風体でやってきた。学ランに鉢巻白手袋高下駄そしてサングラス、お馴染み古典的援団ファッションに、首にバルセロナのタオルと小ラッパ、左手にはガンガン殴る小太鼓、右手にはよく街中に捨てられている捨てのぼり。「ＤＳＣ」と縦書きでスプレーで吹いてある。

「「カッ、カッコ悪い!!」」

思わず流乃とはなこが指さして本音を叫んだ。

「……す、すみません、サッカーよく知らなくて昨日突然言われまして。もちーと

勉強します……」
「いやごめん、なんか忘れてる思たらテッちゃんに連絡するの忘れてた」
しかし、でかい図体を丸めて謝られると、なにも言えない。そう、応援団がたとえ一人でも、来てくれるなんて。
「と、とにかく声はでかいんでコイツ。力になります。そしてあちらには大量のサポーターが!!」
「「おおっ!?
……どこ？」」
五人ばかりの同世代っぽい私服の女子が、三十六の呼びかけに手を振った。1人はごついカメラを持っている。
「新聞部の樹先輩に、えー演劇部の野田さんと、それから文藝部の夏目さん、美術部の岡本さん、ブラバンの小澤さん……
ライト兄弟初飛行の時も!!

見学人は五人でした!!!
これはゲンがいい、これはゲンがいい！」
「なんとまぁ……
空堀先輩、顔広いですね！」
「いや、文化部は横のつながり強いんです。おたがいに応援応援で。僕も興味全く無い展示会とか行きます」
「興味ないんですかぁ!?」
「いやいや、それは言葉の綾子さんで」
「なんや、意外に女たらしや」
「たらせてんねんやったらせっかくの日曜こんな埃っぽいとこへ来ずにデートに行ってますッ!!!」
「「あはは……」」

今も昔も、三十六は文化系女子にべらぼうにモテる。今も昔も、本人は気付いてないが。

「……うん、まあせやけどなんやいつもより楽しなってきたで～～！　お祭りっ

ぽーなってきたわー！」
「そうだね、ナナちゃん！」
「観てくださる方々のためにも頑張ろう、みんな」
「「はいっ!!」」

ナナが叫ぶと、ももと忍も同調した。
うん、それは、事実。

問題は質の変化である。
新しい層の観客が来た。ここが重要だ。
量の変化は、あとからついてくる。

結局、ＦＷ三人にジャンケンしてもらって運良く本人には運悪く、センターの愛が外れて代わりに可憐。さすがにジュニアユース代表に、もちろん練習でずば抜けた力を見せつける可憐先発に、文句はない。
あとは昨年度と同じ。
ＧＫ、忍、ＤＦ、スイーパー一人残りでも、前に胡桃、左に蘭、右にはなこ。

ＭＦ、センター低めユミ姉、右高めナナ、左高め美緒、ゲームキャプテン。ＦＷ、センターに可憐、右にマキ、左に流乃。
　ナナ通称「たこ焼き」、１―３―３―３の大変プリミティブな形だが、等間隔で広がるポジションがわかりやすくおたがいサポートしやすく、若年層で使われる。

　そして。

「……えっとあの、それで、キャプテン、例の……コーチをやってくださる、という方は……」

　らしくなくあらぬ方向をずっと観て、らしくない怖い顔をしたままの腕組みを崩さないキャプテンに、恐る恐る吹田千里が聞く。

「……来ます。必ず。ちょっと事情があって、遅れてるの」
「は、はぁ……」
「……もしその人が来れんでも、コーチ監督がおらんでも、ウチらのやるこた変わらへんで。

倒れるまで全力疾走、これや、千里」
「は、はい！」
「1年の子ら、ちゃんと準備しときや！　もちろん愛ちゃんも！　いつどこで出番あるか、わからんで！」
「「はいっ!!」」
「ようし!!
……キャプテン」
「……ん」

想いを断ち切るように、勢い良く振り返った。
もういつもの、キャプテンの顔だった。

「……みんな。
今日も今までと同じ、大切な事は二つだけ！
Never GiveUp!
絶対に諦めるな！　諦めなければなんとかなるとは限らないけど、諦めればそこで終わりです!!」

「「はいっ！」」
「Go Ahead!
前へ進め！　運命はその足でその手で切り拓くもの！　立ち止まっていても頭で考えていても、何も始まらない!!」
「「はいっ！」」
「いくぞ！
『どきどき・サッカー・クラブ』、出陣!!」
「「はーいっ!!」」

ああ、いいなぁ……
若手1年生達は、高揚する気分に酔った。
2年生3年生は、朝からちょっと変だったキャプテンが、いつものキャプテンだったことに安心した。
どころか、いつもより気合充分。

パーッ……パーッ……

哲哉の吹くチャチな吹きものの音さえ、曇り空を吹き飛ばすように聞こえる。ベンチに腰を下ろした女の子達にペコペコ礼を言う空堀、たくさんの大きなバスケットの横でニコニコと手を叩く、長居姉妹。

いつもと少しだけ違う風景を背に、選手たちは飛び出していった。

§

……ぐったりと重い肩と眼の奥、目が覚める。

どんよりと時間を見た。微妙だ。急げば間に合うし、ブッチするにはあり過ぎる。

のろのろと階下に降りて、シン、と静まるダイニングで水を汲んで、呑んだ。冷たいのが、胃腑を刺激して多少、しゃんとする。

そのままパジャマでソファに倒れこんで、うつ伏せに顔を埋める。

「……」

手探りでＴＶのリモコンを探り当て、点ける。

三秒で消した。
手探りでテーブルの雑誌を探り当て、取る。
頭の上で丸めて、ぼとり、落とした。
手探りでテーブルのお菓子の袋を探り当て、もぞもぞと中から一つ、取る。
口の中に放り込んで、ぽり、ぽり……
かりんとうか……
ん？　いつもと違う。
そうだ、これ美緒が「沖縄の黒糖で作ったカリントウだよ、美味しいよ」って。

新しい味は、母に教えねばならない。
起きて、小皿を取りに行って、ぱらぱらと、五本ほど盛った。祭壇に。お行儀よく自分も二本目を、齧りながら。甘くてコクがあってでもしつこくなくて、うまい。

「……かあさん。これ。かりんとう。美緒が」

くわえたまま、手を合わせた。
その時、声が、聞こえた。

奇跡は起きない起きないと言われるが、ちいさなものならしょっちゅう起きる、そう、この時のように、人の心の、中でなら。

大地。
なにしてるの。
行かなきゃ。

ハッ、と全身の目が覚めた。
僕は……僕はなんて馬鹿だったんだろう。

お前がサッカーをやってたのはなんのためだ。かあさんにいいところ見せたいためだろう。そのかあさんなら、いま今日ここで、なんて言う。

……答えはもうさっき聞いた。
大地、試合中の緊急出動より手早く身支度を整える。顔も洗わず歯も磨かずむろん朝食は……かりんとうを手に、走りだした。

僕の、ことなんて、どうでもいいんだ。
どう思われようが何を言われようが。
かあさんをいや、
美緒を、妹達を、三十六を難波さんを明日葉ちゃんをみんなを、喜ばせるのに、
僕の力が、要ると言われるのなら！

身体中にマグマが漲ってくる。
起き抜けに走らされた身体が反応しただけじゃない。間違いなく体の奥底に眠っていたものが、目覚めた。
そのマグマが、凍った一年の時を、溶かしてゆく。

■13　真打ち登場

『……まずい……まずいまずいまずいぃぃぃ……」

ナナは心で舌打ちを繰り返しながら、ボールを奪い合うディフェンスラインを遠くから見つめていた。

相手の試合運びはさすがに巧い。熟年の監督さんはタッチライン際に立ち、精神論ではなく具体的な指示を的確に出す。きっちり組織されたオーソドックスな４―４―２が、二段津波のように押し寄せる。

こちらの弱点は明白だ、万が一をカバーするためのスイーパーを置いてるが故に、その横にスペースがある。そこを突かれる。加えてスイーパー・ももは鈍足で、そこに侵入してくるＦＷを捕まえると、逆方向にぽっかり穴が開く。

そこへ。

「いかんッ！」

洒落にならなくなってナナは自陣へ駆ける。釣り出されたももの手前から、そのスペースへパスが出て、それをもう一人のＦＷに拾われる。はなこが止める、胡桃とももももすっ飛んでくる、それが、罠だった。

折り返し。

先程パスを出したＦＷにもう一度返って、どフリー、撃たれる。

振られ・振られて、さしもの忍も、対応できない。

「わ～～～～～～～っ……」

美しく決まった変則ワンツー・ゴールに、敵陣が盛り上がる。そりゃあそうだろう、こんなキレイなの、練習でもそうは決まらない。

『……やっぱそろそろフラットな４バックにせな、どんならんわこれ……』

しかし試合中に、そんなことができるはずもない。

「……落ち着いてしっかりいこー！」

手を叩いて抽象的なフレーズを叫ぶのが、精一杯である。

――その肝心のナナは、ガッチリ捕まえられていて、手も足も出せない。よくないことに全員にあのＱＣ全国大会でのナナ完封のトラウマがあって、パスを出すことさえ、それを取られるリスクを恐れて避けがちになっている。

だけではない。敵はこちらの人手の少ない中盤で巧妙にボールを回して、前線と守備ラインとを分断する。

頼みの新戦力可憐は、トップ中央で孤立したまま。右のドリブラー・マキも、左のスピードスター・流乃も、まともにボールに触らせてもらえず、試合から消えていた。そのくせ、ナナと美緒の仕事量はヤケクソに多くて、疲ればかりが溜まっていく。

『……ちくしょう……ちくしょう……』

そんな強い相手やないのに。そんな巧い相手やないのに。なんで、なんでこんな

に差があんねん。なんでこんなに、なんもできへんねん。

……それやったらウチが一人でなんとかしたるわ!!

なんとかボールを奪った美緒が、パスをくれる。人についている相手守備陣の隙を縫い、ドリブルで迫る。1点を取り返そうと、全体が前がかる、囲まれたナナ、バックパス、美緒、すこし遠い、ヤバイッ！

奪われる、カウンター、ユミ姉の横がら空きで、突っ込んだ蘭が簡単にかわされる、無人の荒野を駆ける敵ＦＷ、ももと胡桃が同時に飛んでいって、

「あかんってぇえ!!」

真ん中すっぽりスペース、ぽろりと出されて、そこにもう一人のＦＷが来て、持って、前へ、前へ、前へ。

忍、耐えに耐えるが、最後は、

股抜き。

「「ああ～～～～～～～～～……」」

観るもの全てから、ため息が、漏れた。
簡単なことだ。
敵はこちらにない大きなものを、持っている。
コーチング、戦術、作戦、指示、鳥の目でピッチをゲームを観る人物……監督。

こんなにも変わるものなのか。
そういえば聞いたことがある。
「いい監督はそのチーム力を一〇％も上げられないが、悪い監督はそのチーム力を半分にする」
と。
悪い監督すら居ないウチらはじゃあ、ゼロか。

カウンターへの警戒、追う相手を被らせないこと、スペースを埋める指示、もちろんもっとチームがまとまればおたがい声を掛け合ってできる、けど、けど今は……せやけどベンチにいる1年の子や愛ちゃんにそれを期待するのは無理ってもんや

し……

ナナはなんの気なしに、ベンチを見た。
そしてそこに、一枚の紙を手に屹立する、見慣れぬ人影を見た。
逆光だったこともあって、ナナにはそれが誰か、わからなかった。でもその途端、背中がゾクゾク、した。

『……来て、くれたんや!!』
「ナナアッ!!」

そんな声を、この人のそんな声を、ウチは後にも先にも、聞いたことが無い。

「オオオウ!!」

絶叫で美緒に応えて、セットプレー守備に走った。自陣ゴール前を直接で狙える位置、いつもならナナは守備を免除されカウンターで相手ゴールを狙うために最前線に残った。だが今は違う。可憐にその役目を譲ったというわけではない。なんだ

か無性に、相手のボールを奪いたく、なった。

位置につく、キッカーがボールを上げる、ふわり、胡桃が相手最長身選手に合わせて跳ぶ、それは囮、さっき1点目を入れたエースに、合う。

ガチンッ!!

音が聞こえた、音が。

頭ごと吹き飛ばす勢いでそのヘディングシュートを止めたのは、我らがキャプテン。こぼれ球、もちろん拾う、ゴールめがけて、ドリブル開始。

今度は逆に、相手カウンターを警戒しすぎて、周りのサポートが遅い。マキ、流乃、そして可憐、どこに出しても恥ずかしくない、チョッ速の選手がずらり揃って、お見合いをしている。

……潰された。

ピーーーーーーーーッ……

そこで前半終了の笛。
転がされた相手に手を出されて「すんません」と起き上がりながらしかし、ナナは、口の端で笑いを噛み殺した。口の中で言葉を噛み殺した。

『……見ってろよう……後半んんんん……』

§

「……お兄ちゃん!!」

美唯にはちょっと動物みたいな感覚があって、まだ来ない来客を「もう駅まで来てるみたい」と言ったりする。真後ろから来た大地を、誰よりも早く、見つけた。
「お兄様！」「大地さん」
三姉妹の声に、三十六、跳び上がってすっ飛んでいく。
「大地!!
来てくれたんか、待っとったで、今ピンチなんや！」
が、声を掛けるまでもない。

すでに鷹の目よりも鋭い視線をピッチに貼りつけたまま。
もう俺の素人説明なんか、要らん。
「……こっとん！」
「はっ、はい！」
「メンバー表！」
「はいっ！」
慌てて出してくれたそれを、大地の手に押し付ける。
「ほらこれ、今日のメンバー表！　どないしたらええ!?　なにをしたらええねや!?」
「……ハーフタイムまで待とう。観ないとわからない」
「あ、あ、そやな、すまん。黙って座ってます！」
「……いやひとつ、やって欲しいことが」
「あ、なんや!?　なんでもすんで!?」
大地はピッチから片時も目を離さないまま、言った。
「彼のラッパ、止めさせて。いいプレーで拍手、悪いプレーにブーイング。判断は

自分の好みでいいから」
「ああ、わかったわかった、はい、そうさせます」

まるで甲子園球場のライトスタンドのように四六時中吹き物鳴り物を響かせていた千林の騒音が、止んだ。

静かになったピッチサイドでジッ……と見つめる大地。それを見つめる三十六や三姉妹と、それから……ベンチ組。

『あっ、あれ？　こ、この人こないだ空堀先輩と一緒だった……あれ？　あの人だっけ？　こんなカッコイイ？』
『わぁ……来てくださったんだぁ……』
『上町先輩すごいですー。居らっしゃるだけで安心してきましたー！』
『この方が……コーチサン……ですネ？』
『……ふふふ……』

「でやこっとん、連れてきたで我がチームに足りなかった最後のピースを!!」

「さすがです！　空堀先輩！　ステキ！」
「わはは、褒めてええで俺を！　なんもしてへんけどな！　きっとそこの長居美人三姉妹にせっつかれ！」
「ふふっ、空堀さん、違いますよ。せっついたのは姉で」
「あんな姉さん、はじめて見ました」
「うふふふふ、うふふふふ……」

居るだけで、ベンチも盛り上がる。まだ何もしていないのに。やはり、天性なのだろう。あるいは、選手としてよりも。

「帰ってきてくれないかな」が「あの時辞めてよかったな」に変わるのには、まだ気の遠くなるような時間が掛かる。
が、ここがその始まりだと誰もが認め、そして、ここにいた誰もが、そこに居合わせた幸福をまるで自慢話のように後年語った。

――ハーフタイムの、笛が鳴った。
ここからが本当の、勝負である。

§

「……大地君……
……コーチッ!!」
「美緒。……みなさん」

事情は、キャプテンのすがりつくような視線で全て呑み込んだ。だが大地、念を押す。

「……僕は、ここに居ても、いいですか」
「あんたアホかぁあ!!」

ナナが叫んだ。

「あんたの指示首長うして待ってんねやあ！　余計なこと言うてんとさっさと作戦教えろぉお！　あいつらに勝てる魔法の作戦をおをおをおをおを!!」

「……ふっ」

思わず笑みが零れる。みんなも強張った表情を崩した。

「よし、敬称略で行くぞ。質問は後で受け付ける。ベンチのみんなも！」

古都も入れて一七人の輪の真ん中に、大地いきなりしゃがみ込んで、地面に石で丸を描く。フォーメーション図だ。

丸を４つ、４つ、２つ。

「……スイーパー置いて前三人では、あのチームには通用しない。フラットな４バックにする。その前に同じく横に四人並べた中盤。そして２トップ。

要は相手と同じだ。４―４―２。

前線とディフェンスラインをコンパクトにして、選手間の距離を詰める。今まではそれが広がりすぎてて、サポートが遅いんだ。だからそこを、まず詰める」

顔を上げ、一人一人を上目遣いで見上げながら。まるで母に玩具をねだる少年のように。

「４バック、右からはなこ、蘭、もも、流乃」

「でも、私、フラットは」「ディフェンス!?」

「質問は後だ。
中盤右から、マキ、ユミ姉、美緒、ナナ。
マキとナナは高めでもいい」
こくり、こくり、うなずく、みんな。
「2トップは可憐と……胡桃だ」
「はいっ！」「……」
立ち上がる。
ぽいっ、とその石を軽く投げてパシッと掴む。そんな動作さえ、やたらサマになっている。
そしてひとりひとりに、瞳を見つめながら語りかける。まるで、優しく甘く、かき口説くように。
「はな、前のマキが安心して突っ込めるようにサポートするんだ。あとのことは考えるな。サイドバックの本領は全力の無駄走りだ。走りまくれ。へばったら代える、だから安心してへばるんだ」
「わかった！」
「蘭。フラットにするから、君の身体能力の出番だ。ももの足をカバーするんだ。それから、放り込まれるロングボールは全部叩き落とせ。もう胡桃は居ない。君が

頼りだ。頼むぞ」
「おうッ！」
「もも。不安になることはない。君の守備センスとバランス感覚はピカイチだ。スピードで抜かれても蘭も流乃もいる。勇気を持ってラインを上げて、中盤を助けて欲しい」
「う、うん、やってみる！」
「流乃。ディフェンスやれなんて一言も言ってない。待機場所がここってだけの話だ。君のその圧倒的なスピードを是が非でも生かしたい。サボっててていい、ただ隙を見つけたら、錐のように槍のようにそこを突け」
「おっ・けー」
「忍。フラットラインが上がるので、今以上に前へ飛び出す意識がいる。今までに囚われるな。前へ出ろ。とにかくなんでもいいから……ボールがゴールを割らなければ、ＧＫの勝ちだ。勝て、忍」
「うむ！」
「マキ。何を遠慮してるんだ、君のテクニックはこんなもんじゃないだろう。難しく考えるな。縦に突破してクロス、横に切れこんでシュート、君の仕事はこれだけだ。走って、撃て、パメラ！」

「ウン、わかった！」
「ユミ姉、君もだ。全体を見る必要なんかない。それは美緒がやる。君は狂犬のようにボールへ喰らいつけ。ボールホルダーを殺すんだ。そのプレスで、チームのテンションをカチ上げろ」
「了解！」
「……ナナ。君は司令塔だろう!?　もっと人を使え。もっとボールを走らせろ。信じるんだ、チームメイトを。彼女たちは君が思ってるより、ずっとやる。ガツンガツンパスを出せ。日本代表の司令塔のパスを！」
「おっしゃぁあ！」
「胡桃。突然ですまないが、バスケ時代を思い出してくれ。ゴール前を制圧するんだ。君より高く飛べる人間は、この二二人の中には居ない。空飛ぶボールを全部奪って、可憐へ渡せ。いいな」
「ん！」
「可憐。君への指示はたった一つだ。これからも僕が指揮をとる限り君にはこの一つしか言わないだろう……点を、奪ってこい。ここで、逆境で点を奪ってこそ、エースだぞ！」
「はあいっ!!」

「ベンチのみんなも全員、いつでも飛び出していけるように準備するんだ。いいか、君たちは誰かの代わりのカードなんかじゃない。ここぞで切るために手元に温存してある、切り札だ！」
「「はいっ!!」」
「……キャプテン」
「はい」

みんなが二人を見つめた。
見つめ合う二人を。

「……いいチームだ。勝てる。勝とう」
「はいっ!!」

今日はじめて、キャプテンが笑った。
誰のよりも効果的な指示だった。
それを見て大地もはじめて、微笑んだ。

わ……

とみんなひっくり返りそうになる。勢いに呑まれてたけど、改めて見ると……すっごい、美少年。

そしてそのおっとこまえが、メンバー表を見ながら、聞く。

「……この、NeverGiveUpと、GoAheadが、チーム・スローガン？」

「うん。諦めちゃダメ、前へ行こう！」

「……諦めずに、前へ出て、何をするのか、があれば完璧だね」

「あっ」

そういえばそうだ。

なんでそんな簡単なことに、こんなにたくさんいて、気がつかなかったのだろう。

頑張るのは、目的があるからだ。

こんなことすら、人は渦中にいると、気づかなくなる。

「……どうしよう？」

「フッ……
じゃあ、奇跡でも起こすか」

まったく、男前にもほどがある。クラクラ立ちくらみがする。こんなキザなセリフを、こんなにさらっ、と。

「よし！　円陣だ!!」
「「はいっ!!」」

全員が輪になった。特別に三十六も入れてもらった。一九人の音頭を、生まれたてのコーチ、上町大地が取る。前置きは無し、為すべきことを、簡潔に。

「NeverGiveUp!」

絶対に諦めるな。

「GoAhead!」

前へ出ろ。

「and……
DO MIRACLES!」

奇跡を起こせ。
それぞれの奇跡を。

「「ヤアアアアアアアアアアアッッ!!」」

腹の底から鬨の声を上げて、抱く仲間の肩を、強く強く、揺すった。

■14　追撃

「いやぁ……あたし、いろんなゴール決めてきてますし、これからも決める気満々ですけどね？　あんーな簡単なゴールは、もう二度と無いんじゃないかなぁ……」

可憐はあのゴールの、つまりミラクルズ初ゴールを語る時にいつもニヤニヤしながら、「簡単」を強調する。

「覚えてます覚えてます、ええもう、後半開始すぐ。
最初のとっかかりはユミ姉さんのタックルです。バランスとか慎重にとかそういうの全部要らなくなったユミ姉はマジ恐ろしいッスよ。普段ほら超優等生だからなんか溜まってるもんあるんじゃないッスかねぇ？　野獣です野獣。クワーッって突っかかってって、バスンッ！って奪って。相手ゴロゴロ転がってましたよ」
「……で、一旦下げたんですもも先輩に。距離がぐっと近くなってて、ももさんにも余裕あって、スッ、とダイレクトで、これも近くなってたキャプテンに。いやあもう、指示とフォメ変更効きまくり」

「……んでキャプテンがフッ、とまた得意のワンフェイク入れて時間ズラして、ナナ先輩へ。そう、ホットラインです。

そうなんスよね、ナナさん『から』のパスが素晴らしいのはみんなわかってたんです問題は、ナナさん『に』出す選手が居なかったんッスよ。

これ、キャプテン一個下げることでできた。キャプテンとナナさんのゴールデンコンビですよ。

フツー、キャプテンの攻撃力見てて負け試合で一個下げようなんて、思わないですよー。むしろ前へ持って行きたくなるのがフツーで」

「あ、そそ、でね、ナナさんでもマークされてて、相手のサイドバックに、CBも飛んできた。相手にもここがポイントだってわかってたから。

さあそこで。

前半だったら孤立したナナさんの横を駆け抜ける我らがスピードスター、流乃先輩！

ぴゅーん！

いつものあの超速ブッ飛ばして駆け上がる、相手が『アッ』と思ったときにはもう遅い。ナナさんのパスが、確か股抜き……えーっとこのへんからあたし半分ゴール向いてたんでうろ覚えなんですけど……で、すぽーんと出して。

それをパクッと取った流乃さんがまたギャーンとコーナーフラッグまですっ飛んでくんです。要らないって言うんですよね（笑）そんなとこまで。

あん時は流乃さんも興奮してたんですよきっと。

んで、ズドーンとクロスが上がる。これがまった変ないつものキュイーンって曲がるおかしなクロスでねぇ。あんなクロス迎撃しろって言われたって、初見じゃ無理だ。そう、これもコーチのなんとかってヤツですよ、えーケイ、ケイ、まなんでもいいや」

慧眼。

「で、そうそう、コーチの采配ズバリと言えばなんといってもその後ずっと使ってる胡桃さんのポストマン。

ぽーん！

びっくりしましたねー。あたしもそりゃＤＦと競りますしそもそも胡桃さんとだってそれまで練習でやってたはずなんですけど、やっぱりね、天職ってあるんです。胡桃さんダンク叩き込む攻めの人で、リバン取りに行く守備の人じゃないんッスよ。

高いんですとにかく。

ぶわ～ん！

って黄金バットみたいに飛び上がって……えっ、君の歳で黄金バットを知ってる

のかって？　あ、あたし割と朝のケーブルでアニメ観るの好きなんです。子供向けの。子供っぽいでしょ？　あはははははは……

いいじゃないですか別に!!

で、ニヤッと笑ってあたしにアイコンタクト。いやま、コンタクトしなくても宛先あたししか居ないからいいんですけど、『頼むぞ』って。

そりゃね、もうね、頼まれたらね、叩っ込むしかないじゃないですか。

撃ちましたよ得意のジャンピン・ヴォレーを。

気持よかったなーあ！

最っ高のボールが最っ高のタイミングで、どフリーで来たんですもん。練習でだってあんなの滅多ないですよ？

ぽーん・ぽーん・ぽーん・ぽーんで繋がったから、も敵のマークずれずれで、あたし初めてフリーになったんですねあの瞬間。

で、といやーっ！って。

ずばあああああん！

ずっばあああああああああああん!!」

満面の笑顔で、わめく。

「嬉しかったー！
やっぱどんなチームでもチーム初ゴールはなにより嬉しいですよ。これで認めてもらえる、って思えるっしょ？
ＦＷは、やっぱりゴールですからね」
「や、それよりなにより、前半なにもできなかったあたし達が、選手交代もしてないのに、なにか特別なことが起きたわけでもないのに、ただコーチの指示を聞いただけで、いや、あー、ま、それが特別なことなんスけど、かーんたんに、お豆腐ぐちゃって潰すより簡単に、ゴールできた。
これがスゲエ、って。
これでやれる、って。
あたしら無敵だ、って」
「ボール抱えてダッシュで帰って、ズドーンと置いたときにはもう、『さあこい！さぁあこい！』って感じですよ。みんなももうものすごい迫力で、みんなオーラ出てんですよぶわーって。
あの瞬間の燃え上がる感じ、いやあ今思い出しても鳥肌が立つわ」
「……ええ、２点目はナナさんです。

その後すぐです、すぐ。
あれは……そうだ、ピンチになりかけたんだ。相手の一番巧いヤツが単独ドリブルで仕掛けて、もも先輩足滑らせて突破許したんです。
1点目でチョーシ乗って前掛かってたもんだから広いスペース走られて。
でも、そこで蘭姉ちゃんですよ。
ギュワーンって走って追いついて身体ガッツーン当てると相手バランス崩して、そこへ飛び出してきた忍様！
もちろんペナルティエリアの外なんで手使えないから足で器用にさばいて、ポーンと今度は右サイドへ展開です。一気にマキさんへ。
マキさん、いやあ、ノってる時って普段できないようなことができちゃうんですよね。いつもならすぐ突っ掛けてったと思うんですけど、無いことにそこでタメて。
で、その稼いだ時間で横を駆け抜けるのは、はなこ先輩。はなさんも走ると速いんだこれが。あたしはなさんホントはＣＢやボランチよりサイドバックが合ってると思う。
そう来られると、相手にゃさっきの流乃さんが印象残ってるっしょ？　縦、つまりはなさんの方切るんですよね。
さあそうなりゃブラジリアン・マキちゃんの本領発揮、中へ何歩かぽーんぽーん

ぽーんと跳ねるように切れこんで、
ヴオリヤァアアアアア！
って豪ー快なミドルっす。
ギュオオオオオオオン！
って。
でも残念！　あとほんの二〇cm精度足りなくて、クロスバー直撃！
びよよ〜〜〜ん！
ってバー震わせながら跳ねて、あたしと胡桃さんの頭上超えて、ああでもそこへ、逆サイから走ってきたナナさんが」
「フツーナナさんあんなとこ居ないんッスよ。遠い遠い。やっぱあの試合だったから、だったんじゃないですかねぇ……」
まさかり振り下ろすように、あれ、ナナさんの得意のシュートなんですよね、こう、上から足被せる形の、体重乗せた、あたしの真正面向くのとは違うタイプの、ジャンピン・ヴォレー。
地面でワンバンして、ゴール上面へ突き刺さる、マンガみたいなスンゲーシュート。
ナナさんと言えばテクニシャンってイメージですけど、パワーも凄いんですよ実

は。そりゃあんだけ食ってりゃパワーもあるわな、って感じですけど……って今の無し、無し。

決めてめちゃめちゃ叫えてました。

まいつも叫えてるんですけど、そん時はまた特別うるさく。

嬉しかったんですよね、ナナさんもね。すんごく」

「とにかくこれで、あっという間に同点。

もう二回目にボール持って帰る時なんか、笑い噛み殺すの必死でした。

こんな楽しいサッカーが、あっていいものか、って」

ここで、美しい眉を、いつもわざとらしく、曇らせる。

「あー……

そうだ、でもそれがよくなかったのかも知れませんねぇ……

うん、ウチのチームのいいとこでもあるんですけど、悪いとこでもあるんです。

冷酷になりきれない、っていうか、勝負に徹してない、っていうか。

楽しんじゃう。

途中から。

こういう、ハードな局面を自分たちで切り開いた時なんか特に。
なんかパーッとなんとかっていうのが脳に出て、あそうそうそれそれ、ドーミパン。ドーミパン出てお花畑になっちゃんです」
ドーパミン。
「なんかもーみんなへらへら笑いながらのサッカーになっちゃって。あぁ、あの頃から、あの試合からそうだったなぁ……じゃもう生まれつきだ。治んないわ」
「……あ、もちろん相手も良かったっす。
すぐ修正してきて、ガチガチのヒキコモリ・カテナチオ。とにかく向こうも新チーム初戦ですからね、ＱＣブロック代表相手に『分け』は十分ナイスな結果です。厳しい試合を『分け』に持ち込む、これもサッカーでとっても大切なことですから。
それに、切り替えたんですね。
うん、よく、訓練されてました。
あたし達の初戦が、あそこで良かったですね。ホントに。強すぎず弱すぎず。今思えば……それも小さな奇跡だなぁ……」

■15　祈り

同点に追いついた後、試合は膠着した。
こちらがほっとしたのもあるし、向こうが徹底した守りに入ったのもある。
半ば勝ちを捨て守りに入った相手から点を奪うのは、バルセロナやバイエルンだって難しい。

――残り一五分。静かに見守っていた大地が、遂に動く。一気に二人投入、ユミ姉に代えてエレーナ、はなこに代えて明日葉。

「……エエ、もう、心臓が止まりそうでシた。
『エレーナ！』って呼ばれた時は、わたし……わたし!?って。もうあたまの中、真っ白デス。
でもとっても優しく指示してくださって……」

ポッ、と頬を桜色に染める色白のエレーナ。

「全部覚えてマス。
『エレーナ。とにかく走って、ボール全部奪るんだ。走れ、走れ、走れ、跳べ、跳べ、跳べ。細かいことはキャプテンが指示してくれる、君の脚でチームに元気を吹きこむんだ』
ぽんぽんぽん、って優しく軽くこのあたりをtapしながら。
わー、とにかく走らなきゃ！と思いまシた」

その白い両腿を叩いて笑う。セクハラは、その行為が問題なのではない。誰がしたかが問題だ。
明日葉。

「まさか出番が来るなんて、思ってもいませんでしたー！　人生には『まさか』と『あれれ？』が一杯ですー！
『明日葉、大丈夫。君なら出来る。慌てなくていい、ボール奪おうなんて思わなくていいから、とにかく敵が来たら遅らせろ。ぴったりへっぱりついて、援軍が来るまで時間を稼ぐんだ』

それから、頭をこう、よし、よし、よし、って。よぉおしがぁんばるぞ〜！って思いましたー！」

さすが深窓の御令嬢、妙齢の男性に髪を撫でられるなどという経験は、夢にも無い。これだけで大興奮である。

どちらかというと、二人の能力に期待したというよりも、ハイテンション・ガッツファイターのはなことユミ姉の脚が売り切れ掛かっており、先手を打った。もちろん、相手が分け狙いなら、若手のテストとしても申し分ない。

誰だって初めは初心者だ。

やらなければ、上手くはならない。

――ただこれは、大地のミスだった。

五分も経たぬうちに、大地、雰囲気を読み取る。

選手交代には、実際の物理環境を変える、という側面に加えて、精神環境を、つまり気分を変える、コントロールという重要な役割がある。

時には、その意味の方が大きな交代も、ある。「監督のメッセージ性の高い交代」などと呼ばれる。

知識としてそうしたサッカー指揮の基礎を知らなくても、大地は直感で、自分がそれを間違った方向でしてしまったことに気づいた。

同点あと一五分で守備型の選手を走れる若手に換える、それはさらに守備固め、「このまま分けでいい」というメッセージになる。

それを感じ取った一一人の動きが、より、ゆったりになった。後半序盤に飛ばしすぎた反動もある。相手も得たり、とばかりボールを回して、時間を稼ぐ。

もちろん、それを許すような甘い大地では、ない。

『……代えるなら前だが……可憐と胡桃は上手くいってるし……マキもナナも悪くない。しまったな、ユミ姉を置いておけばあるいは底をまかせてキャプテンを前に突っ込ませる手もあったか……』

だが、新人ホヤホヤのエレーナに一人で中盤底アンカーを任せるのは、リスキー。

『じゃナナをもっとゴールに近いところに置くか？　トップ下で3トップ気味に。攻めろというメッセージにはなるだろう。マキを右ワイドに張りっぱにすれば、センターのキャプテンとエレーナに、二つの選択肢ができる。真ん中でナナ、ドリブル、右でマキ、クロス。

……いや、待て』

ちらり、ベンチを見た。

懸命に声を出し、その小さな身体を伸ばしてチームを応援している少女が、いた。

……こないだ、彼女を、使ってみたいと、思ったんじゃなかったか？

大企業の経営者、オーケストラの指揮者、そしてプロスポーツチームの監督は、男子の憧れ、とよく言う。共通する最大の醍醐味は、「人を使う」悦びである。

クロスなら、マキよりナナの方が正確で多彩なものを持つ。ナナを右ワイドに置いて……これだ！

「ありす!!」
「……」
「ありーーーす!!」
「……は、はいイっ!?」

「……ええ。覚えてますとも。
忘れるわけなんかあるはずないです。
『心臓が口から飛び出す』って言いますけど、わたし、あの時、飛び出して、慌てて押し込み直しましたもの。ふふふふふ」

ありすはいつも困った笑いを浮かべて、冗談を言う。

「わたし、だってあの時は、ほんとになにもできるわけじゃなくて……ドリブルも、パスも、シュートも。だって、つい一ヶ月前まで、サッカーなんて体育の授業以外でやったこともなくて。
自分の名前が呼ばれてるなんて、思ってなくて」

慌てて震える足で飛んでいった。
わわわ、わたしなにか、叱られるようなことを、したんだろうか。

その小さな両肩を背中から抱えるようにして、大地は耳元に唇を寄せた。まるで仕事から帰った若旦那が、愛しい新妻に言い寄るように。
ベンチは何が起こったんだと目を丸くしたし、異様な雰囲気を感じ取る能力なら天下一品の……この人、キャプテンＭＩＯが、ピッチでそれに気づいて、固まった。

あれは……なに!?

「ありす。
トップ下、やってみる？　ううん、難しいことはなにもないんだ。ただボールが来たら可憐かナナめがけて蹴ればいい。二人とも空いてなければキャプテンへ戻す。これだけだ。簡単でしょ？」
「は、は、は……」
「もちろん、ドリブルで持ち込んでもいい。もちろんもちろん、シュートを撃ってもいいよ。ぜんぶ、君のお気に召すままだ。

君はこの瞬間から……この世界の、王女様だ」

なにをゆーとるんだ、という感じであるが、耳朶に吐息掛けられながら甘く囁かれるありすには、たまったもんではない。

完全に、パニック。

「あのっ、あのでもでもわた、わたし、わた、じじじ、自信、とか、ないです!!」

「そんなの要らない。

君は、君であればいいんだ」

きゅっ。

その両肩をひねって、真正面向かせる。瞳と瞳がぶつかる距離で、鼻先と鼻先をつけながら、殺す。

「……責任はぜんぶ僕が取る。

ありす、君と心中だ。

おもいっきり、飛んできて」

「……」

もう、言葉にも、ならない。

カクカク震えるアゴでカクカクうなずくと、

「よし！」

とまた素敵過ぎる笑顔を炸裂させて、両肩叩いて、ピッチに向かわせる。

「……古都！　交代申請！　マキに代えてありす！」

「はっ、はいい！」

そして交代のその瞬間まで、両肩をしっかり、その大きくて温かくて、優しくて柔らかくて頼りがいがあってとにかく……きもちいい、手で、抱いていてくれた。

でも、そうしてるとだんだん、震えが収まって、胸の炎が、大きくなってゆく。

のちの天王寺ありすの必殺技は、上空高くから叩きつけるヴォレー・シュート、その名も『フォーリン・エンジェル』。

天使はこの時、地に堕ちた。

――交代で入るのが未知数のありすだとしても、3トップ気味というのは伝わった。司令塔を外に出すのも、プレスの少ないサイドでボールを持って、ガツガツ攻めろ、という意思だと受け取った。

チームが、前を向いた。

「……でも、最初ぜんっぜんボールが来なかったんです。相手ももう完全に試合を殺しに来てました。

ええ、素人くさいわたしでも、一応トップの枚数を増やしたわけですから、警戒したんだと思います」

「でも、わたしにはだからってなにもできるわけじゃなくて……

あの何分かが、いっちばん辛かったです。

せっかく使ってもらったのに、せっかく期待してもらったのに、なにもできない、あの時間が」

時間だけが虚しく過ぎてゆく。

ついに時計の針は後半を使いきり、アディショナルタイムすなわち、ロスタイムへ。

ああ、今日はこれで終わりか、でもよかったね、おたがい、引き分けて。

……そんな空気を許さないのが、このピッチに少なくとも三人、居た。一人はもちろん大地、もう一人は、

「それを救ってくださったのが、ナナさんです。

やっぱりナナさんは本当に頼りになります。いつでもどこでも、勝利を目指して、小さなことを疎かにせず、一ミリも諦めない」

ナナは自軍と相手のたるんだ気持ちに喝を入れるように、強引な単独突破を試みた。それもサイドではなく中へ、中へ、ゴール前へ。そこには胡桃も可憐も、それからありすもいるし、敵のＤＦも三人四人と集まってくる、敵ボランチも戻ってくる、密集の中に、わざと。

「ナナさんの、仕掛け、だったんですね。

もちろんボール奪われて、こっちも中盤にスペースができてましたから、相手はクリアじゃなくて繋いできてくれたんです。チャンスだ、って。
相手の一番上手い選手に渡って、カウンターです。
ＦＷがタイミングを見計らって飛び出して……」

あともう一人の美緒は、その瞬間、震えた。
「あれだ」と。
あの、何度も何度も録画を繰り返し繰り返し見た、あの伝説のプレーだと。
奇跡だ。
そう思った。
あとはその奇跡を、なぞるだけ。
脚が震えた。本当にそんな都合のいいことが起きるのか、起きている最中でも、半信半疑だった。

「パンッ！
って見事なタイミングでスルーパスが出たんです。ビデオ録ってたら、たぶんパーフェクトだったと思います。あんなパスそう年間何本も出せない、っていう、完

壁なパスが、ＦＷに……
届かなかった、んです。
キャプテンが。
キャプテンが、インターセプトしました。
まるで、そのパスを予想してたかのように」

予想、していたのである。

「わたし達選手は、実はボールやプレーを見てから動いてるだけじゃなくて、大きく予測や想像を交えながら動いています。
だから、その予測や想像から外れたプレーが出ると、時が歪みます。
わたしはいつも、そんなプレーがしたいなぁ、って思ってるんですけど……
とにかくその時、スタジアムの時間が、止まりました。
完全にカウンターアタック体勢に入って重心が前のめりになってた相手選手全員がぴたっ、と止まって、その中を……あれ何人の横を通り過ぎたんでしょう、五人六人、いえもっと……を切り裂く、キャプテンの、
ミラクル・スルーパスです」

美緒は、前のめりになった敵ＤＦラインの背後のスペースに、ぴたり鋭い、パスを出した。
それをただ一人追ったのは、経験も何も無かったが故に予想も想像もできず、であるがゆえに目の前の現実に素直に反応した、ありす。
不思議の国のアリス、時間の国のアリスは、時が止まる中ただ一人駆け抜ける。

美緒は、両指を組んで、膝をついて祈った。
本当はパス・アンド・ゴー、出した後はすぐ走らねばならない。でもこのパスはもう、その必要はない、と思った。
祈る相手は、神様ではない。
ありすちゃん、大地君、お義母さん、みんな、そして、自分。

奇跡を起こすのは、神様ではない。
今ここにいる、私達である。

「……ボールに追いついた時、キーパーが出てくるのが見えたんです。わたしその

時、ふふふ、お恥ずかしいんですけど、『ループシュート』って言葉も知らなくて。
でも、走って迫ってくるキーパーの空いてるところといえば、頭の上しか無かったんです。横から巻くなんて技術、当時無かったですし。だから。
上に、撃ちました」

優しいありすの足首にふわり、と掬い上げられたボールは、キーパーの頭上を越えた。
ゴールへと、美しい虹を描く。

もう数瞬、スタジアムの時間は、止まったままだった。
次の瞬間、いろんな感情が、そこかしこで爆発した。

「レインボーーーーーーーーーッ!!」
三十六は絶叫した。
「「……」」
声にならず見つめるベンチ、古都。
「ああっしゃぁあああああ!!」

我がシュートのようにジャンプガッツで喜ぶ可憐。
「……ガッ！　がああああああああああああっ!!」
ナナは両拳を固めて何度も何度も、振った。

そして、ありすは……
まっすぐに、ベンチへ走った。
迎えた大地、に、飛びついた。
高々と両脇を持って抱え上げる。
羽根のように軽くて、まるで子猫の、ようだった。
子猫と飼い主のように、ただ見つめ合った。
その絶対の信頼に、言葉など、要らなかった。

美緒は、膝をついた祈りの姿勢のまま、立ち上がれなかった。脚が、ガクガク、震えて。
いつもクールな流乃が、でもこの時はまるでチェシャ猫のようなくしゃくしゃの笑顔で、起こしてくれる。
「つたね、みー!!」

「ナイッ・スルーッ!!」
「キャアプテェエエエン!!」
ももと蘭も駆け寄って、支えてくれる。
「美緒姉様ーッ！」
「きゃぷてんっ！　きゃぷてんっ！」
「主将！」
そしてエレちゃん、明日葉ちゃん、忍様。
ベンチ脇で大騒ぎしてる攻撃陣を見ながら、美緒は、誰言うともなく、呟いた。

「……奇跡って、起きるね」
「「ああ!!」」

全員から、完全な同意が得られた。
その時、試合終了の笛が鳴った。

美緒がこの試合で一番嬉しかったのは、次の瞬間だった。笛を聞いた大地は、天使を地に降ろし、空いた両手を広げて、出迎えてくれた。

もう試合は終わった、「キャプテン」ではなく、
「美緒ッ!!」
「コーチ」ではなく、
「大地君ッ!!」
二人は人目はばからず、抱き合った。
きつく強く、長く。

「……ちょっ、ちょー！　激しすぎへんか!?　見てる方が恥ずいで!?　なー！」
「ええからええから。じゃ、ナナも俺とする？」
「アホかぁあ!!　なにが『じゃ』やー！」
「チッ、意外と冷静やな」
「「あはははは……」」

「……はい？
いや、あんな抱き締められ方、あれ一回ですよ。残念ながら。いやホントに。残念ながら。ホントですってば。
ふふふふふふ……」

美緒は笑う。
現場ではもちろん、涙。

■16　その名はミラクルズ

「……ええもう、大宴会です。
シート敷いて、みんなで車座で。アルコールも入ってないのに、盛り上がる盛り上がる。もちろんキャプテンの妹さん達も、見学のみなさんも。みんなテンション上がっちゃってて、到底長居家特製お弁当だけじゃ足りなかったので、途中で私と、空堀先輩と千林先輩でコンビニ走って買出し行って。
ええほんとに、ああいう時男手頼りになります！　私一人だったらどうなってたことか……フフ、ちいさなことですけど、これだってチームの進化、ですよね」

「……大地さん、来てくれて、本当に、よかった」
「お兄様が来ないはず無い、と思ってましたよ」
その和のもちろん中心にいる大地に、美憂と美亜が微笑む。
「いやぁ……
……遅れて、ごめん。美緒」
「許す。

ふふふふふ……」
もちろん当たり前のように大地の横に陣取る美緒、横の美唯が、天真爛漫に喜ぶ。
「お姉ちゃん、よかったね～!!」
「うん」
笑顔で応えて、
でもすぐ、怖い顔を、作る。
「……うん、あのね、それはいいの。
結果として間に合ったんだから。
それより、許せないことが一つあって……」
「ん？」
「……交代前の、ラブ・シーン。
あれは、なに？」
「「そお・だーーーーーッ!!」」

全員があのシーンを思い出す。ありすの顔が、古い体温計のようにキュイーンと赤くなる。

「なにを言われた、なにを言ったー!!」
「言えない言えない、言えま・せ〜〜〜ん!」
「ななな、なんかとんでもないことなってたよね！　鼻と鼻、こんなところでこんなところで」
「いやその前からもう後ろからギュー抱きすくめだよ！
この人この非常時になにやってんだこの人！とか思った！」
「いやいや、そんなことしてないよ」
「自覚すら無いのかー！」
「ひょっとしてありすちゃんのあのマジカル・シュートは、コーチの愛の魔法のおかげ〜？」
「ひ、ひやーっ!!」

ありすもう、ただ縮こまるだけ。

「ちくしょーッ！
あっしにも愛の魔法くだせーコーチー!!
今日出番ないのあたしと愛先輩、だけー!!」

「……かっくり」
「バカ、千里、てめ愛先輩巻き込むな！　愛先輩だって出られないの悔しいに決まってるだろ!?　こんな大勝負に出られなかったことが!!」
「……はてり」
「可憐……お前も、バカだな」
「はへ？」
「……いや、でもホントみんな、凄かったッス。
みなさん、出てるとか出てないとかじゃなくて、このチームの、すべてが」

千林が、優しくまとめた。

「もう俺ホントに、大感激しました！　大感動しました！　いや、惚れました!!
こうなったら今日から俺は、ここの専属応援団ッス!!」
「専属てお前、んなわけにいかんやろ」
「バカモン、援団は応援する団だ。どこを応援しようが俺の勝手じゃないか！　俺こそがサポーター・ナンバーワンだ!!」
「んないーかげんな」

「空堀君空堀君、私もバンバン記事にするから！　まかせて！　私もサポーターね！」
「おう樹先輩ありがとうございます、いい記事書けそうですか」
「こんな美味しいニュースソース、逃してたまるもんですか！　ゲヘヘ、ある事ない事、書くわよお～！」
「私もアイデアが湧いてきたよ～。少年少女蹴球団とか～。書いてみるね～」
「あー、わたしも、今なら勇壮なマーチとか作れそうだわ……学祭はオリジナル行進曲に挑戦しようかな」
「ねねカラちゃん、これ、この凄い試合、劇にしてよ！　脚本書いて！」
「いやいや、はっはっは……　そうやね、いいドラマやからねぇ……」
「タイトルはなんにする？　やっぱり、『ＤＳＣの大冒険』とか？」
「……あ。いや、それについて、みなさんにご相談があるんですけど」

ちょっと居住まいを正す三十六に、注目が集まる。

「『ＤＳＣ』も、とてもいい名前やと思うんです。思い入れもあるでしょうし、全国へ行ったゲンのいい名前でもあります。
けどもやっぱり、ここまで進化を遂げたからには、チームとしてさらに飛躍していくために……名前を、変えた方が、ええと思うんです」
「「……」」

確かに、この試合の前と後では、チームの質が、ガラリと変わった。
スーパーエース、ファンタジスタ、戦術、作戦、マネージャー、スタッフ、サポーター達、そして……コーチ。

「どんな名前にすんのん？　それ次第やで」
「新しい名前は」

ナナは言葉と違って、優しい微笑を宿していた。
わかってくれてる。
三十六、勇気を得て、続ける。

「覚えやすくて、呼びやすくて、美しくて、チームの本質をズバリ表すもの、がえと思います。
すなわち、チーム・スローガンにあるような言葉が、一番かな、と」

全員の顔が、晴れ渡る。
脳裏に同じ、ひとつの言葉が、浮かび上がった。

それは今日、コーチが追加した、新しい言葉。
だからこそ、この生まれ変わったチームに、ぴったりすぎる。

「……みなさん、今、同じ言葉を思い浮かべられたと思います。それで、よろしいでしょうか？」

プロデューサーが、もったいをつける。
言いたくて、ウズウズする、みんな。
コクコクうなずくもの、もう笑っているもの、飛び出しそうな言葉を、手で押さえる、もの。

「コーチ」
「もちろん。いい名前だね」
「キャプテン」
「なんだかずっと前から、その名前だったような、気がするよ」

二人ならんで、笑う。

「……ＯＫ、それではご唱和願います。
私達の！
新しい！
チーム名は！
さん・はい！」

「「ミラクルズ!!」」

一瞬の間を置いて、笑顔が爆発した。

その新しい名と笑い声が、いつの間にか雲ひとつなく晴れ渡った青空に、吸い込まれていく。

ミラクルズは、生まれた。
青空とおひさまの、もとに。

§

これで思い出話を終わる。
振り返ると、「奇跡」とは、「意思のある偶然」ではないだろうか。
意思あるところに道ができ、その道を歩む上で起きる偶然を、奇跡と呼ぶのだろう。

「ミラクルズ！」は、
遠くしか見れない男の子と、
近くしか見れない女の子が、
おたがいを補い合いながら、

ともに長い旅路を歩んでゆく物語である。

奇跡は起きる。
起こそうとする限り。

NeverGiveUp,
GoAhead,
and...
DO MIRACLES!

Episode0「その名はミラクルズ」

【あとがき】

ありがとうございます。ながたかずひさです。
お楽しみいただけましたでしょうか。

一一年前この物語を描き始めた頃から、いつかは「最初」を描かねばならない、と思っていました。まさかその頃は、一一年も一一作も描き続けるとは、思ってもいませんでしたが。

そのはじまりの物語が書けて、ちょっとだけほっとしています。あとは……終わらせるだけですね（笑）

「大地の話」のつもりで書き始めたのですが、やっぱり大地を描くと美緒を描かざるをえません。中３の彼女は今より若干可愛いですね（笑）キャプテンは、だんだんキャプテンになっていったんだと思います。チームと大地の世話をしているうちに。まあ、恋とか愛とか別にして名コンビであることは間違いなく。

これからも連中共々がんばります。

「ミラクルズ！」どうぞご声援ください。

Webにも「ミラクルズ！」の詳しい設定資料などございます。ぜひ一度、ご覧ください。

http://rakken.net/

ご感想、お褒めの言葉お叱りの言葉ございましたら、お気軽にお声おかけください。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

最後にもう一度。

お読み頂きまして、まことにありがとうございました！

二〇一〇年八月　ながたかずひさ

DSC・フォーメーション変遷図
（練習試合）

System 1-3-3-3 "Takoyaki"

Reserve
GK20 千里 **DF17** 明日葉 **MF8** エレーナ **MF21** ありす **FW11** 愛

After 45min... 4-4-2

Reserve
GK20 千里 **DF17** 明日葉 **MF8** エレーナ **MF21** ありす **FW11** 愛

After 75min... 4-4-2

Reserve
GK20 千里 **MF21** ありす **FW11** 愛
OUT
DF2 はなこ **MF16** 由美子

After 82min... 4-4-2

Reserve
GK20 千里 **FW11** 愛
OUT
MF19 マキ **DF2** はなこ **MF16** 由美子

Miracles! Episode 0 (#11) - We Are Miracles! -
Powered by Kazuhisa Nagata